

今帰仁村文化財調査報告書第37集

今帰仁城跡発掘調査報告書VIII

—今帰仁城跡外郭発掘調査報告5—



令和2年(2020)3月

なきじん
沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁村文化財調査報告書第37集

今帰仁城跡発掘調査報告書VIII

— 今帰仁城跡外郭発掘調査報告 5 —

令和2年(2020)3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

序

本報告書は、史跡今帰仁城跡附シイナ城跡の保存修理事業に伴う今帰仁城跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

収録したのは、平成 22 年度～平成 25 年度に史跡整備事業及び活用推進事業で実施した発掘調査の報告書であります。

これまで今帰仁城跡ではさまざまな調査研究が行われ、特に主郭では城郭の主要部分における利用の変遷や王城としての機能をうかがい知ることのできる傑出した陶磁器の出土、あるいは志慶真門郭においては家臣団的集団の居住区の確認など多くの興味深い資料が得られています。以上のように郭内の面的調査によって得られた情報は今帰仁城跡の復元整備に活かされており、着実に整備が進められているところであります。

また、2000 年 12 月には本村の今帰仁城跡を含む県内 9 資産とともに、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として今帰仁城跡が世界遺産登録されており、近年ではグスクにとどまらずにその周辺地域の調査が進むことで、今帰仁城と集落の実像が解明されつつあります。

平成 27 年 10 月には 6 次指定として新たに約 1.3ha が追加され、史跡面積は 34.6ha にまで拡大しております。今帰仁村では今帰仁城跡周辺地域が史跡今帰仁城跡と一体となる文化財として保護・活用を図ることを目指しており、本調査によって発掘された出土資料は地域の住民に公開され活用していくことを計画しております。

結びに、これまでの調査にあたりまして貴重なご指導を賜りました文化庁文化財部記念物課、沖縄県教育委員会文化財課、また、調査を指導していただいた今帰仁城跡調査研究整備委員会の先生方に心から御礼申し上げます。

令和 2 年 3 月

今帰仁村教育委員会
教育長 玉城 奎

例　言

1. 本報告書は、今帰仁村教育委員会が実施した、「歴史の道保存整備事業・公開活用推進事業・歴史活き活き総合活用推進事業」で国・県の補助を受けて、平成23年度に実施した「今帰仁城跡外郭第16次調査」、平成24年度に実施した「今帰仁城跡外郭第20次調査」、平成25年度に実施した「今帰仁城跡外郭第22次調査」の成果を主に収録したものである。
2. 発掘調査、資料整理等で次の方々のご指導、ご協力を得た。記して謝意を表する。
陶磁器に関する所見：宮城弘樹（沖縄国際大学）、柴田圭子（愛媛県埋蔵文化財センター）
遺跡全体の調査に関する事：金武正紀（今帰仁城跡調査研究整備委員長）、花城良廣、赤嶺和雄、（故）高橋誠一、松井幸一、上原靜、田中哲雄、渡辺美季（今帰仁城跡調査研究整備委員）
発掘調査等にあたっては中井将胤（文化庁記念物課）、五島昌也（〃）、上地博（沖縄県教育庁文化財課）、宮城仁（〃）ほか多くの先生方からご指導ご鞭撻をいただいた。
3. 発掘調査は今帰仁村教育委員会によって実施された。本報告の執筆は下記の4名あたり、陶磁器の分類と本書の編集は玉城が中心となって行った。
玉城 靖・與那嶺 俊・有銘 倫子（今帰仁村教育委員会文化財係）
柴田 圭子（愛媛県埋蔵文化財センター）
4. 資料整理は下記のメンバーで行った。
松本綾子 玉城静香 島袋滝子
5. 現地での写真撮影は與那嶺が担当した。遺物の撮影は與那嶺・島袋滝子・玉城静香・松本綾子・有銘倫子が担当した。
6. 出土遺物と発掘調査に係る資料は全て今帰仁村教育委員会（歴史文化センター）において保管する。
7. 報告書の引用・参考文献は巻末に収めた。
8. 本報告書の出土遺物の分類については既刊の今帰仁村教育委員会発行の報告書分類を用いているが、青磁、白磁については瀬戸ほか2007の分類にしたがっている。
9. 本報告書の出土遺物の金属製品の観察表において、釣り針などの湾曲する製品の外径は、外周の計測値を表記している。

もくじ

第Ⅰ章 序 言

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 保存と整備	1
第3節 保存と整備のための委員会	2
第4節 調査体制	2

第Ⅱ章 調査概要

第1節 調査地域	4
第2節 調査経過	4

第Ⅲ章 遺 跡

第1節 位置と環境	6
第2節 遺構	11
第3節 層序	12

第Ⅳ章 報 告

第1節 屋敷地6(外郭16次調査)	13
1. 層序	13
2. 遺構	14
3. 包含層出土遺物	20
第2節 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)	40
1. 層序	40
2. 遺構	40
3. 包含層出土遺物	47

第Ⅴ章 総 括

第1節 今帰仁城跡出土龍泉窯青瓷蓋罐の研究(柴田圭子・新島奈津子・佐渡山理沙)	57
第2節 屋敷地6及び外郭20・22次の発掘調査成果について(玉城靖)	107

図版	109
付図 1・2 同封	

第Ⅰ章 序 言

今帰仁城跡外郭は、今帰仁城内の最も北側の郭で、昭和54(1979)年に追加指定された地域にあたる。その郭の面積は約20,000m²で今帰仁城跡の郭の中でも最も広い地域となっている。また、カーザフ郭は外郭中区の南に位置し石灰岩が露頭した迫地となっている。

本報告では、外郭城外西地区にあたる屋敷地6において16次外郭調査として平成23年度、外郭中区のカーザフ北側城壁と外郭中区カーザフ北側試掘調査について20・22次外郭調査として平成24・25年度の事業として実施した発掘調査により検出した遺構および出土遺物について収録したものである。

第1節 調査に至る経緯

国指定史跡今帰仁城跡の近傍に庁舎場や便益施設等を設置する計画が持ち上がった。目的は史跡指定地内にある駐車場を撤去するための代替として計画されたものであった。事業は北部振興策事業によって今帰仁村が主体となって実施され、平成17年7月には整備を完了し今帰仁村グスク交流センターを開館させた。これら新たな施設が整備されたことによって城内の駐車場が撤去され、史跡が機能していた往時の姿へと復元されつつある。他方、駐車場から平郎門へ向かう導線上に、史跡の理解を促すためのガイダンス広場として、今帰仁城跡の地形模型(S=1/100)を設け、今帰仁城跡及び周辺地域の現況を一瞥できるように工夫している(平成19年度報告)。

さて、上記の整備事業の進捗に伴って城内駐車場は不用となり撤去されたことで、これまで目立たなかった外郭地区が景観的にあるいは史跡散策を目的として利用導線上重要な地域として重要度が増し、整備を早急に行うべき地域として位置付けられることとなった。これに伴って、平成17年度からは従来の史跡整備事業から史跡等総合活用推進事業へ事業を移行させ、早期整備と史跡の活用に関する充実を目指し整備を進めることを計画した。計画については、整備委員会をはじめとする関係機関との議論を重ね、史跡の総合的な活用を目指すこととした。

第2節 保存と整備

外郭の整備事業では城外地区を東西、城内を東区・西区及び中区のおおむね5つの地区に大別している。このうち、今回の対象となるのは城外西地区にある屋敷地6と、中区の試掘調査、カーザフ郭城壁根石確認調査である。屋敷地6は平成22年度より発掘調査を開始した。屋敷地6は遺構の表示を含めた整備を検討し、令和元年度までに整備を完了している。中区の試掘調査は平成24・25年度に実施し、遺構面と堆積状況を確認したのちに埋め戻した。また、カーザフ郭については郭を囲繞する城壁の根石確認調査を行い、カーザフ西側城壁の一部については復元工事を行った。さらに、カーザフ東側及び南側城壁は写真測量を委託業務で実施し記録している。なお、史跡内における調査は遺構検出面までで留める方法を採用に保存することを最優先課題としている。

第3節 保存と整備のための委員会

1981年に今帰仁城跡調査研究整備委員会を発足させ、年1回の整備委員会を開催し、必要に応じて年数回の整備指導をいただいている。なお、事業全体については本中眞・三宅克広・内田和伸・中井将胤(文化庁)、盛本勲・金城亀信・上地博・伊禮良栄・富田志恒・金城篤・宮城仁(県文化課)(敬称略)のご指導をいただいた。

委 員 長	金武 正紀	[元今帰仁村発掘調査アドバイザー・考古学] (平成 22 年度～28 年度)
副 委 員 長	與那嶺幸人	[今帰仁村長・行政] (平成 23 年度～28 年度)
副 委 員 長	喜屋武治樹	[今帰仁村長・行政] (平成 28 年度～)
委 員	池田 孝之	[一般財団法人 美ら島財団理事長・都市計画] (平成 23 年度～25 年度)
委 員	花城 良廣	[一般財団法人 美ら島財団理事長・造園] (平成 26 年度～)
委 員	上原 静	[沖縄国際大学・考古学] (平成 23 年度～)
委 員	田中 哲雄	[元東北芸術大学・史跡整備] (平成 23 年度～)
委 員	高橋 誠一	[関西大学・地理学] (平成 23 年度～26 年度)
委 員	松井 幸一	[関西大学・地理学] (平成 27 年度～)
委 員	渡辺 美季	[歴史学] (平成 23 年度～)

第4節 調査体制

調査体制は村教育委員会が主体となって実施した。事業全体の総括責任者は教育長、課長までが担い、調査担当者は玉城靖、與那嶺俊の専門職員によって充てた。なお当該職員だけでは事業の遂行は困難であることから、補助員として中村善洋、玉城綾、仲宗根理沙、有銘倫子らによって現場・資料整理の調査補助を行った。また、実際の現場、資料整理については複数名の臨時職員にご尽力いただいた。

〈平成 23 年度～令和元年度 発掘調査・資料整理〉

事業主体 今帰仁村教育委員会

事業責任者 教育長 謝花 弘 (平成 23 年度～25 年度)
新城 敦 (平成 25 年度～28 年度)

社会教育課長 上間 恒章 (平成 23 年度～26 年度)
与那 滿 (平成 27 年度～28 年度)
嘉陽 健 (令和元年度)

社会教育課長補佐 長田 光吉 (平成 23 年度～25 年度)
与那 滿 (平成 26 年度)
嘉陽 健 (平成 27 年度～29 年度)
玉城 繁 (平成 30 年度～)

補佐兼歴史文化センター館長 石野 裕子 (平成 28 年度～30 年度)

事務総括 文化財係長 宮里 政有 (平成 23 年度～25 年度)

玉城 寿 (平成 26 年度～27 年度)
新城 亮子 (平成 28 年度)
玉城 靖 (平成 29 年度～30 年度)

歴史文化センター係長 石野 裕子 (平成 25 年度～27 年度)
歴史文化センター館長兼文化財係長 玉城 靖 (令和元年度)

文化財係主事 堀 真一 (平成 26 年度～29 年度)
金城 綾乃 (令和元年度)

文化財係主査 松田 望 (平成 30 年度～)
林 直実 (令和元年度)

調査担当者 文化財係専門員 宮城 弘樹 (平成 23 年度)
玉城 靖 (平成 23 年度～24 年度)
與那嶺 俊 (平成 23 年度～)

調査補助員 (臨時職員) 有銘 倫子 仲村 善洋 豊口 敬 玉城 綾
仲宗根 理沙 玉城 奈緒

発掘作業員 (臨時職員) 玉城 京子 仲原 美代子 内間 美佐子 金城 政利
玉城 光則 宮城 章 大城 いち子 松田 清美
松尾 美智子 城間 達次 仲宗根 健 大城 咲江
松田 健太郎 新城 大地 五十嵐 カヅ子
高良 初江 島 盛太郎 仲里 亨 大城 正泉
奥原 彰太 北東 園子 小泊 敦子 広瀬 和美
安村 明日香 当真 美涼 又吉 春美 松田 洋子
金良 照江 棚原 利香子 塩濱 優子 天久 満
比嘉 風輝 田口 惣 久田 友紀人 新垣 あゆみ
山城 勝 仲宗根 一正 仲本 保徳 座間味 英利
資料整理 (臨時職員) 松本 綾子 玉城 静香 島袋 滌子 山城 留利子
神山 知枝子 上間 恵子 大城 咲江

Ⅱ章 調査概要

第1節 調査地域

今帰仁城跡は概略 10 の郭から構成されており、外郭はその中でも最も北側にある郭で昭和 54 年度に追加指定された地域にあたる。その郭の面積は約 20,000 m²で今帰仁城跡の郭の中でも最も広い地域となっている。外郭を区画する石垣は北側に 150m にわたり良好な状態で残っているが、門については道路で分断され現況が著しく失われている。また、西側についても残りが悪く土壠状になっているだけで、近代になって破壊された可能性が考えられる。外郭一帯は史跡指定以前から開発されてきた地域で、指定当時には屋敷や店舗が 5 軒あり、駐車場が造成され、道路が外郭を東西に分断している状況であった。村では昭和 49~50 年度に主要な部分の用地購入を、その後も平成 10 年度から未公有化の土地の積極的な公有化事業を行い、店舗や住宅の物件補償を行うなど史跡の景観の回復に努めてきた。

外郭の郭内の区画はまず大きく分断している現況道路を境に東側を東区、店舗がある中央は中区、西側を西区として調査を行っている。東区では平成 17 年度に駐車場を撤去し、試掘調査を実施した。平成 18 年度からは面的な発掘調査を行い調査の成果に基づき、造成張芝、遺構表示、城壁の復元等の整備を実施した。西区では平成 21 年度より城壁の根石調査を実施した。一部で内壁・外壁とも根石が失われた箇所があったが、それ以外は概ね根石が地中に残存している状況が確認することができた。また、外郭を分断する道路下から外郭からカーサフへつながる城壁が検出されたことは大きな成果で、東区と同様、城壁の復元整備等を行っている。

本報告となる調査地域は、外郭城外地区にある屋敷地 6 、外郭中区カーサフ北側の調査である。

第2節 調査経過

今帰仁城跡内の発掘調査はこれまで志慶真門郭 (1,700 m²/S55~57) 、主郭 (880 m²/S57~60) が実施されている。これ以後は城壁の基礎部分を中心に調査を実施しているため、面的な遺構確認の発掘調査は平成 16 年度の外郭調査によって再び着手されることとなった。

外郭調査を本格的に着手した目的は、近年進んでいる周辺地域の整備に伴ってこれまで駐車場となっていて活用が図られていなかった外郭地域を、史跡として積極的に活用できる環境が整ったということが大きな理由である。現今の駐車場から平郎門までの利用導線上にあって、史跡の理解を促すためにも導入部分として位置付けることができる地域である。このため、外郭地域の整備は早急に行われるべきとして、現在も早期完了をめざし、調査・整備を進めている。

発掘調査の計画は概略 5 年間を一区切りとして、発掘調査前の地形や石垣等の遺構あるいは地籍等を踏まえて東・西・中・城外北西・城外東区の 5 つエリアに分けて調査を実施することを計画した。外郭整備第一期の 5 カ年間は、外郭東地区（以下、外郭東区）に設定し、平成 17 年度から平成 21 年度（第 2 次～10 次調査）に発掘調査及び整備工事を実施した。外郭西地区（以下、外郭西区）は平成 21 年度から 23 年度（第 11 次～14 次調査）まで根石確認調査を実施した。

今帰仁城跡外郭第 16 次調査(城外西地区)

16 次調査はサカンケーの拝所の前面に広がる屋敷地 6 の発掘調査を行った。調査は與那嶺俊が担当し、調査補助として有銘倫子・仲村善洋・玉城綾があたった。屋敷地 6 は外郭西側城壁に隣接し、さらには第 2 駐車場及び道路にも隣接しているため、集落遺跡の様相を伝えるのに重要な場所であったことから、前年に行われていた西側城壁根石確認調査とあわせて実施された。

今帰仁城跡カーザフ郭 20 次調査(カーザフ郭)

20 次調査はカーザフ北側城壁の根石確認調査を行った。調査は與那嶺俊が担当し、調査補助として仲村善洋があたった。城壁にトレンチを入れ根石確認調査を実施した。14 次外郭調査においてカーザフ北側城壁が旧県道（現在廃道）下に残る外郭西側城壁に被る状態で確認されたことから、カーザフ北側城壁を把握することを目指し、縦断するトレンチ調査をおこなった。

今帰仁城跡外郭 22 次調査(外郭中区)

22 次調査は外郭中区カーザフ北側の試掘調査を行った。調査は與那嶺俊が担当し、調査補助として仲村善洋、仲宗根理沙があたった。前年に行われた 20 次調査において、カーザフ城壁にトレンチを入れて積まれた状況の確認を行ったが、層位の確認が追加で必要だったこと、郭の前面がどのように利用されていたのかを確認するため、調査を行うこととなった。

第Ⅲ章 遺 跡

第1節 位置と環境

今帰仁村は沖縄本島北部、本部半島の北側に所在する人口約9,600人の自治体である。本島北部地域一帯は中南部に比して全体的に山地主体となっているため「山原（やんばる）」と呼称されている。今帰仁城跡は今帰仁村の中でも西端、字今泊に立地している。城地の立地する丘陵は標高約100mをはかり、丘陵頂部の主郭・御内原からの眺望は広く、北に伊平屋・伊是名島、与論島を望むことができる良所にある（第2図）。本部半島の地形的特徴は概して山地部に見られる今帰仁層・本部層（与那嶺層）という中生代初期ごろに堆積した地層群と、低地・海岸部に見られる琉球層群の2つのブロックに大別される。今帰仁層群は中生代三疊紀に堆積した地層で、今帰仁城跡の立地する丘陵一帯から本部町の大堂・浜本付近までの地域に広がっている。特に今帰仁城跡の立地する北西部には、結晶化が進んで硬質、厚さが平均して20cm前後で割れやすい特徴の層状に発達した石灰岩が基盤岩となる。

一方、この今帰仁城跡の周辺には集落遺跡、拝所、御嶽石積遺構などが今帰仁城跡を中心に展開する。今帰仁城跡周辺遺跡の名称はこの関連遺跡群の総称である（第3図）。中心となる今帰仁城跡は今帰仁村大字今泊小字ハンタ原に所在し、城壁に囲まれた面積は約4haの広さを持つ大規模な城である（第1図）。最高所の標高は約100mとなり、基盤岩の中生代石灰岩の丘陵上に位置する。丘陵の頂上部が主郭、大庭、御内原となり、その東は70～80mの深い峡谷をつくり天然の要害となる。東側の谷筋はこの志慶真川が蛇行して流れ、西側の谷筋はタキンチャガーラが流れ東シナ海に注ぐ。今帰仁城御内原の郭に立つと志慶真川の渓谷を脚下に遠く伊是名島、伊平屋島、伊江島、古宇利島を望み、晴れた日には遠く与論島を眺望することができる。今帰仁城跡の城壁は立地する基盤岩の中生代石灰岩という灰色の硬い石を積み上げた石垣で、県内でも有名な阿城である首里城跡、中城城跡、勝連城跡などの白い琉球石灰岩の石垣とは雰囲気が異なる。今帰仁城跡の石垣の総延長は約1.5kmをはかり、屏風上の曲線的に積み上げられている。城壁で囲まれた空間は先の主郭・大庭・御内原以外にも外郭、カーザフ、大隅、志慶真門郭など概ね10の郭からなり、石垣や石段で各郭は結ばれている。10の郭のうち最も北側にあり広い郭が外郭である。城外から外郭へのアクセスを行ったと考えられる門の部分は道路の開削などがあって不明瞭であるが、概ね現在道路に分断された地点にあるものと考えられる。

今帰仁城跡の歴史は、琉球が3つの勢力に分かれていた、いわゆる三山鼎立時代に山北（北山）として、中国明代の記録に琉球王国中山王、山南王とともに登場する。これまで確認されている史料をたよりに概要を述べると、最古資料のひとつに『明実錄』があげられる。太祖實錄卷一五八・洪武一六年一二月庚午朔「琉球國山北王怕尼芝、遣其臣摸結習、貢方物。賜衣一襲。」と記され、山北王「怕尼芝」の名称が記述されるのをもって嚆矢とするようである。以後、記録によれば、最初の1383年から最後の1415年の33年間に山北王怕尼芝が6回、山北王珉が1回、山北王攀安知が11回、中国皇帝へ使者を送り朝貢貿易を行ったことが記されている。この時代、山北は沖縄北部地域と奄美大島近隣までを領域として支配していたようである。

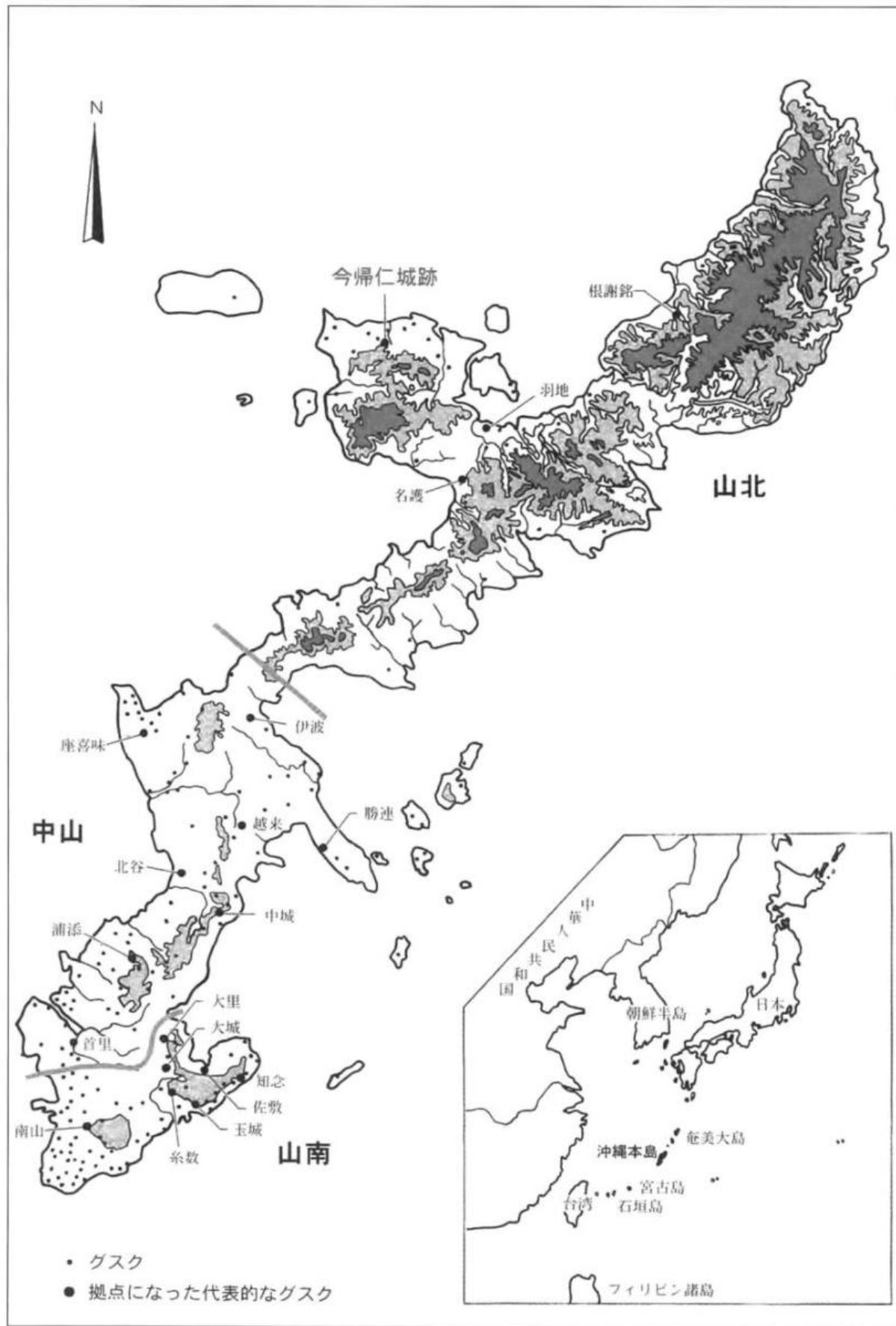
しかし、その山北（攀安知）も本島内で急速に勢力を拡大する中山王尚巴志によって1416年（1422年の和田説もある）に滅ぼされてしまう。中山の山北平定後、今帰仁城には中山によって中山王の



第1図 発掘調査箇所位置図 (S=1/2000) (※アミカケ部分は今回報告箇所)

第1表 今帰仁城跡及び周辺遺跡のこれまでの調査(※ゴシック体・アミカケ部分は今回報告)

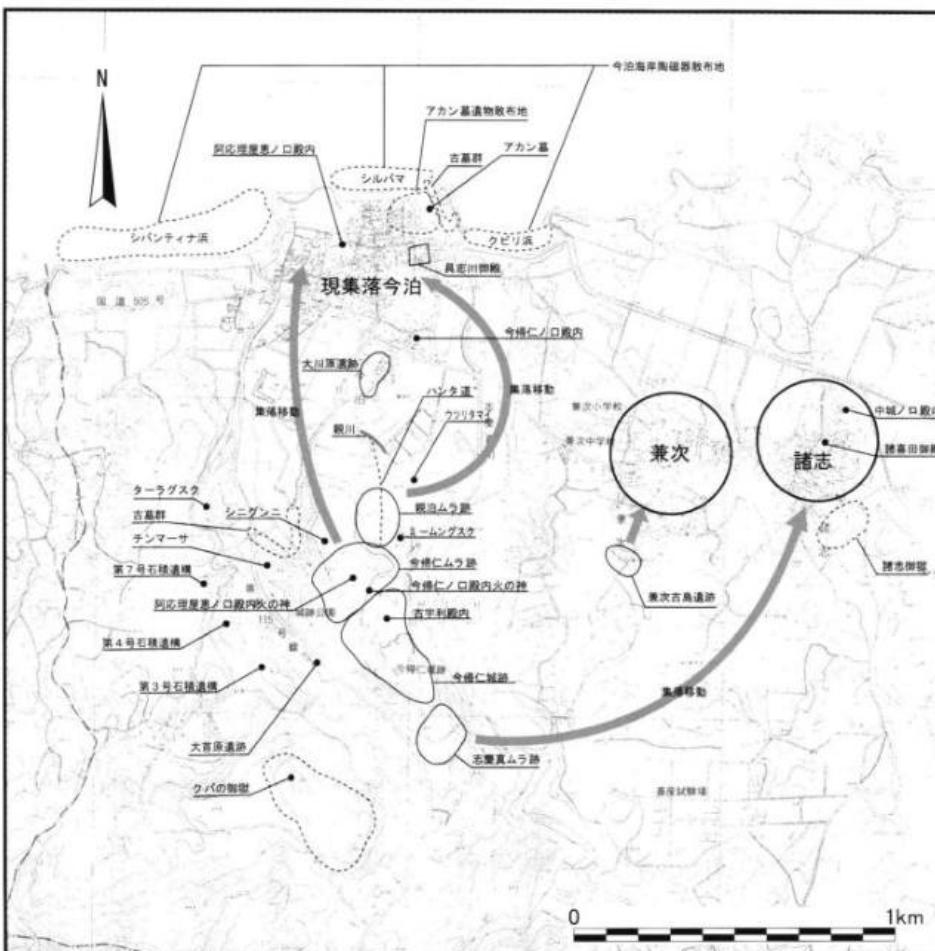
史跡整備事業等に伴う発掘調査							今帰仁城跡周辺遺跡の発掘調査			
年度	西暦	事業名	調査地区	調査面積	期間	調査	調査地区	調査原因	調査面積	期間
平成元年	1989	主に整備・資料整理								
平成2年	1990	主に整備・資料整理	主郭東側城壁(2次)写真測量に伴う崩落石除去(直対)	約40m ²						
平成3年	1991	主に整備・資料整理								
平成4年	1992	主に整備・資料整理								
平成5年	1993	主に整備・資料整理								
平成6年	1994	志慶真門郭東側石積み基礎調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約6m ²	9/12～9/13					
平成7年	1995	志慶真門郭東側石積土質調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約20m ²	9/13～9/13					
平成8年	1996	志慶真門郭東側石積試掘調査	志慶真門郭北東部北側アザナ調査	約20m ²	9/2～9/14					
平成9年	1997	志慶真門郭東側石積試掘調査	志慶真門郭北東部南側アザナ調査	約20m ²	10/7～10/19					
平成10年	1998	志慶真門郭南側石積試掘調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約2m ²	6/25～9/12					
平成11年	1999	志慶真門郭南側石積試掘調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約5m ²	2/16～3/24					
平成12年	2000	外郭石積遺構調査	外郭西地区石積み遺構調査	約10m ²	5/11～7/29					
平成13年	2001	志慶真門外壁遺構調査	志慶真門	約10m ²	4/13～2/29					
平成14年	2002	階段遺構確認補足調査	主郭西侧階段遺構	約3m ²	9/30～10/1					
		主郭東側階段確認調査	主郭東側調査(3次)	約10m ²	3/17～3/26					
平成15年	2003	主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査(4次)		11/13～2/22					
		大隅城壁調査								
平成16年	2004	主郭東側崩落石除去工事に伴う立会調査	主郭東側調査(5次)		9/21～12/19					
		主郭東側城壁内壁試掘調査	主郭東側調査(6次)	約40m ²	9/2～9/20					
		主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査(7次)		2/6～3/27					
		鳥居撤去工事に伴う立会調査	南側城壁調査(1次)		9/1～10/31	2次 西区Ⅰ区・Ⅱ区b 3次 ハラタブ 4次 東区(1・7区) 5次 西区V区・IV区の一部 6次 西区Ⅲc・IV区(旧称Ⅲd) 7次 西区IV区	公園整備 (記録保存)	1300m ²	4/24～11/7	
		鳥居撤去工事に伴う立会調査	Z-30	8m ²	9/30～10/1	8次 西区Ⅲb 9次 西区Ⅲb 10次 西区Ⅱa 11次 道路敷下	公園整備 (記録保存)	400m ²	10/27～1/7	
		第1次外郭発掘調査	城外北西区R-23～26、S-23～26	400m ²	4/21～3/31	8次 西区Ⅲb 9次 西区Ⅲb 10次 西区Ⅱa 11次 道路敷下	公園整備 (記録保存)	600m ²	5/13～12/4	
		工事に伴う立会調査	主郭東南アザナ調査		11/12～3/21			290m ²	12/21～1/21	
		鳥居撤去工事に伴う立会調査	U-24	9m ²	2005年4月	12次 東区(7区)	遺跡範囲確認	200m ²	1/20～3/31	
		第2次外郭発掘調査	試掘、東区Ⅳ区B-28～29、Ⅲ区V-33(左から) 主郭南側城壁崩落石除去	800m ²	8/9～3/31			400m ²	5/13～11/10	
		主郭南側城壁崩落石除去	主郭南側城壁調査(2次)南西アザナ基礎調査	10m ²	6/22～8/22			600m ²	5/13～12/4	
		主郭東側工事に伴う立会調査(工事)	主郭東側調査(8次)		1/26～3/31			290m ²	12/21～1/21	
		第3次外郭発掘調査	東区Ⅲ・Ⅳ区U-33～36、T-33～36(左から)	1000m ²	4/24～3/30	補足 大川原遺跡 表面崩落(記録保存)	20m ²	4月～3月		
		第4次外郭発掘調査	外郭東区域城壁基礎調査	200m ²	4/24～3/30			資料整理		
		主郭南側城壁崩落石除去	主郭南側城壁調査(3次)上段部基礎調査	20m ²	5月～7月	確認 今泊集落内	遺跡範囲確認	4m ² ×3箇所	6/27～6/29	
		第5次外郭発掘調査	東区Ⅳ区S-33、R-33・34、罐区Q-30～33(左から)	1000m ²	4/23～3/30	13次 犬泊ムラ跡(4983番地)	遺跡範囲確認	43m ²	9/19～10/10	
		主郭南側城壁崩落石除去	主郭南側城壁調査(4次)下段部基礎調査	20m ²	5月～6月	14次 志慶真ムラ跡(4953番地(左))	遺跡範囲確認	32m ²	12/1～12/28	
		第6次外郭発掘調査	東区Ⅷ区Q-30、R-30～32、S-31	400m ²	7/1～11/28	16次 ハラタブ試掘調査(4929-1番地)	遺跡有無確認	2m ² ×5箇所	7月1日	
		第7次外郭発掘調査	外郭東区域城壁基礎調査	200m ²	4/24～3/30	15次 ナガレ庭遺構調査(4699番地(左))	測量調査	40m ²	8/1～8/14	
		第8次外郭発掘調査	外郭V区R-36、S-36(左から)	400m ²		17次 今泊仁ムラ跡(5012番地)	遺跡有無確認	362m ²	11/4～12/9	
		第9次外郭発掘調査	外郭Ⅷ区Q-32・33(左から)	200m ²						
		第10次外郭発掘調査	東区Ⅷ区Q-39～35、R-30～32(左から)	約600m ²	4/15～10/1	18次 チンマーサ遺構調査	測量調査	約700m ²	8/3～8/14	
		第11次外郭発掘調査	外郭西区域城壁基礎調査	約1000m ²	4/15～10/30					
		第12次外郭発掘調査	外郭中区県道115号道路下調査	約250m ²	12/3～3/31					
		第13次外郭発掘調査	外郭西区域城壁基礎調査	約1700m ²	4/1～3/31	19次 今帰仁城跡周辺の旧道調査	遺跡有無確認		2/1～2/21	
		第14次外郭発掘調査	外郭西区域県道115号道路下調査	約120m ²	10/1～3/31	崎原遺跡 ターラグスク遺構調査	宅地開発(記録保存)	549m ²	6/1～12/1	
		第15次外郭発掘調査	外郭域外地区星敷地7	約380m ²	7/21～3/23					
		第16次外郭発掘調査	外郭城外地区星敷地6	約440m ²	9/29～3/15					
		第17次カーザフ根石確認調査	カーザフ西側城壁	約400m ²	11/25～2/22					
		第17次カーザフ根石確認調査	カーザフ西側城壁(補足調査)	約400m ²	7/2～12/25					
		第18次カーザフ根石確認調査	カーザフ東側城壁	約700m ²	6/25～7/19					
		第20次カーザフ根石確認調査	カーザフ北側城壁	約10m ²	9/11～11/5					
		第21次カーザフ根石確認調査	大庭、湖内原試掘調査	約25m ²	5/29～9/6					
		第22次外郭発掘調査	外郭中区平郎門前発掘調査	約12m ²	9/1～3/31					
		第23次カーザフ根石確認調査	カーザフ東側城壁	約200m ²	1/6～1/20					
		第23次カーザフ根石確認	カーザフ南側城壁	約200m ²	4/18～1/4					
		第24次外郭発掘調査	外郭中区平郎門前発掘調査	約32m ²	11/1～3/31					
		第25次外郭発掘調査	外郭中区平郎門前発掘調査	約81m ²	10/5～3/31	21次 今帰仁ムラ跡	交流センター 浄化槽設置に伴う記録保存	約200m ²	12/1～4/15	
		第27次外郭発掘調査	外郭城外地区星敷地7(補足調査)	約380m ²	2/1～3/31	大川原遺跡試掘調査	宅地開発(記録保存)	約7m ²	12/22～1/21	
		第25次外郭発掘調査(補足調査)	外郭中区平郎門前発掘調査(補足調査)	約81m ²	10/5～3/31					
		第16次外郭発掘調査(補足調査)	外郭城外地区星敷地6(補足調査)	約440m ²	11/1～2/28					
		第26次外郭発掘調査	外郭東区域	約50m ²	4/23～3/31					
		令和元年	第27次外郭発掘調査	外郭東区域	約60m ²	6/1～2/21				



第2図 今帰仁城跡位置図

子弟や重臣を山北監守に任じ、沖縄本島北部やんばる地域を管理している。それは 1665 年に監守体制が廃止されるまで続く。この間のことを監守時代と呼んでいる。この監守時代の間、1609 年には薩摩軍によるいわゆる琉球入りがあり、今帰仁城に立ち寄っていることが従軍日記「琉球渡海日々記」に記されている。日記によれば「首里城へ向かう途中、運天港に停泊、親泊での和議が受け入れられず城へ放火した」とあり、実質的な廃城は監守引き揚げよりも早い、1609 年頃にあったと考えられる。

今帰仁城跡は昭和47(1972)年には沖縄の日本復帰と同時に国指定の史跡となり、昭和55(1980)年より今帰仁村が主体となって環境整備事業が進められている。この中で、平成12(2000)年には世界遺産として登録されることによって、周辺地域が景観保全地区に指定された。さらに平成21(2009)年7月には城下北側に広がる11.5ヘクタールが新たに史跡地域として追加指定され、翌22(2010)年2月にはシイナグスクが追加指定され、『今帰仁城跡附シイナ城跡』として名称が改められた。平成27年までに6次にわたる追加指定があり、史跡面積合計約34.6ヘクタールとなっている。今帰仁城跡周辺遺跡が集落として機能していた時代は今から500年以上の時を経ている。現在の土地利用や祭祀空間を直接結び付けることは困難である。しかし城時代の景観が大規模な開発を受けることなく今日まで残されており、今帰仁城跡の立地する今泊(旧今帰仁・親泊)をはじめ、具志堅(旧具志堅・上間・真部)、諸志(旧諸喜田・志慶真)、などの村落祭祀の重要な参拝地であるとともに、「今帰仁上り」と称される拝所・旧跡めぐりの重要な参拝地となっていることは重要である。ここから遡って文化的な伝統や、空間利用、景観の復元を行うことは集落のあり方や、検出される遺構を理解する参考となる。実際に調査地点の近傍には各集落、門中の祭祀において重要な参拝地となっている「クバの御嶽」への遥拝を行う「サカンケー」が所在している。「サカンケー」には「参詣」もしくは「坂迎え(あるいは酒迎え)」という語意と解され、南西方向にあるクバの御嶽を遥拝するための香炉が置かれている。



第3図 今帰仁城跡及び周辺遺跡位置図

第2節 遺構

外郭地区は発掘調査以前より地表面に露出している遺構が数多くみられる。石垣はその代表的なもので、今帰仁城跡の大隅郭を区画する大きく蛇行した石垣は存在感のある遺構のひとつである。また、外郭とカーザフ郭を区画する石垣やカーザフ郭西側城壁は一部崩落しているものの、オリジナルのままの姿をとどめている遺構である。

発掘調査において検出された遺構は柱穴、土坑、土留石積、石列および集石遺構などの遺構である。なお、これら遺構は発掘調査時に検出された検出面までの確認で留めており、グスクが城として機能していた時代の調査地区における最も上位の遺構までの調査となっている。ただし、一部の遺構については、整備委員会の指導に基づいて遺構の検出作業を実施している。

屋敷地6においては柱穴の配列などを発掘調査の現場において検討し、整備委員会の指導も受けながら2棟の掘立柱建物跡を推定している。また、注目される遺構として、これらの建物跡を区画もしくは共用のスペースとして用いられたとみられる石列および集石遺構がある。

今回確認された遺構は以下のとおりである。

種類

- ・柱穴 (Pit、記録上「S」に番号を付して整理した) : 柱の穴。
- ・土坑 (SK) : 柱穴とは異なり、遺構検出面で検出された遺構の掘方の径が広く円形ではなく、不整形の場合は、土坑として調査を行っている。
- ・石積み遺構 (城壁、もしくは SR) : 今帰仁城跡の場合、発掘以前より地表面に現れているグスクの防御線を構成する石積み遺構は「○○城壁」と呼称されている。一方、城壁以外にも複数の石積み遺構があり、城壁の規模にははるかに及ばないが、石積み遺構、あるいは石積み根石のみ現存する石列が確認されており、SR と呼称している。今回は、建物跡を区画するとみられる石列及び集石遺構についても、SR として表記している。
- ・建物跡 (SB) : 住居等の建物跡で、建物跡を構成すると考えられた石列や石敷きなどもこれに含めた。
- ・不明遺構 (SX) : 整理時点においても遺構の機能が判然とせず、時期も不詳の資料は不明遺構としている。
- ・造成層 : 遺跡を覆う堆積層として整理されている。遺構内の覆土は、覆土の表記方法に従う。
- ・覆土: 遺跡を覆う堆積層の層序は I・II・III…で表記したが、遺構を覆う堆積層は上から順に「i・ii・iii…」で表記している。

第3節 層序

遺跡全体を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土であるI層で、この下にグスク時代の遺物包含層が堆積する。また、グスク時代の包含層下に堆積する層は造成土による堆積層、岩盤の露頭、遺物をまったく含まない自然堆積層の地山などいくつかのパターンが認められる。

屋敷地6の中部を東西に横断するW-19,W-20 グリッド南壁を基本層序とした(第4図)。

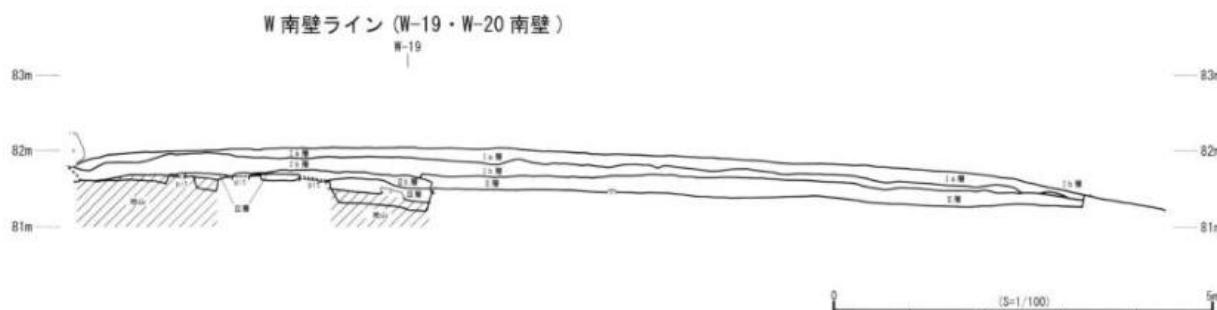
外郭基本層序

I 層 : 【にぶい黄褐色土・暗褐色土・褐色土層】表土・耕作土層。調査区の平坦面のほぼ全域がおおわれる。地表面から約 15~40cm 堆積している。調査前は樹木が繁茂しており、かつては耕作が行われていた。地下深くに耕耘が及ぶ地域では包含層や地山を掘削し、近現代の陶磁器等を包蔵する。

II 層 : 【暗褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層。遺跡全体を覆う。屋敷地6で検出される遺構のほとんどがこの時期のもので、15~16世紀代の遺物が多く得られている。

III 層 : 【褐色土・黄褐色土】遺物包含層。II層の遺構が検出される。掘削はしていないため詳細は不明。

地山層 : 【明黄褐色土層】無遺物の自然堆積層。風化岩が筋状に検出される。古期石灰岩が露頭する。



第4図 基本層序

第IV章 報告

第1節 屋敷地6(外郭16次調査)

屋敷地6は村道今帰仁城跡線と外郭西側城壁の間にあり、サカンケーの拝所の前面に広がる平坦面に形成されている。残念ながら道路によって北から西側にかけて破壊されており、全体の確認はできなかった。北東側と東側は1段高くなり外郭西側城壁によって区画される。南側は岩盤が露頭する地域が広がり、その南側に屋敷地7が分布する。

屋敷地6は今帰仁村グスク交流センター第2駐車場に隣接しており、道路を挟んだ第2駐車場は屋敷地4として調査が行われ、多くの柱穴遺構が確認されている(今帰仁城跡周辺遺跡II/2005年)。屋敷地6は屋敷地4の遺構検出面に比して1m以上高い位置にある。調査は平成22年度に試掘調査を行い、翌23年度から全面を掘り下げた。本地区は駐車場及び道路からも近く観光客の目に付きやすい場所に位置し、グスク周辺の集落遺跡の様相を伝えるには最適な場所といえる。このことから、整備委員会の指導も受けながら住居跡の復元ができるよう慎重に遺構の検討を行った。検出された遺構は以下のとおりである。『今帰仁城跡発掘調査報告VII』(以下、「既報」)において、屋敷地6の概要と遺構は報告していることから、今回は、おもに層序及び出土遺物について報告することとする。

1. 層序

屋敷地6では表土・旧耕作土の下層からグスク時代の遺物包含層が堆積している。遺跡全体を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土がI層で、この下にグスク時代の遺物包含層が堆積する。また、グスク時代の包含層下に堆積する造成土による堆積層、岩盤の露頭、遺物をまったく含まない自然堆積層の地山のいくつかのパターンが認められる。

- I 層:【10YR3/4にぶい黄褐色土、3/4暗褐色土、4/4、4/6褐色土層】現代の表土・旧耕作土。屋敷地6の全体を覆う。5~10cm程度堆積している(Ia層)。その下にさらに10~25cm堆積している(Ib層)。
- II 層:【10YR3/3、3/4暗褐色土】当該遺跡の形成期のグスク時代遺物包含層。屋敷地6の調査区北側で15~25cm程度の堆積がみられる。屋敷地6で検出される遺構のほとんどがこの時期のもので、15世紀中頃から17世紀初頭の遺物(主郭第IV期~第V期)の遺物がえられている。
また、「概報」の屋敷地6平面図において「焼土」と表記したものをIIa層とした。色調や堆積状況などからII層に相当するとみられるが、焼土や炭が多く含まれる範囲を示している。
- II b層:【10YR5/8黄褐色土】調査区南側のW-20,X-20グリッドでは、「概報」の遺構平面図において「?層」と表記していたIIb層が確認される。IIb層はW南壁(第5図)のW-20グリッド側の断面図で、III層の上に堆積し、II層と並行するように検出されることから、II層の範疇の土層と判断したものである。
- III 層:【10YR4/6褐色土】遺物包含層。II層からの遺構が検出される。掘削していないため詳細は不明である。

地山層：【10YR5/8 黄褐色土】無遺物の自然堆積層。古期石灰岩の岩盤がいたるところで露頭する。

W-19 グリッド西端に設けられたサブトレンチで検出された土坑4基はIV層検出とされているが、IV層の土層断面図や土層説明がみあたらないため、層序からは省いた。IV層検出遺構の埋土の説明をみると、10YR3/4、3/3 暗褐色土に炭や焼土が含まれるとあるのでIIa層の土と似ている。

2. 遺構

屋敷地6ではI層を除去するとグスク時代に相当するII層が確認された。II層を掘削後、III層上面または地山を検出すると、柱穴跡を中心とした多くの遺構が検出された。遺構の掘り下げを行っていない為、詳細は不明であるが検出面で確認される埋土の状況からII層に属する遺構と考えられた。

調査の結果として、屋敷地6は調査区中央部の石列遺構とその周辺の集石遺構を境に、柱穴が集中している2か所確認され、それぞれ建物跡があったと推定した。本調査区では多くの柱穴を確認しているが、検出時にはほとんどの建物跡を現場で組むことができていない。これは過去に行ってきた隣接する屋敷地の今帰仁ムラ跡での事例がある。その理由としては柱間にばらつきがあること、また何度も建て替えが行われていることが、建物跡の確定ができない大きな要因となっている。

今報告では、要検討ではあるが2棟の推定建物跡と、建物跡の間にある石列及び集積遺構を報告する。

種類	遺構総数	592 基
・柱穴(SP)	471 基	・土坑状遺構(SK) 17 基
・建物遺構(SB)	2 基	・石積み遺構(SR) 1 基 ・不明遺構(SX) 102 基
・礫溜りが、調査区東側に3ヶ所、南側においては岩盤の隙間に大量の拳大の礫が堆積する状況がみられた。過去に畑として利用されたことが確認されていることから、畑作業に邪魔となった礫を集めたものと考えられる。トレンチを入れて礫と堆積している土の状況を確認したが、近現代の遺物を包含する状況であったことから、この岩盤上礫群に伴う遺物は、岩上レキI層として集計している。		
・搅乱土坑がV-20 グリッドで1ヶ所、X-19 グリッドで3ヶ所、X-20 グリッドで2ヶ所確認されており、調査区南側で現代の搅乱が多くみられている。		

[名称] SB01 (掘立柱建物跡) ※要検討 [位置] 外郭城外西地区 W-19,X-19

[遺構図] 第6図 [図版] 図版2

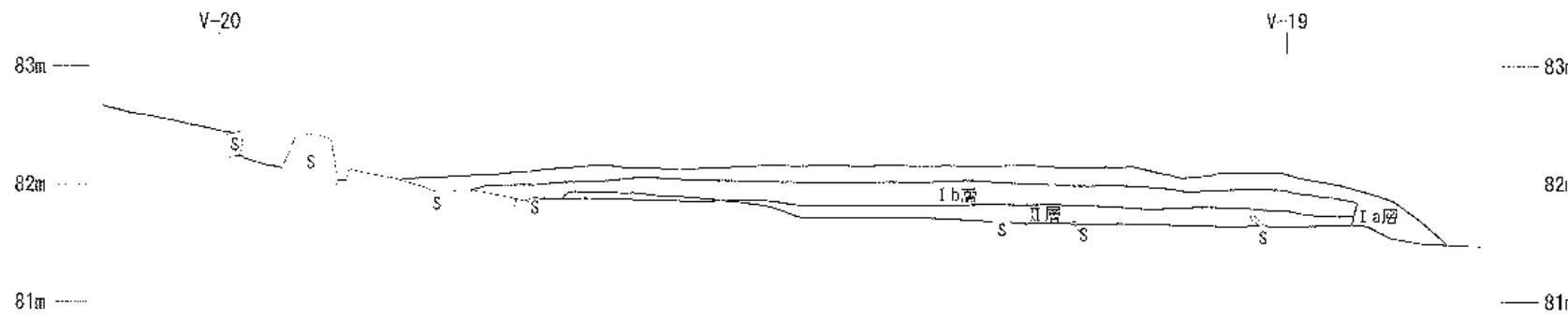
[検出面] 第II層 [構成] 柱穴 13 基

[構成遺構] S263,S266,S292,S437,S304,S419,S311,S463,S544,S472,S481,S476,S286

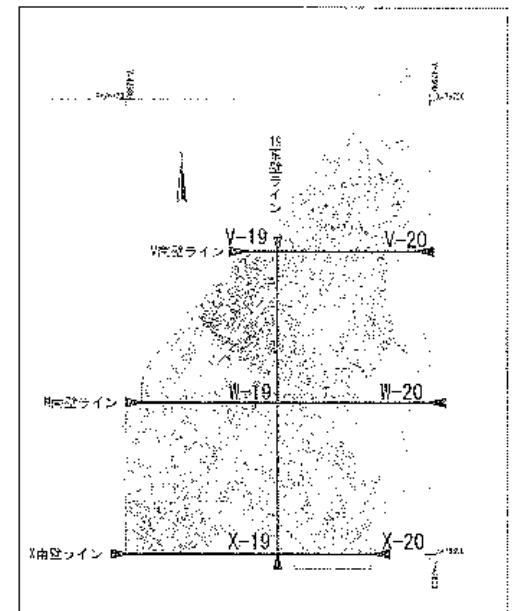
[規模] 4.2m×2.3m~2.7m

[所見] 石列及び集石遺構の南側で検出された。当該遺構は現場で検出時には判然としなかったが、検討を重ね、長軸約4.2m、短軸約2.3m~2.7m、13基で構成される掘立柱建物跡を想定した。柱間の長さにはばらつきがあり、ややいびつな長方形を呈する。建物跡とする根拠は乏しいものの、検討を要するとして報告する。

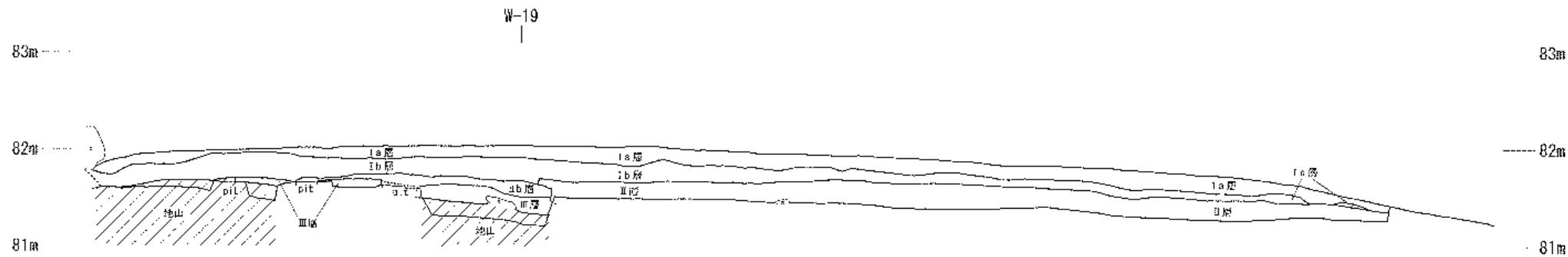
V南壁ライン (V-19・20南壁)



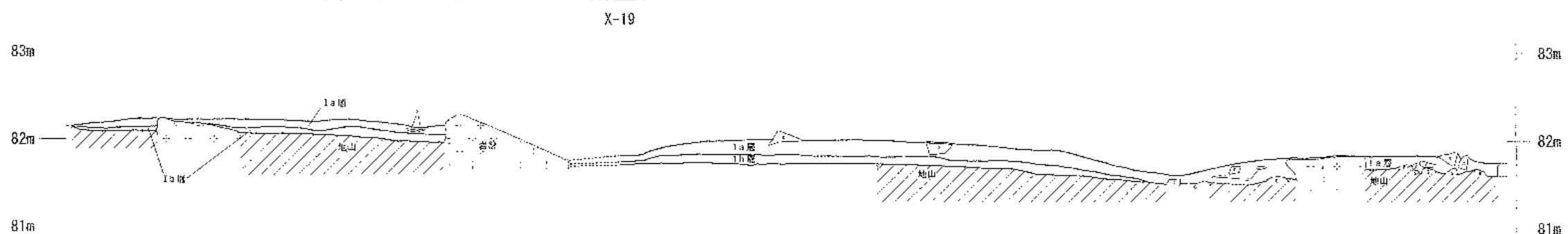
土層断面位置図



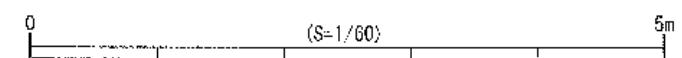
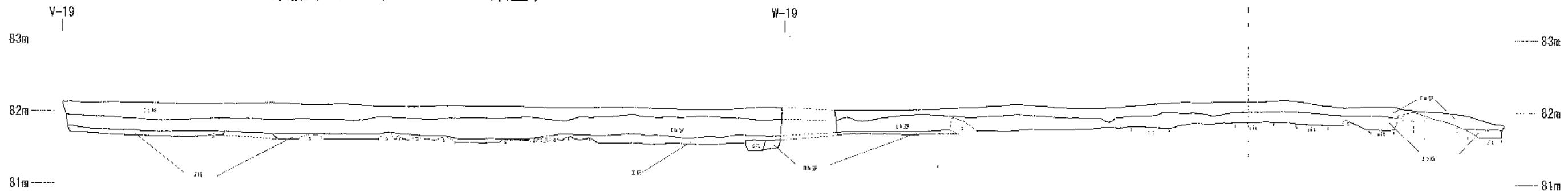
W 南壁ライン (W-19・W-20 南壁)



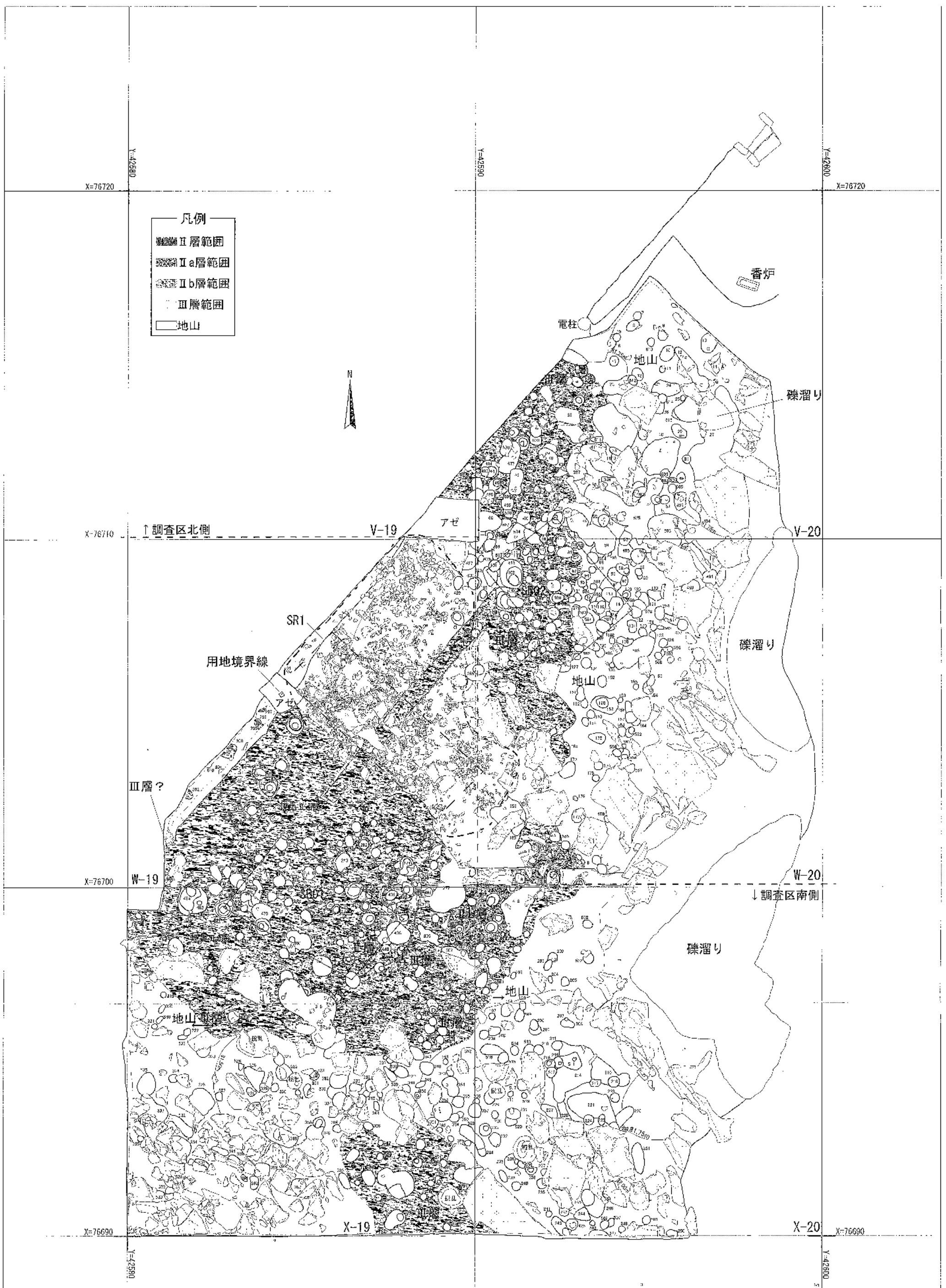
X 南壁ライン (X-20・X-19 南壁)



19 東壁ライン (W-19・X-19 東壁)



第5図 屋敷地6(16次外郭調査) 土層断面図



第6図 屋敷地6(外郭16次調査)遺構詳細図

[名称] SB02 (掘立柱建物跡) ※要検討 [位置] 外郭城外西地区 V-20,W-20
[遺構図] 第6図 [図版] 図版2
[検出面] 第III層 [構成] 柱穴 16 基
[構成遺構] S63,S61,S84,S590,S122,S118,S565,S127,S149,S146,S142,S107,S592,S71,S67,S65
[規模] 3.5m×2.5m
[所見] SB02 は石列及び集積遺構の北側において検出され、16 基の柱穴で構成される掘立柱建物跡を想定した。長軸約 3.5m、短軸約 2.5m の長方形を呈する。長軸の方向は石列とおおよそ同じ方向を指している。これは SB01 も同様であり、石列及び集石遺構をはさみ 2 棟の建物があったと推察するに至った。

[名称] SR1 石列及び集石遺構 [位置] 外郭城外西地区 W-19,W-20
[遺構図] 第6図 [図版] 図版1
[検出面] 第II層 [構成] 石列・集石
[規模] 長軸約 6 m、短軸約 5 m
[所見] 屋敷地6 の中央に位置する。I 層除去後に石列と集石遺構の上面が検出され、II 層を掘り下げる過程で、石列や集石遺構が検出された。道路によって破壊されているため本来の遺構規模は確認することができていない。

SR1 を構成する石列は SB01 と SB02 に平行するように検出され、両者の建物跡を区画する何らかの施設があったと考えられる。類似する遺構としては、平成 16 年に調査された屋敷地2において柱穴が集中する箇所を区画する性格不詳の遺構として報告している SX4 などがあり(今帰仁城跡周辺遺跡III: 第24集 p65~67)、屋敷と屋敷を区画する遺構として、集石遺構などが多用される傾向がうかがえるが、屋敷を区画する“石列”は周辺の集落遺跡では確認されていない。

3. 包含層出土遺物

[II層出土遺物]

1. 土器(第7図-1) 1はグスク土器の塊形の口縁部で粘板岩を混和材として用いる特徴を持つ(第3様式)。

2. 青磁(第7図-2~27)

碗(第7図-2~13) 2は龍泉窯系青磁I類の口縁部資料である。外面口縁部近くに横方向の櫛描文、内面には片切り彫りの劃花文が施される。3~9は同窯系青磁V類である。3は、外面口縁部近くにヘラ描きの雷文帯、胴部に弧を描く線が施される。4は、外面口縁部付近に雷文帯をスタンプで巡らし、その下に2本の沈線が施される。内面にはスタンプで口縁部下に雷文帯、その直下に人形手文を施す。釉薬は不透明で厚くかかり、文様ははつきりとしない。5は、外面口縁部近くにヘラ描きによる圈線を施し、その下に無鎬蓮弁文を描く。6は無文直口の口縁部資料で、7~9は無文外反碗である。7は完形資料で、底部は疊付け内面まで厚く施釉され、高台内は釉剥ぎされる。12は同窯系青磁VI類の底部資料である。外面に細蓮弁文、内面見込みに印花文のスタンプ等が施される。高台疊付けまで施釉され、高台内は蛇の目釉剥ぎされる。13は同窯系VI類で、小碗の底部資料である。外面に細蓮弁文がみられ、疊付けまで施釉され、高台内は露胎となる。10・11は同窯系青磁VII類で、内湾ぎみの直口口縁の外面に波瀾文を施す。

皿(第7図-14~21) 14・15は同安窯系I類の皿である。14は櫛描文が見込みに描かれる。

16~19は龍泉窯系青磁V類の皿で、16~18は口縁部、19は底部資料である。18は無文直口、16・17は口折となり、外面に蓮弁文を施す。19は全体的に粗雑な造りとなっており、全面施釉後に外底の釉を難に搔きとる。

20・21は龍泉窯系青磁VI類の腰折れ稜花皿で、内面口縁部に三条一組の波状文、見込みに印花文が施される。20は、波状文下に唐草文がみられる。また20は高台まで施釉され、高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。

盤(第7図-22~24) 22・23は鈎縁盤で、直線的に口縁部に至り、口縁鈎縁端は摘まみ上げられる。内面に幅広の簾彫連弁文が廻らされる。24は折縁の口縁部資料で、折縁上面に蔓唐草文、内外面ともに刻花文が施される。

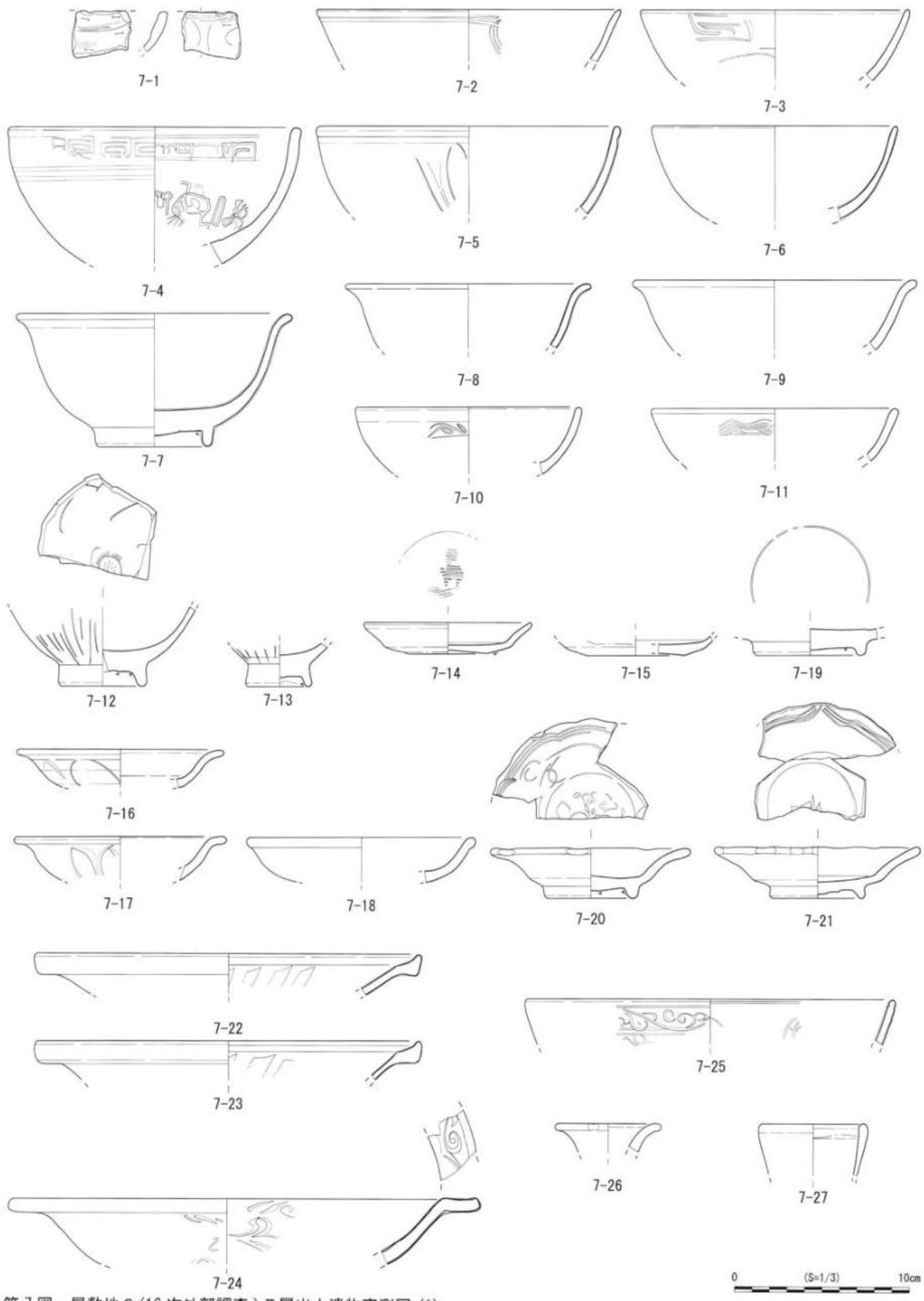
鉢(第7図-25) 25は鉢の口縁部資料である。口が大きく広がる大振りの鉢とみられ、復元口径は21cmとなる。外面の口縁下部に二重の沈線で区画した中に唐草文が施される。胴部にも文様が見られるが破片のため判然としない。内面は口縁部に一条の沈線が巡らされ、その下にも文様がみられるが、破片のため詳細は不明である。

その他の器種(第7図-26・27) 26は瓶の口縁部資料である。口縁部に刻みが入り、稜花状になる。27は香炉の口縁部資料である。直立する体部からの直口口縁となる。内体面下半は露胎となり、主郭部分類香炉II類の三足香炉の口縁部とみられる。

3. 白磁(第8図-1~7)

碗(第8図-1・2) 1は白磁A群(口禿・景德鎮窯系)の碗で直線的に広がる。内面下半に一条圈線を廻らす。2は器壁が厚く内碗する口縁部で、内外面無文となっている。C2群(ピロースクII・閩清窯系)の資料である。

皿(第8図-3・4・7) 3は白磁D群(邵武窯系)の直口皿の完形資料で、内外面ともに胴部下半は露胎となる。4はE群(景德鎮窯系)の外反皿で、疊付けのみ露胎となる。釉は発色が悪く白濁する。7は菊花小皿の口縁部資料である。集計は青花の小皿(菊皿)で行っている。復元口径6.9cmで、高台



第7図 屋敷地6(16次外郭調査)II層出土遺物実測図(1)

の形状は不明である。内面の見込近くに二重の圈線が施される。形態や胎土・釉調などから白磁E群(景德鎮窯系)で生産されたと推測されたのでここで報告している。

その他の器種(第8図-5・6) 5は碁笥底杯の底部資料で、疊付けのみ露胎。6は壺の口縁部資料で、内外面ともに施釉され、口縁部は厚めにかかる。

4. 青花(第8図-8~14)

碗(第8図-8~12) 8・9は主郭分類明青花碗II類(小野分類B群・景德鎮窯系)の資料である。8は完形の資料で、口縁部は緩く外反し、腰部は丸みをもち、見込みはややくぼむが平坦に近い。疊付け付近が露胎となる以外は施釉され、外底部にはカンナ削り痕がみられる。文様は全面に描かれる。外面口縁帶には四方襍文を描く。上に一条線、下を二重圈線で区画し、その間に三本ずつの斜線を交互反転させ、中に半弧を三つ重ねた文様を配している。腰部下半に二重圈線を巡らし、口縁部の区画文帶との間の胴部に唐草文を描く。さらに高台に二重圈線を巡らす。内面は口縁部付近に二重圈線を描き、胴部下端に一重圈線を巡らす。圈線間の胴部に唐草文と梵字を一組とした文様が4組展開される。見込みは、二重圈線内に唐草文と梵字を描く。青料の発色は淡く、灰色味を帯びる。釉薬は透明だが、青みを帯びる。柴田圭子によって明代中期前半とされた資料に類似する(柴田圭子 2011『今帰仁城跡発掘調査報告書V』P.189.No.18)。9は外反する口縁部で、文様は外面の口縁部付近に二重圈線を巡らし、その下に宝相華唐草文を描く。内面は口縁部に四方襍文を描く。

10・11は主郭分類明青花碗III類(小野分類C群・景德鎮窯系)の口縁部資料である。10は、外面口縁部に一条の圈線を巡らし、その下に三つ葉様の小文様を描く。内面には口縁部に二重圈線を描く。11は、呉須の発色は不良である。外面口縁帶に波瀾文、胴部には蕉葉文を描く。内面は口縁部に一重圈線を描く。今帰仁城跡で一般的に出土する資料である。

12は主郭分類明青花碗IV類(小野分類無し・景德鎮窯系)の口縁部資料である。口縁部は強く外側に折れ、復元口径 15.9cm である。外面口縁部に二重の圈線、胴部に馬士文、内面口縁部に二重の圈線を描く。

皿(第8図-13・14) 13は主郭分類明青花皿I類(小野分類B群・景德鎮窯系)の口縁部資料で、外面に唐草文が描かれる。14は主郭分類明青花皿II類(小野分類C群)。いわゆる碁笥底の皿で、外面に二重の圈線、内面に十字花文を描く。

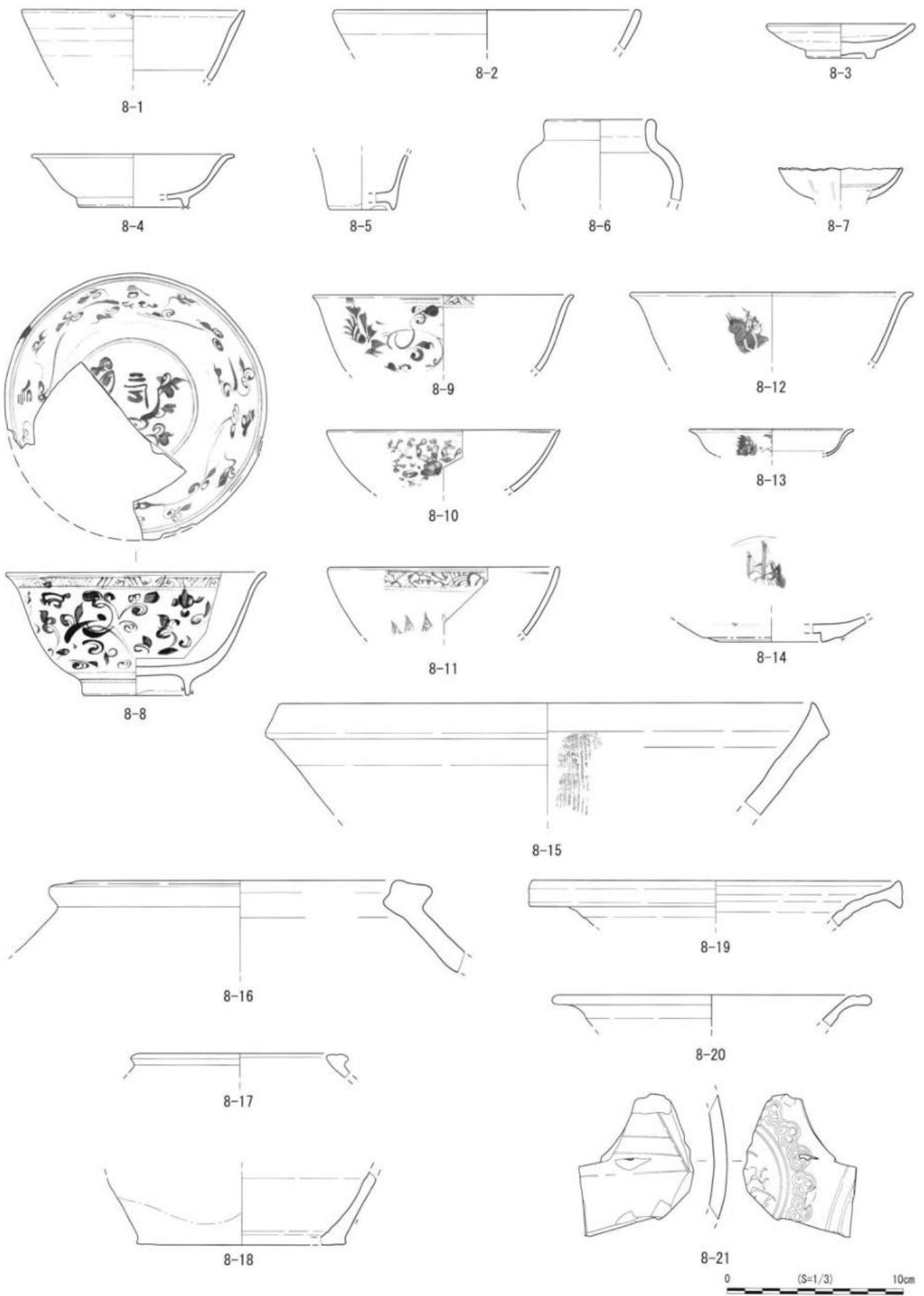
5. 本土產陶磁(第8図-15) 15は備前焼播鉢の口縁部資料である。素地は粗い砂粒を含み還元焼成された灰色を呈す資料である。内面に7条の撻目がみられる。口縁は外傾し、口縁端部が肥厚して上端と下端が少し突出している。なお、備前市立備前焼ミュージアム館長の臼井洋輔氏から南北朝期のものとご教示いただいた。

6. 褐釉陶器(第8図-16~18) 16・17は口縁部資料である。16は断面を方形とする大型の壺で、安座間分類(瀬戸ほか2007)の5類に該当する。17は、小型の壺の口縁部資料である。18は中・小型壺の底部とみられる。

7. タイ陶磁(第8図-19・20) 19はシーサッチャナライ窯系の壺の口縁部資料でラッパ状に外側に大きく広がる。20は半練土器の身の口縁部資料である。ラッパ状に外側に大きく開き、内面には蓋の受け部になるような一条の沈線が巡らされる。

8. 高麗陶磁(第8図-21) 21は、第32集で報告した95-271と接合した資料で、壺か瓶の胴部と推測される。外面には、白象嵌で如意頭文によって縁どられた二重線の円圈が施文され、円圈内には黒象嵌によって草文が施される。その直ぐ隣に二重線の円圈らしき白象嵌の文様がみられる。内面には、調整痕とみられる横方向の線が残る。

9. 石器(第9図-1) 1は玢岩製の置砥とみられる。外郭発掘調査報告書IV(第26集)の110-228



第8図 屋敷地6(16次外郭調査)Ⅱ層出土遺物実測図(2)

と酷似する。

10. 金属製品(第9図-2~26)

銅製品(第9図-2~12)

鉢類(第9図-2・3) 2は、兜鉢の後方に取り付けられる総角付の切子頭で、頭部は面取りが11ヶ所にみられ、鉢部分は割りピン状になっている。一部、鍍金が施されている。3は甲冑金具の総角付環座で、頂部に格子が刻まれ、鍍金がされている。鉢部分は割りピン状となる。

覆輪(第9図-4・5) 4・5は覆輪で、断面形状はU字に折れ曲がり、形状や大きさから鎧の覆輪と推測される。

簪(第9図-6) 6は簪で、竿の断面は六角形で、先端は窄まってとがっている。首部から上が欠損しているが、竿の大きさや形状と城内の出土類例から、匙形の簪と推測される。

その他(第9図-7~11) 7は鈴状の製品である。半球状を呈し、幅約4mm、長さ約1.8cmの長方形の孔が設けられている。他の鈴の出土例と比べると、孔の幅が大きく見える。鋳造品とみられる。鈴であれば上下を別造した下半部であると思われる。接合部になると思われる面はきれいに平坦に仕上げられている。この平坦面横の外面に一部筋状の工具痕らしきものがみられる。

8は金具状の製品である。径約2.7cmの円形を呈し、対面する2ヶ所に三角形の突出した部分がある。円形部分の縁は内側に丸くなり、三角形の突起の片側も内側に折曲がる。円形の面は腐食が著しく文様などはみられないが、一部に鍍金が残る。厚みの無いものに取り付けて、覆い隠す金具と思われる。9~11は用途不明の製品である。9は、径約1.9cmのいびつな円形を呈し、厚さ約0.8mmと非常に薄い。中央部に径約2.1mmのきれいな円形の孔が、片側から穿孔されている。10は、厚さ約0.8mmと非常に薄く、片側の先端は途中から細くなり、もう一方は折れ曲がっている。11は板状のものを内側に折り曲げて棒状にした製品で、摘まみながら敲いて成形したような痕跡が全体にみられる。

煙管(第9図-12) 12は長さ約18.3cmの延べ煙管である。吸い口は円形で、火皿手前の上部は平坦にへこんでいる。

鉄製品(第9図-13~26)

鎌(第9図-13・14) 13・14は刃を平坦とするバチ型のもので今帰仁城跡出土例では最も一般的な資料である。

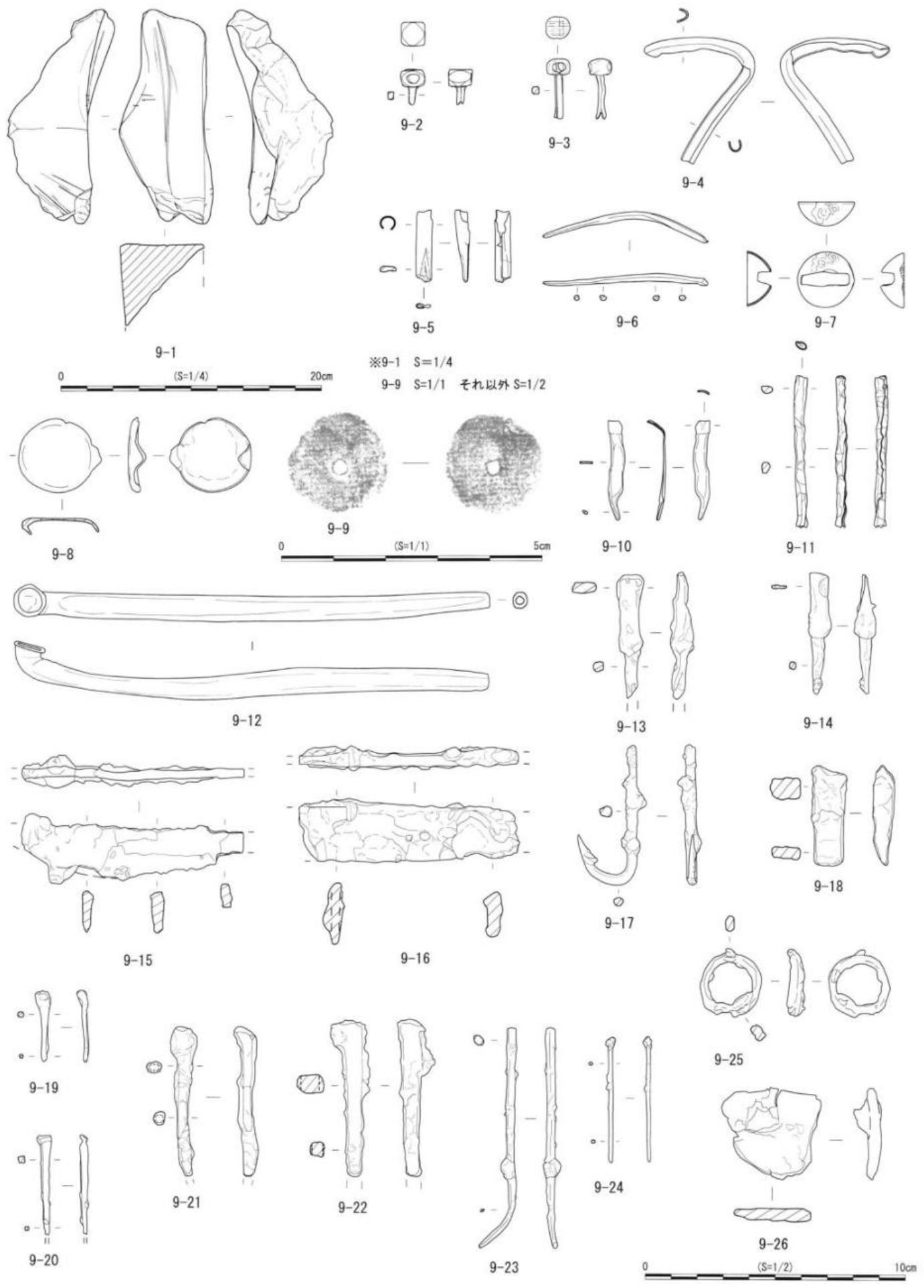
刀子(第9図-15・16) 15は刃先と茎を一部欠損しているが、刀身中央部で外反となる志慶真門郭・主郭でII類に分類されるものにあたるとみられる。16は刃先も茎も欠損しているが、刀子の欠損品と推定した。

釣針(第9図-17) 全体の長さは8.5cm、断面形は円形で、返し部分の形状もよく残る。

楔(第9図-18) 先端は片側に刃部をつくり、断面は長方形を呈する。残存長3.7cm、幅約1.3cmである。刃部の反対は欠損している。鑿の可能性も考えられるが、推測した。

釘(第9図-19~22) 大小みられ、いずれも断面正方形、頭部を折りたたむように折れる皆折れのいわゆる和釘である。

その他(第9図-23~26) 23・24は細い棒状の鉄製品である。23は断面が六角形で、両端が欠損しているので本来はもう少し長かったとみられる。24は断面円形で、完形品である。25は断面楕円形の2本の棒状のものを曲げて接合し、環状にした製品である。26は板状の鉄製品である。鉄鍋等の破片資料とも推定されるが、口縁などの特徴的な部分が見られないで判断できない。



第9図 屋敷地6(16次外郭調査)II層出土遺物実測図(3)

11. 錢貨(第10図-1~14)

銭は出土総数31枚、うち実測図化した資料は15点である。図化資料と未図化資料を合わせて表にした計測値等の観察表として示した(第2表)。

1は皇宋通寶(北宋・1038年)、2は至和元寶(北宋・1054年)である。3は「□豊通口」で、元豊通寶(北宋・1078年)と推測した。4は端平通寶(南宋・1234年:当三錢)である。5は最低2枚の錢が変形して癒着した資料で、変形した部分を観察すると、もう数枚付着していた可能性も考えられる。1枚は錢銘の「洪武□寶」が判読でき、洪武通寶(明・1268年)と判断した。もう一枚は「□□通口」の1文字しか判読できず、銭銘は不明である。6~8は永樂通寶(明・1408年)である。8は「永□通口」で、おそらく永樂通寶でないかと考えられる。

9は「紹□□寶」で、折二錢である。うつすらと判読される「紹」の書体は真書とみられ、折二錢である。このことから、紹興元寶(南宋・1131年:折二錢)、紹興通寶(南宋・1131年:折二錢)、紹熙元寶(南宋・1190年:折二錢)、紹定通寶(南宋・1228年:折二錢)の可能性が考えられる。このうち紹興元寶の折二錢は、外郭VIII区SB09からの出土例がある(第29集22-10)。

10は文字がつぶれて判読が難しい。「□□□寶」の寶がかろうじて読める。大きさから折二錢とみられる。一文字目が「洪」もしくは「元」とみえるが、判然としない。孔は方形であるが、文字の位置がややずれているように見える。

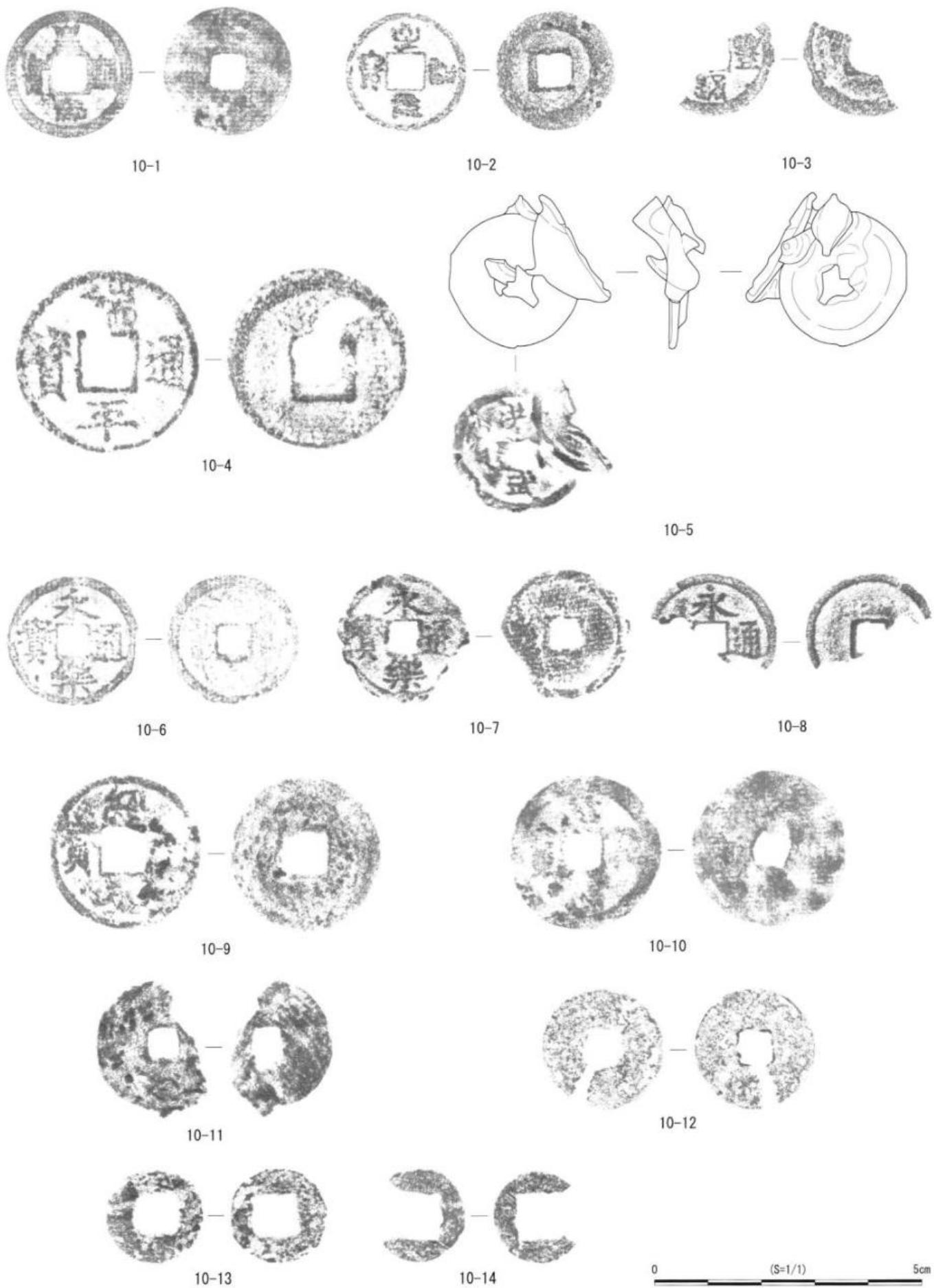
11は銘があるようにも見えるが、判読は不能である。12は、銭銘不明で、無文錢とも考えられる。外径は23.27mmで、無文錢とすると主郭I類の2cm以上の外径をもち、錢厚が比較的厚く、孔の大きさが小さく肉巾のあるものとみられる。

13・14は無文錢である(主郭分類II類)。

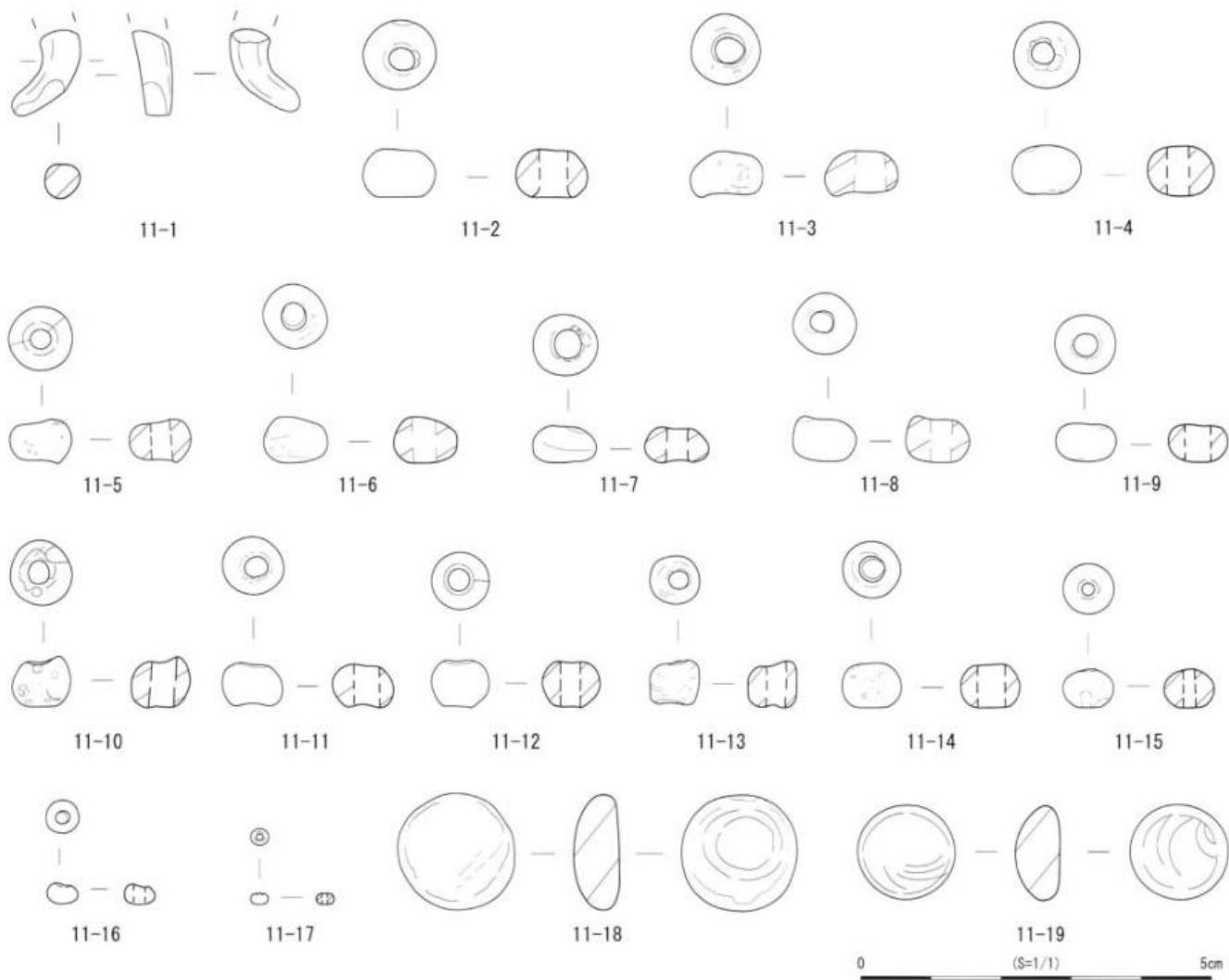
第2表 屋敷地6(16次外郭調査)出土錢貨観察表

No.	銭銘	初鑄年	国名	想定される 銘柄	書体 (タテ)	計測値(単位:mm,g)					出土地点					備考	
						外径	内径	孔径		銛厚	重量	文	グリッド	遺構	層序	dot	
								(ヨコ)	(縦)								
10-1	皇宋通寶	1038	北宋	○	篆書	24.7	19.41	6.44	6.22	1.34	3.65	16	W-19	II		110	
10-2	至和元寶	1054	北宋	○	篆書	23.21	18.96	6.11	6.47	1.37	3.44	16	X-19		II	113	209
10-3	□豊通口	1078	北宋	元豊通寶	篆書	-	-	-	-	0.97	0.95	16	X-19	S 463		226	約△欠損
10-4	端平通寶	1234	南宋	○	真書	35.01	30.60	8.82	8.24	2.47	9.23	16	W-19	II	20	434	当三錢
10-5	洪武通寶	1368	明	○	真書	24.7	-	5.23	5.39	1.72	7.5	16	X-19		II	104	434
10-6	永樂通寶	1408	明	○	真書	24.9	20.76	5.16	5.14	1.5	3.11	16	V-20	II	26	172	
10-7	永樂通寶	1408	明	○	真書	24.78	20.40	5.36	5.11	1.47	3.04	16	W-19	II	5	83	
10-8	永□通口	1408	明	永樂通寶	真書	-	-	5.27	4.99	1.22	1.45	16	X-19			369	△欠損 S 463, SB01を構成するSの1つ
10-9	紹□□寶	-	-	-	真書	29.45	25.86	8.01	8.09	1.58	4.86	16	W-19	II	68	450	折二錢
10-10	□□□寶	-	-	元豊通寶?	篆書?	29.46	22.59	6.13	6.31	2.02	7.87	16	W-19	II	28	451	折二錢
10-11	不明	-	-	-	-	-	-	5.06	4.67	1.77	2.26	16	X-19		II	104	515 欠損
10-12	不明					23.2	23.27	6.52	6.74	1.05	1.95	16	W-19	II	63	52	
10-13	無文錢					18.61	18.96	8.04	8.46	1.05	0.76	16	X-19	II		193	
10-14	無文錢					-	-	-	-	0.86	0.61	16	X-19	II a	49	530	焼土分布内、2片
13-6	無文錢			無文		21.9	22.24	6.64	6.12	0.82	1.6	16	W-19	I		628	
	有文			文字が読めない		-	-	-	-	1.53	1.86	16	W-19	II		452	
	不明					18.27	-	-	-	1.01	0.38	16	W-19	II		453	
	無文錢					-	-	-	-	0.52	0.18	16	W-20	S 98	II	455	
	無文錢					16.74	-	8	-	1.02	0.32	16	X-19	II		503	
	有文			文字が読めない		18.01	-	-	-	1.78	0.85	16	X-19	II		528	
元□通寶	1078	北宋	元豊通寶	篆書		23	18.5	5.58	-	0.86	1.18	16	W-19		602	保存処理前に計測	
						1086	北宋	元祐通寶									
	無文錢					24	-	7	7.5	0.99	1.88	16	X-19	S 316	613		
	有文			文字が読めない		18.97	-	-	-	1.25	0.99	16	X-19	S 450	631		
	有文			文字が読めない		24.99	17.46	5.52	-	0.9	1.84	16	W-19	II		175	
	□□□寶					20.61	-	4.81	-	1.34	0.85	16	V-20	II	42	281	
	有文			文字が読めない		24.6	18.41	4.23	-	1.26	1.28	16	V-20	II	43	289	
	有文			文字が読めない		22.98	-	-	-	1.47	0.9	16	V-20	II	43	289	保存処理後に計測
	無文錢					19.77	-	5.73	-	0.64	0.42	16	V-20	II	40	277	
	□□通口					16.54	-	-	-	1.17	0.68	16	V-20	II		280	
	無文錢					20.64	-	5.5	-	0.72	1.03	16	V-20	S 404	76	358	
	□□□寶					15.72	-	-	-	1.31	0.63	16	V-20	II	48	368	

*ゴシック体は本報告書図示資料、明朝体は集計のみ



第10図 屋敷地6(16次外郭調査)II層出土遺物実測図(4)



第11図 屋敷地6(16次外郭調査)II層出土遺物実測図(5)

12. 玉(第11図-1~17)

出土総数36点中、II層出土は28点で、第11図で17点を図示し11点を第3表で示した。グリッドごとの出土状況をみると、SR1およびSB01が検出されたW-19とX-19グリッドからの出土が多い。W-19で11点(内II層10点、I層1点)、X-19で13点(内II層8点、I層5点)、V-20で7点(全てII層)、W-20で2点(全て遺構)、X-20で1点(II層)となり、II層からの出土が多い。

1は、ガラス製の勾玉の破片資料で主郭分類I類である。2~15はガラス製の20~5mmの丸玉で主郭分類III類b 2種である。16・17はガラス製の5mm以下の小玉で、主郭分類III類c種である。勾玉以外は、いずれも巻き上げによって製作されたとみられ、3・5・8・11などのように片側にガラスの厚さが偏ったものがあるほか、13のように巻き上げの際の筋状の痕跡が残り製作方法を窺うことができる。また、2・3・4・7・9・10などで孔の際に刺突したような痕跡がみられ、巻き付けたガラスを外す際の痕跡とも考えられる。

色調は、2~13のIII b 2類の12点が無彩色の明るい灰色で最も多く、次いで1・15・16の3点が赤みの灰であるほか、14が無彩色、17が浅い黄味の橙それぞれ1点ずつとなる。本調査区出土ガラス玉全体の色調をみても、灰色系統が全体の半数を占め、II層において顕著であるといえる。外郭VIII区では青色系統のものが筆頭となっていた(既報告29集)のと比べると、本調査区II層の特徴と考えられる。

13. ガラス製品(第11図-18・19)

18・19は平面形が丸く、断面形が直線と半円からなる。山田グスク跡(恩納村)でも類例がみられ、「ガラスの溶液を入れ製作したものと考えられ、流し込んだ後の上面部に同心円的な波紋や、流し込み時の筋がみられる」ことが報告されている(恩納村教育会 2013『山田グスク』)。本遺跡出土の2点についても、断面が直線となる面に同心円的な波紋がみられ、ガラス製である。色調は、18が青みの白、19が緑みの白である。本調査区では未実測のものを含めるとII層から3点出土しており、W-19から2点、X-19から1点で、SR1とSB01が検出されたグリッドからの出土である。

用途としては、囲碁などの駒と考えられている(上原 2004)。今帰仁城跡では未報告資料であるが、主郭、外郭東区VIII区(10.5次外郭調査)でも出土が確認されている。

第3表 屋敷地6(16次外郭調査)出土玉類観察表

調査番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	台帳No.	回収日	分類	材質	色調	計測値				備考
											長さ	孔径	幅	重量	
11-1	16	W-19	II		65	448	2012/1/27	勾玉(1類)	ガラス	赤みの灰	14.56	-	5.65	0.59	上部欠損
11-2	16	X-19		S190	127	544	2016/3/7	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	7.40	3.87	9.96	0.87	pit内 I層
11-3	16	X-19	II南			530	2016/2/24	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	5.81	3.56	9.90	0.67	剥離あり
11-4	16	X-19	II南		115	518	2016/2/24	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	6.46	2.79	9.63	0.77	
11-5	16	W-19	II南		50	306	2012/1/11	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	6.02	3.16	9.06	0.57	
11-6	16	X-19		S483	120	524	2016/2/25	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	6.49	3.44	9.04	0.57	
11-7	16	W-19	II		88	391	2012/2/24	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	5.13	3.79	8.96	0.43	
11-8	16	W-19	II南(トレンチ)			89	2011/10/7	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	5.99	2.89	8.88	0.55	
11-9	16	X-20	II南		129	560	2016/3/15	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	5.42	2.85	8.72	0.52	焼土分布
11-10	16	X-19	II		117	520	2016/2/24	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	7.30	3.37	8.72	0.59	
11-11	16	W-19	II		67	449	2012/1/27	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	5.97	3.33	8.63	0.51	
11-12	16	W-19	II南		29	225	2011/10/26	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	6.51	3.33	8.38	0.54	
11-13	16	V-20	II北			228	2011/10/26	IIIb 2	ガラス	無彩色の明るい灰	6.25	2.55	6.78	0.35	
11-14	16	W-19		S265	128	545	2016/3/7	IIIb 2	ガラス	無彩色	6.43	3.49	8.20	0.47	
11-15	16	X-19	II南			173	2011/10/19	IIIb 2	ガラス	赤みの灰	5.65	1.76	7.53	0.42	
11-16	16	W-20		S161		633	2017/1/31	IIIc	ガラス	赤みの灰	2.84	1.38	4.44	0.08	少し焼け
11-17	16	V-20	II北			286	2011/12/21	IIIc	ガラス	浅い黄みの橙	1.42	1.02	2.60	-	
13-8	16	W-19	I			6	2010/11/15	IIIb 1	水晶(透明)	無彩色	8.12	1.62	8.88	0.81	
13-9	16	X-19	I			26	2010/12/17	IIIb 2	ガラス	強い緑みの青	5.56	3.42	8.96	0.54	
13-10	16	W-19	I			16	2010/11/24	IIIb 2	ガラス	浅い緑みの青	4.99	2.03	6.39	0.27	
13-11	16	W-19	I			7	2010/11/15	IIIb 2	ガラス	えたた紫みの青	5.06	1.95	5.55	0.19	4分の1欠損
	16	V-20	II北(覆土)			475	2015/7/28	IIIb 2	ガラス	明るい灰みの橙	6.36	1.08	-	0.16	半分欠損
	16	V-20	II北			273	2011/12/20	IIIc	ガラス	黄みの白	2.56	1.48	3.87	0.05	
	16	V-20	II北			273	2011/12/20	-	-	青みの白	-	-	-	-	破片
	16	V-20	II北			286	2011/12/21	IIIc	ガラス	青みの灰	2.57	1.60	4.23	0.06	
	16	V-20	II北(覆土)			475	2015/7/28	IIIc	ガラス	黄みの暗い灰	-	-	-	0.03	
	16	W-19	II			447	2012/1/19	IIIc	ガラス	赤みの灰	2.73	1.48	4.78	0.08	
	16	W-20		S179		632	2017/1/31	-	-	-	-	-	-	-	割れ
	16	X-19	II南			517	2016/2/25	IIIb 2	ガラス	明るい緑みの青	5.63	2.13	-	0.17	剥離あり
	16	X-19	II南			528	2016/2/25	IIIc	ガラス	青みの灰	3.08	1.20	3.88	0.05	II層への移行層
	16	X-19	II南			528	2016/2/25	IIIc	ガラス	浅い青緑	-	1.45	3.67	0.03	上部剥離あり、III層への移行層
	16	X-19	II南			530	2016/2/24	-	-	-	-	-	-	-	洗浄中に粉砕
	16	W-19	I			6	2010/11/15	IIIb 2	ガラス	明るい緑みの青	5.91	-	-	0.22	半分欠損
	16	W-19	I			8	2010/11/16	IIIb 2	ガラス	赤みの灰	5.97	-	8.36	0.52	割れ、4分の1欠損

※ゴシック体は本報告書固有資料、明朝体は集計のみ。

[I 層出土遺物]

本調査区は、以前に畑として耕作されていた。その際に邪魔となった遺物が本調査区で露頭する岩盤上へ集められ、放置されていた。それらの遺物は集計表では岩盤上 I 層と表示し、実測図は I 層出土遺物として報告している。

1. カムイヤキ(第12図-1) 1は壺の底部でB群の資料である。

2. 青磁(第12図-2~12)

碗(第12図-2~8) 2は同安窯系I類の底部資料で、内体面に櫛描文を施す。外面胴部下半は露胎となる。3は龍泉窯系II類の口縁部資料で、鎬蓮弁文が施される。4は同IV類の口縁部資料で、5条の弦文を施す。5は同IV類の底部資料である。6~8は同V類の底部資料で、6は外面にヘラ彫りの草花文、内面見込みに圈線と印花文を施す。豊付けまで厚く釉薬がかかり、高台内は蛇の目釉剥ぎを施す。7は見込みに圈線と吉祥花文を施し、高台内は露胎となる。8は見込に圈線と印花文を押印、豊付けまで施釉し、高台内は蛇の目釉剥ぎ。

皿(第12図-9・10) 9は龍泉窯系V類の口折皿で外面に蓮弁文を施す。内面口縁近くに、文様を描く。10は同VII類皿の口縁部資料である。

その他の器種(第12図-11・12) 11は直口盤の口縁部資料である。12は、鉢の口縁部資料で、外面に雷文、内面に草花文を施す。

3. 白磁(第12図-13~15)

碗(第12図-13・14) 13はA群(口禿・景德鎮窯系)の碗の底部資料である。14はC3群(無文外反・閩清窯系)の碗の口縁部資料である。

壺(第12図-15) 15は白磁壺の口縁部資料である。第29集91-85と類似した資料か。

4. 青花(第12図-16~21)

碗(第12図-16・17) 16は徳化窯の外反碗の口縁部資料で、外面に寿字文と散らし梅花文が施される。第26集第101図-16と類似した資料がある。17は既報告14集第63図-13に器形が類似することから主郭分類青花碗III類に分類・集計したが、森達也氏により見込みの中央部が盛り上がることや、胎土と釉薬の間にガラス質の層がみられることから漳洲窯の製品であるとご教示いただいた。見込みには二重の圈線内に玉取り獅子、高台に二重圈線を施す。

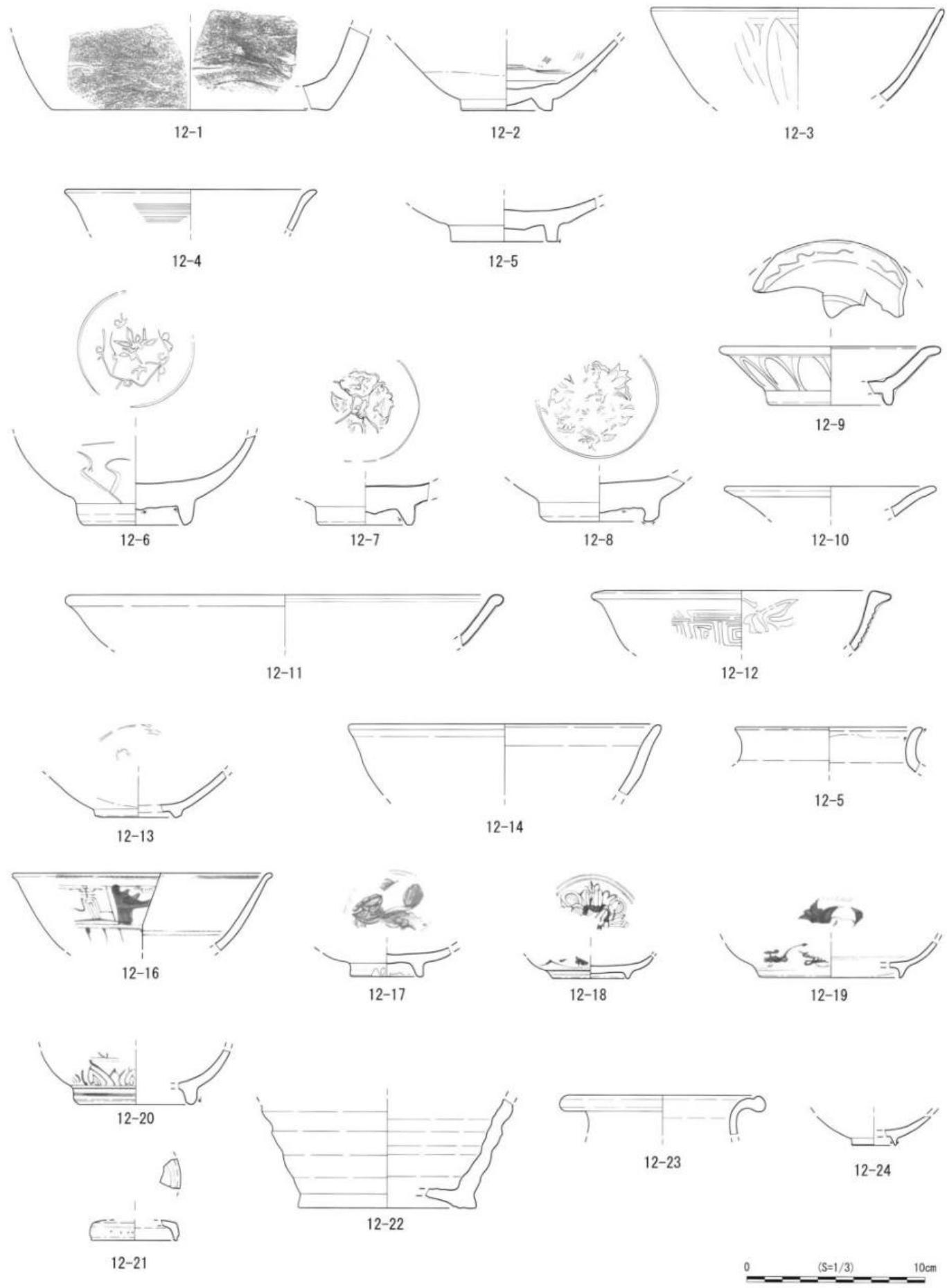
皿(第12図-18・19) 18・19は主郭分類明青花皿I類(小野B群:景德鎮窯系)である。18は外面に唐草文、内面見込みに十字花文を描く。19は外面に唐草文、内面に牡丹唐草文を描く。

その他の器種(第18図-20・21) 20は瓶の底部資料である。胴部下半に上下に二重圈線を排して区画した中に如意頭文、高台に二重圈線が描かれる。豊付け外側を面取りし、面取りした部分から高台内は露胎となる。内面は施釉され、横方向の調整痕がみられる。21は合子の蓋である。蓋甲に施釉し口唇から蓋裏は露胎となる。蓋甲上部に二重圈線、甲側面に圈線が描かれる。釉、呉須とともに発色は不良である。

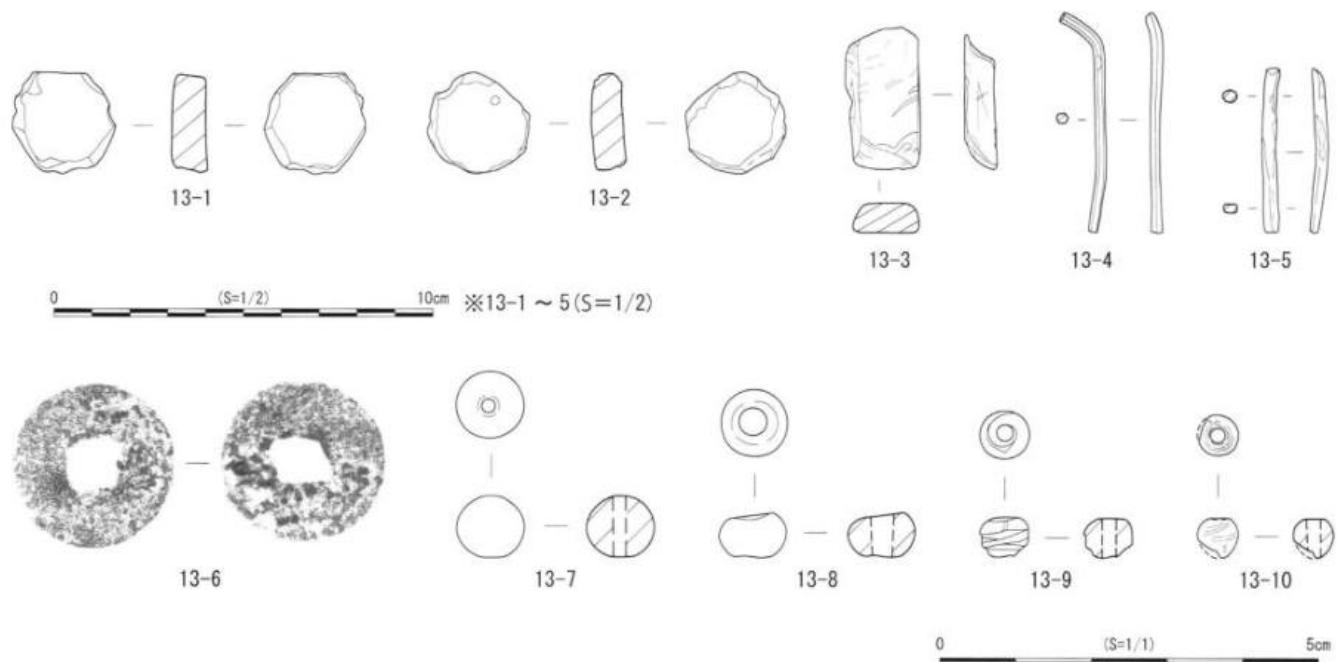
5. 褐釉陶器(第12図-22) 22は大型壺の底部資料である。中国産褐釉陶器とみられ、安座間分類5類、第29集I類にあたる。ロクロ痕が明瞭で、器壁は凹凸する。

6. タイ陶磁(第12図-23) 23はメナムノイ窯系の中小型壺の口縁部資料である。口縁部は玉縁状に肥厚し、大きく外反する。口縁部内面付近には、受部になるとおもわれる一条の沈線が巡らされている。

7. ベトナム陶磁(第12図-24) 24は小型の碗とみられる底部資料で、豊付け付近が無釉となるほか、高台内は施釉される。



第12図 屋敷地6(16次外郭調査)I層出土遺物実測図(1)



第13図 屋敷地6(16次外郭調査)I層出土遺物(2)

8. 遊具(第13図-1・2) 1・2は褐釉陶器を打割成形して円盤状にする製品で、遊具と考えられている。

9. 石器(第13図-3) 3は提砥の破片資料である。上原分類(上原2010)の懸垂棒札型の中でもA類(角棒形)にあたり、頭頂部の孔もしくは紐をかける部分が欠損していると考えられ、小形の製品と推測される。幅は約1.8cm、研磨面に両側面と広い片面の3面を用い、断面形は台形状を呈す。

10. 金属製品(第13図-4・5)

4・5は、用途不明の銅製品である。4は、厚さ2.6mmで、側面は面取りされて断面形が六角形を呈す棒状の製品である。一部くの字状に屈曲し、両端の断面は垂直に切られ、きれいである。断面の形状から簪の軸部の破片とも考えられる。5は棒状で両端の断面がやや丸くなる。断面形はかまぼこ状に一面がやや平坦で、その他の面が丸みを帯びる。

11. 錢貨(第13図-6) 6は無文銭で、外径22.24mmで主郭分類I類である。

12. 玉(第13図-7~10) 7は水晶製の丸玉で、主郭分類III類b1種である。8~10はガラス製の丸玉で主郭分類III類b2種、色調はいずれも青色系統である。II層に比べて玉類の出土数は少ないが、傾向としてはW-19グリッドに出土が集中し、青色系統が主体となる(前掲第3表)。

第4表 屋敷地6(16次外郭調査)出土遺物集計表(1)

第4表 屋敷地6(16次外郭調査)出土遺物集計表(2)

第4表 層數地6(16次外郭調查)出土遺物集計表(3)

第4表 屋敷地6(16次外郭調査)出土遺物集計表(4)

種別	器種	分類	文様等	遺物数小計												
				縦目	横目	縦上・横上	縦下・横下	縦上・横中	縦中・横上	縦中・横下	縦中・横中	縦中・横上	縦中・横下	縦中・横中	縦中・横上	
土器	陶器	小瓶	直部	1												
		実付	直部	2												
		小罐	直部		1											
タイ陶器	平瓶	直	直	1												
			側凹	3												
タイ陶器	平瓶	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	直	直	1												
			側凹	1												
タイ陶器	深鉢	曲	直	1												
			側凹	1	</											

第4表 陽敷地6(16次外郭調査)出土遺物集計表(5)

第5表 屋敷地6(16次外郭調査)出土遺物観察表(1)

記番	種別	分類	基種(玉類=色) (鉢=器名)	部位 (鉢→初耕 年)	器:口径 他:外形 鉢:外形 単位:cm (鉢・玉 =mm)	器:高さ 厚さ 鉢厚 単位:cm (鉢・玉 =mm)	器:底径 重量 単位:cm (鉢・玉 =mm)	次	グリット	量	濃度	dot	No.	備考	
7-1	土器	第3様式	碗	口縁	-	-	-	16次	W-19	S274	595				
7-2	青磁	龍泉系I類	碗	口縁	17.25	-	-	16次	W-20	II	148				
7-3	青磁	龍泉系V類	碗	口縁	15.3	-	-	16次	W-19	II	478				
7-4	青磁	龍泉系V類	碗	口縁	16.4	-	-	16次	W-20	542	55	374			
7-5	青磁	龍泉系V類	碗	口縁	17.2	-	-	16次	X-19	II	122	526			
7-6	青磁	龍泉系V類	碗	口縁	13.8	-	-	16次	W-19	II	227				
7-7	青磁	龍泉系V類	碗	完形	15.6	7.6	6.4	16次	V-20	II	341	163V-20542dot90Ne393-163V-20538Ne375-163V-20542dot93Ne396-163V-22542dot93Ne396 194-162V-20542dot94Ne397-162V-205397Ne559-162V-20542dot93Ne397			
7-8	青磁	龍泉系V類	碗	口縁	13.8	-	-	16次	X-19	5292	592	162X-195292dot644			
7-9	青磁	龍泉系V	碗	口縁	16.0	-	-	16次	W-19	II	16	175			
7-10	青磁	龍泉系V類	碗	口縁	12.8	-	-	16次	X-19	II	485				
7-11	青磁	龍泉系V類	碗	口縁	13.8	-	-	16次	W-19	S R 1	121				
7-12	青磁	龍泉系VI類	碗	口縁・底部	12.3	-	4.8	16次	W-19	II	97	16次W-19 II dot7Ne85			
7-13	青磁	龍泉系VI類	小碗	底部	-	-	3.5	16次	W-19	II	9	123			
7-14	青磁	同安窯系I類	皿	完形	9.4	1.8	4.4	16次	W-20	II	218	162W-20513dot86 Ne389			
7-15	青磁	同安窯系I類	皿	底部	-	-	5.4	16次	X-19	II	133				
7-16	青磁	龍泉系V類	皿	口縁	11.7	-	-	16次	W-19	II	117	16次W-19 I Ne6			
7-17	青磁	龍泉系V類	皿	口縁	12.0	-	-	16次	W-19	II	11	103			
7-18	青磁	龍泉系V類	皿	口縁	12.8	-	-	16次	V-20	S 66	54	373			
7-19	青磁	龍泉系V類	皿	底部	-	-	6.1	16次	V-20	S 42	57	376	162W-19 II Ne97		
7-20	青磁	龍泉系VI類	皿	完形	11.4	2.85	5.0	16次	W-19	S 235	126	541	162X-19 I Ne497-162X-19 I Ne34-162X-19 I Ne26		
7-21	青磁	龍泉系VI類	皿	完形	11.8	2.9	4.85	16次	W-19	II	119	162W-19 I Ne7-162W-19 I Ne8-162W-19 I Ne6-162W-19 I Ne3			
7-22	青磁	鉢縁	盤	口縁	22.0	-	-	16次	W-19	II	17	176			
7-23	青磁	鉢縁	盤	口縁	22.1	-	-	16次	W-19	II	471				
7-24	青磁	折縁	盤	口縁	26.85	-	-	16次	W-19	II	97	162W-19 II Ne89			
7-25	青磁	V類	鉢	口縁	21.0	-	-	16次	X-19	II	119	522			
7-26	青磁		瓶	口縁	5.8	-	-	16次	W-19	II	119				
7-27	青磁		香炉	口縁	6.25	-	-	16次	W-19	II	89	16次W-19 I Ne7			
8-1	白磁	A群	碗	口縁	12.6	-	-	16次	X-19	S 372	32	403			
8-2	白磁	C2群	碗	口縁	17.2	-	-	16次	W-19	II	489				
8-3	白磁	D群	皿	完形	8.3	2.0	3.7	16次	W-19	II	16	162W-19 I Ne120-162W-19 II Ne119-162X-19 II Ne133-162W-19 I Ne200			
8-4	白磁	E群	皿	完形	11.2	3.0	6.1	16次	V-20	II	195	162W-20 II Ne193			
8-5	白磁	E群	杯	底部	-	-	3.55	16次	W-19	II	141				
8-6	白磁		壺	口縁	6.0	-	-	16次	V-20	II	212				
8-7	青花	菊花小皿	皿	口縁	6.9	-	-	16次	W-19	II	149	16次W-19 II Ne177			
8-8	青花	II類	碗	完形	14.7	7.0	6.0	16次	W-19	II	22	152	162W-19 II Ne229Ne158-162W-19 II Ne68-162W-19 II Ne24Ne138-162W-19 II Ne117- 162W-19 II Ne217-162W-19 II Ne7		
8-9	青花	II類	碗	口縁	14.7	-	-	16次	W-19	II	97	162X-19 II Ne34			
8-10	青花	III類	碗	口縁	13.2	-	-	16次	V-20	S 42	56	375			
8-11	青花	III類	碗	口縁	13.1	-	-	16次	V-20	S 42	98	414	162W-20 II Ne148		
8-12	青花	IV類	碗	口縁	15.9	-	-	16次	V-20	S 32	58	377			
8-13	青花	I類	皿	口縁	9.3	-	-	16次	V-20	S 56	345				
8-14	青花	II類	皿	底部	-	-	5.9	16次	V-20	S 55	79	361			
8-15	本土産陶器	偏前	壺鉢	口縁	30.2	-	-	16次	W-19	II	77	162W-20 II Ne179-162W-19 II Ne97			
8-16	褐釉	5類	壺	口縁	18.4	-	-	16次	W-19	S R 1	129				
8-17	褐釉	中・小型	壺	口縁	10.7	-	-	16次	V-20・19	II	312				
8-18	褐釉	中・小型	壺	底部	-	-	11.9	16次	W-19	S R 1	121				
8-19	タイ褐釉	ソーサックチャナライ	壺	口縁	20.9	-	-	16次	W-19	S R 1	129				
8-20	半磁土器	タイ	壺	口縁	17.7	-	-	16次	V-20	S 59	565	162X-20542dot675			
8-21	集散青磁		壺	胴部	-	-	-	16次	V-20	II	282	162W-19 II Ne119-13次西区表採知154[報告書19(95-271)で報告済]			
9-1	石器		砾石		16.6	6.4	446.52	16次	V-20	S 42	85	388			
9-2	金属製品	青銅	切子頭		13.04	1.69	2.37	16次	V-20	II	36	275			
9-3	金属製品	青銅	鋸角付環座		23.24	1.6	2.69	16次	V-19	II	47	296			
9-4	金属製品	青銅	覆輪		92.0	0.84	5.29	16次	W-19	II	70	右判トレンチII層			
9-5	金属製品	青銅	覆輪		27.57	0.53	0.81	16次	X-19	II		137			
9-6	金属製品	青銅	盤		65.13	2.5	1.92	16次	W-20	S 119	31	223			
9-7	金属製品	青銅	飾状の製品		20.92	0.95	1.82	16次	W-19	II	55	456			
9-8	金属製品	青銅	金具状の製品		27.82	1.32	3.74	16次	V-20	II	41	278			
9-9	金属製品	青銅	不明		19.43	0.86	1.66	16次	W-19	II	30	224			
9-10	金属製品	青銅	不明		42.0	0.84	0.9	16次	W-20	II		159			
9-11	金属製品	青銅	不明		57.8	4.52	3.72	16次	W-19	II	25	157			
9-12	金属製品	青銅	煙管		183.18	12.64	44.87	16次	W-20	S 119	31	223			
9-13	金属製品	鉄	轡		47.56	8.08	6.34	16次	W-19	II		144			
9-14	金属製品	鉄	轡		45.72	7.96	4.98	16次	W-19	II		481			
9-15	金属製品	鉄	刀子		85.23	4.72	19.35	16次	X-19	II		138			
9-16	金属製品	鉄	刀子		83.67	5.33	24.83	16次	W-20	S 167	102	427			
9-17	金属製品	鉄	釣針		85.0	4.66	4.78	16次	X-19	II	110	512			
9-18	金属製品	鉄	模		37.81	8.8	14.55	16次	X-19	II	114	516			
9-19	金属製品	鉄	釘		26.86	1.83	0.49	16次	W-19	II		87	トレンチII層		
9-20	金属製品	鉄	釘		37.66	3.08	1.22	16次	W-19	II		169			
9-21	金属製品	鉄	釘		57.12	4.5	5.75	16次	W-19	II		71	トレンチII層		
9-22	金属製品	鉄	釘		60.29	9.1	14.61	16次	X-19	II		530			

第5表 屋敷地6(16次外郭調査)出土遺物観察表(2)

測定	種別	分類	器種 (玉類・色) (鉄・圓筒)	剖面 (鉄=切替 年)	基:口径 他:外形 単位=cm (鉄=玉 =mm)	基:裏 厚さ 鉄厚 単位=cm (鉄=玉 =mm)	基:底 重量 単位=g (鉄=玉 =mm)	次	プリット	層	直角	dat.	% %	備考	
9-23	金属製品	鉄	不明		89.0	3.56	3.03	16次	V-20	S27	69	459			
9-24	金属製品	鉄	不明		47.9	1.38	0.42	16次	W-19	II		463			
9-25	金属製品	鉄	不明		25.51	4.31	3.12	16次	X-19	II		472			
9-26	金属製品	鉄	板状		34.51	4.18	14.8	16次	X-19	II	114	516			
10-1	銭貨	皇宋通寶	北宋	1038年	24.7	1.34	3.65	16次	W-19	II		110			
10-2	銭貨	至和元寶	北宋	1054年	23.27	1.37	3.44	16次	X-19	II	113	515			
10-3	銭貨	□豊通口	北宋	1078年	-	0.97	0.95	16次	X-19	S463	628	約半分欠損 元豊通寶か? S463,SB01を構成するSの1つ			
10-4	銭貨	瑞平通寶	南宋	1234年	35.01	2.47	9.23	16次	W-19	II	20	172	当三錢		
10-5	銭貨	洪武通寶	明	1368年	24.7	1.72	7.5	16次	X-19	II	104	434	1 1/3枚、2枚重なる。2枚重なりの錢厚2.48mm		
10-6	銭貨	永樂通寶	明	1408年	24.9	1.5	3.11	16次	V-20	II	26	209			
10-7	銭貨	永樂通寶	明	1408年	24.78	1.47	3.04	16次	W-19	II	5	83			
10-8	銭貨	永□通□			-	1.22	1.45	16次	X-19	II		530	半分欠損 永樂通寶か?		
10-9	銭貨	祐□□寶			29.45	1.58	4.86	16次	W-19	II	68	451			
10-10	銭貨	□□□寶			29.46	2.02	7.87	16次	W-19	II	28	226	折二錢 元豊通寶か?		
10-11	銭貨	不明			-	1.77	2.26	16次	X-19	II	104	343	欠損		
10-12	銭貨	不明			23.2	1.05	1.95	16次	W-19	II	63	450			
10-13	銭貨	無文銭			18.61	1.05	0.76	16次	X-19	II		508			
10-14	銭貨	無文銭			-	0.86	0.61	16次	X-19	II a	49	369	燒土分布内。2片		
11-1	玉	勾玉 (I類)	赤みの灰		14.56	5.65	0.59	16次	W-19	II	65	448	上部欠損		
11-2	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		7.4	9.96	0.87	16次	X-19	S190	127	544			
11-3	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		5.81	9.9	0.67	16次	X-19	II		530	剥離あり		
11-4	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		6.46	9.63	0.77	16次	X-19	II	115	518			
11-5	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		6.02	9.06	0.57	16次	W-19	II	50	306			
11-6	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		6.49	9.04	0.57	16次	X-19	S483	120	524			
11-7	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		5.13	8.96	0.43	16次	W-19	II	88	391			
11-8	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		5.99	8.88	0.55	16次	W-19	II		89			
11-9	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		5.42	8.72	0.52	16次	X-20	II a	129	560			
11-10	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		7.3	8.72	0.59	16次	X-19	II	117	520			
11-11	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		5.97	8.63	0.51	16次	W-19	II	67	449			
11-12	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		6.51	8.38	0.54	16次	W-19	II	29	225			
11-13	玉	丸玉b 2	無彩色の明るい灰		6.25	6.78	0.35	16次	V-20	II		228			
11-14	玉	丸玉b 2	無彩色		6.43	8.2	0.47	16次	W-19	S265	128	545			
11-15	玉	丸玉b 2	赤みの灰		5.65	7.53	0.42	16次	X-19	II		173			
11-16	玉	丸玉c	赤みの灰		2.84	4.44	0.08	16次	W-20	S161	633	少し欠け			
11-17	玉	丸玉c	浅い黄みの橙		1.42	2.6	-	16次	V-20	II		286			
11-18	ガラス製品	丸餅型	青みの白		16.65	6.57	2.52	16次	W-19	II		232			
11-19	ガラス製品	丸餅型	緑みの白		14.02	6.13	1.68	16次	X-19	II	114	516			
12-1	カムイヤキ	壺	底部	-	-	15.4	16次	X-20	I		25				
12-2	青磁	同安窯系	碗	底部	-	-	5.0	16次	X-20	I		563			
12-3	青磁	龍泉窯系II類	碗	口縁	16.8	-	-	16次	岩上	I		35			
12-4	青磁	龍泉窯系IV類	碗	口縁	14.0	-	-	16次	W-19	I		3	16次X-19 I b №421		
12-5	青磁	龍泉窯系IV類	碗	底部	-	-	6.0	16次	岩上レキ	I		42	16次岩上レキ№38		
12-6	青磁	龍泉窯系V類	碗	底部	-	-	5.9	16次	岩上	I		40			
12-7	青磁	龍泉窯系V類	碗	底部	-	-	5.2	16次	X-19	I		33			
12-8	青磁	龍泉窯系V類	碗	底部	-	-	5.8	16次	W-19	I		20			
12-9	青磁	龍泉窯系V類	壺	完形	12.2	3.3	6.8	16次	X-19	I		34	16次X-20 I №25		
12-10	青磁	龍泉窯系VII類	壺	口縁	11.7	-	-	16次	W-19	I		120			
12-11	青磁	直口	盤	口縁	24.2	-	-	16次	W-19	I		120			
12-12	青磁		鉢	口縁	15.7	-	-	16次	W-19	I		7	16次W-19 I №4		
12-13	白磁	A群	碗	底部	-	-	4.1	16次	X-19	I		477			
12-14	白磁	C群	碗	口縁	17.5	-	-	16次	X-19	I		32	16次X-19 I №31 - 16次X-19 I №34		
12-15	白磁		壺	口縁	10.4	-	-	16次	W-19	I		4	16次X-19 I №26		
12-16	青花	德化窯	碗	口縁	14.5	-	-	16次	岩上	I		36			
12-17	青花	III類	碗	底部	-	-	4.1	16次	岩上レキ	I		38			
12-18	青花	I類	壺	底部	-	-	4.2	16次	V-20	I		15	16次W-20 I №18		
12-19	青花	I類	壺	底部	-	-	7.8	16次	V-20	I		12			
12-20	青花		瓶	底部	-	-	6.4	16次	W-19	I		7	16次X-19 I №31		
12-21	青花		合子	蓋	4.7	-	-	16次	W-19	I		4			
12-22	褐釉		壺	底部	-	-	9.9	16次	岩上レキ	I		42			
12-23	タイ袖袖	メナムノイ	壺	口縁	10.8	-	-	16次	W-20	I		536			
12-24	ペトナム白磁		小碗	底部	-	-	2.4	16次	X-20	I a		428			
13-1	遺具		円盤状製品		-	-	-	16次	W-19	I		5			
13-2	遺具		円盤状製品		-	-	-	16次	W-19	I		7			
13-3	石器	參差棒札型	擦拭		38	20.0	9.75	16次	W-20	I		194			
13-4	金属製品	青銅	不明・棒状		63.0	2.59	2.6	16次	W-19	I		173			
13-5	金属製品	青銅	不明		43.98	3.19	2.41	16次	X-19	I		54			
13-6	銭貨	無文銭			21.9	0.82	1.6	16次	W-19	I		52			
13-7	玉	丸玉b 1	(透明)無彩色		8.12	8.88	0.81	16次	W-19	I		6			
13-8	玉	丸玉b 2	強い緑みの青		5.56	8.95	0.54	16次	X-19	I		26			
13-9	玉	丸玉b 2	浅い緑みの青		4.99	6.39	0.27	16次	W-19	I		16			
13-10	玉	丸玉b 2	さえた緑みの青		5.06	5.6	0.19	16次	W-19	I		7	一部欠損		

第2節 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)

カーザフ北側城壁は外郭中区とカーザフ郭を区画する城壁である。現況では外郭に面する北面に面石が残り、カーザフ側の南面には面石が見られず、土が盛られた状態となっている。平成22年に実施した14次外郭調査では、この北側城壁が旧県道(現在廃道)下に残る外郭西側城壁に接続し、外郭西側城壁はそのままカーザフ西側城壁方向に延びる様子が確認されたことから(今帰仁城跡発掘調査報告VI:第32集/p123~128)、外郭20次調査ではカーザフ北側城壁を把握することを目指し、縦断するトレンチ調査をおこない、外郭22次調査は外郭中区カーザフ北側試掘調査を実施した。

なお、22次カーザフ東側城壁、南側城壁調査は、今帰仁城跡発掘調査報告VIIにおいて報告済みだが、詳細遺構図について付図を追加して別図で掲載する。

1. 層序(第15・16図)

カーザフ北側城壁を縦断するトレンチ調査および外郭中区の試掘調査では、現代の表土・旧耕作土であるI層、この下にグスク時代相当の遺物包含層(II~III層)が認められる。柱穴遺構等はII層除去後にIII層上面で確認することができたが、遺構検出面で掘削をとどめていることから、III層の詳細は不明となっている。各層の所見は以下のとおりである。

I層:[10YR4/6褐色土層]現代の表土・旧耕作土である。カーザフ北側城壁前平坦面全体を覆う土層。特に調査区北側にあたるA-28グリッドでは1m近く堆積する部分がみられたほかは、約20~40cm堆積している。

II層:[10YR4/4~3/4褐色~暗褐色土、10YR3/3暗褐色土層]当該遺跡を形成するグスク時代の遺物包含層。遺跡全体を覆う。

C-27・28グリッドやB-27・28グリッドなどで部分的に、10YR4/3~4/4にぶい黄褐~褐色土のIII層への漸移層とみられる土層がみられ、出土遺物はII層下部とナンバリングしている。

III層:[10YR4/6~5/6褐色土~黄褐色土層]掘り下げていないため詳細は不明である。

2. 遺構(第14・16図)

カーザフ北側試掘調査(22次調査)は東西に2本、南北に1本トレンチを入れ、遺構確認を行った(第14図)。調査区北側においてII層除去後に柱穴が集中して確認できたが、他は散見できる程度であった。カーザフ郭北側城壁は(20次調査)、外郭14次調査で検出された西側城壁にかぶる状況であったことから、城壁を縦断するトレンチを入れている。

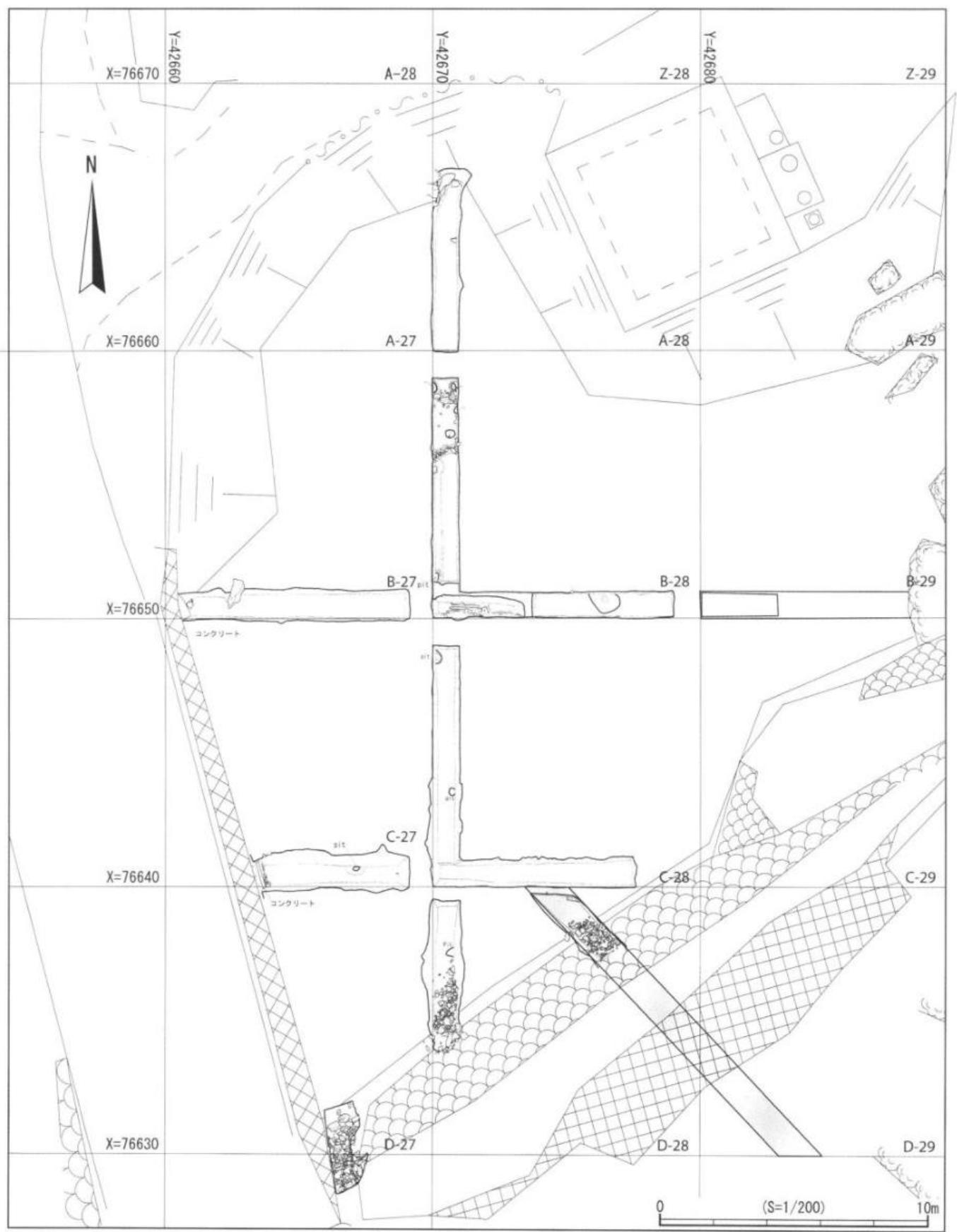
種類 遺構数 12基

・柱穴(SP) 10基 ・土坑(SK) 1基 ・石積み遺構(SR) 1基(カーザフ北側城壁)

[名称]カーザフ北側城壁 [位置]外郭中区・カーザフ郭 [遺構図]第15図

[検出面] 地表層に露出 [規模]長さ約35m、高さ約3m

[所見] カーザフ北側城壁はカーザフ郭と外郭中区を区切る城壁で、外郭側の北面に石積が残っている。しかし、下半分は盛土に埋まっている状態であった。城壁に縦断するトレンチを入れたところ、盛土中から石積が見つかった。石積の保存状況は悪く、盛土内で大きく孕み出していた。地表



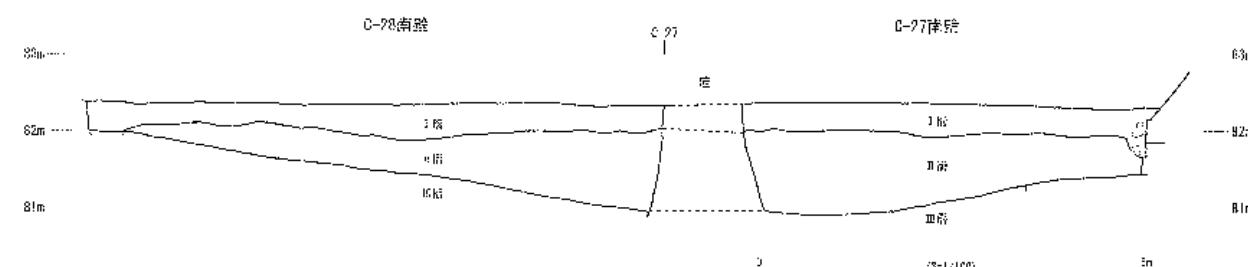
第14図 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)遺構配置図(※アミカケ部分はカーザフ北側城壁縦断トレーニチ)

面に露出している上部城壁は後方に倒れ、今帰仁グスクの他の城壁より緩い勾配になっている。根石はⅢ層に乗っているのが確認された。なお、上部城壁は環境整備報告書I【図面集】p94~95において掲載しており、今回確認された北側城壁外壁部分について立面図を作成している(第15図)。

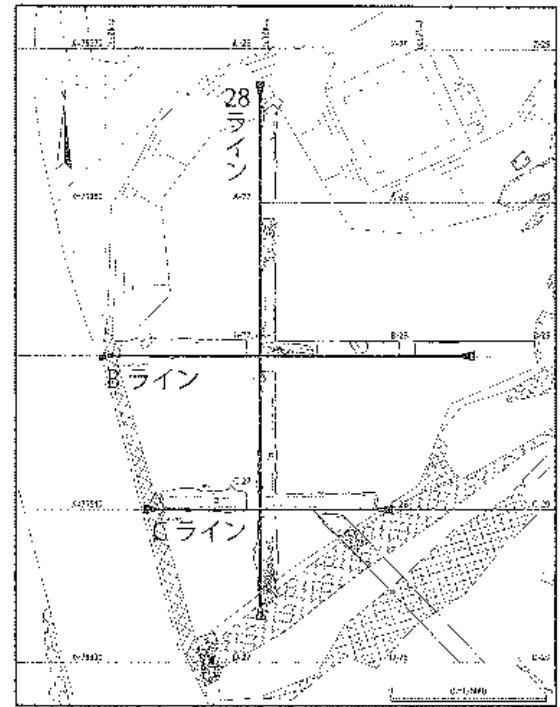


第15図 カーザフ北側城壁(外壁)立面・平面詳細図

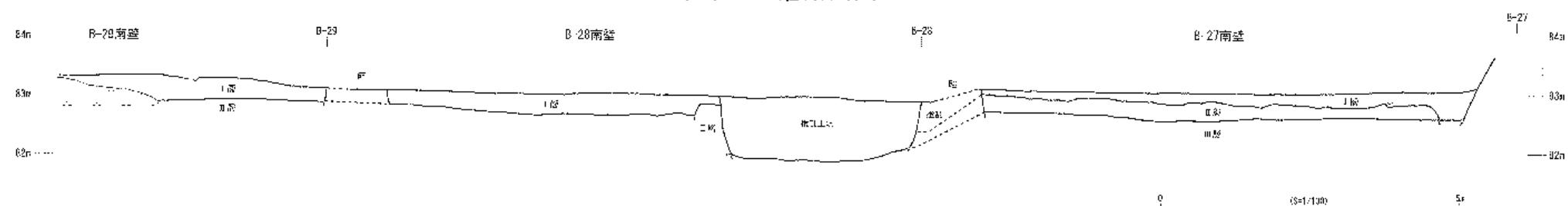
Cライン土層断面図



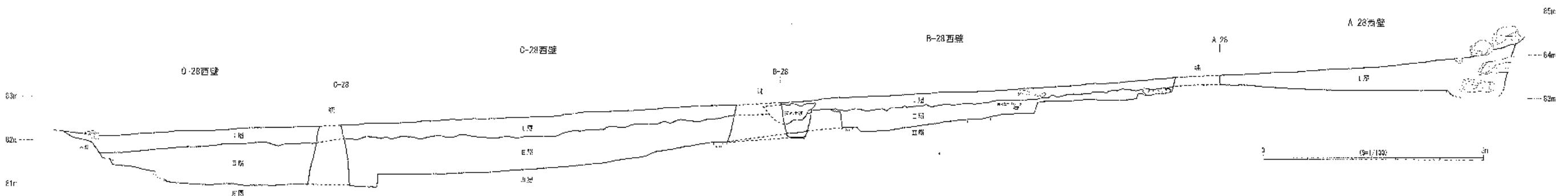
土層断面図位置図



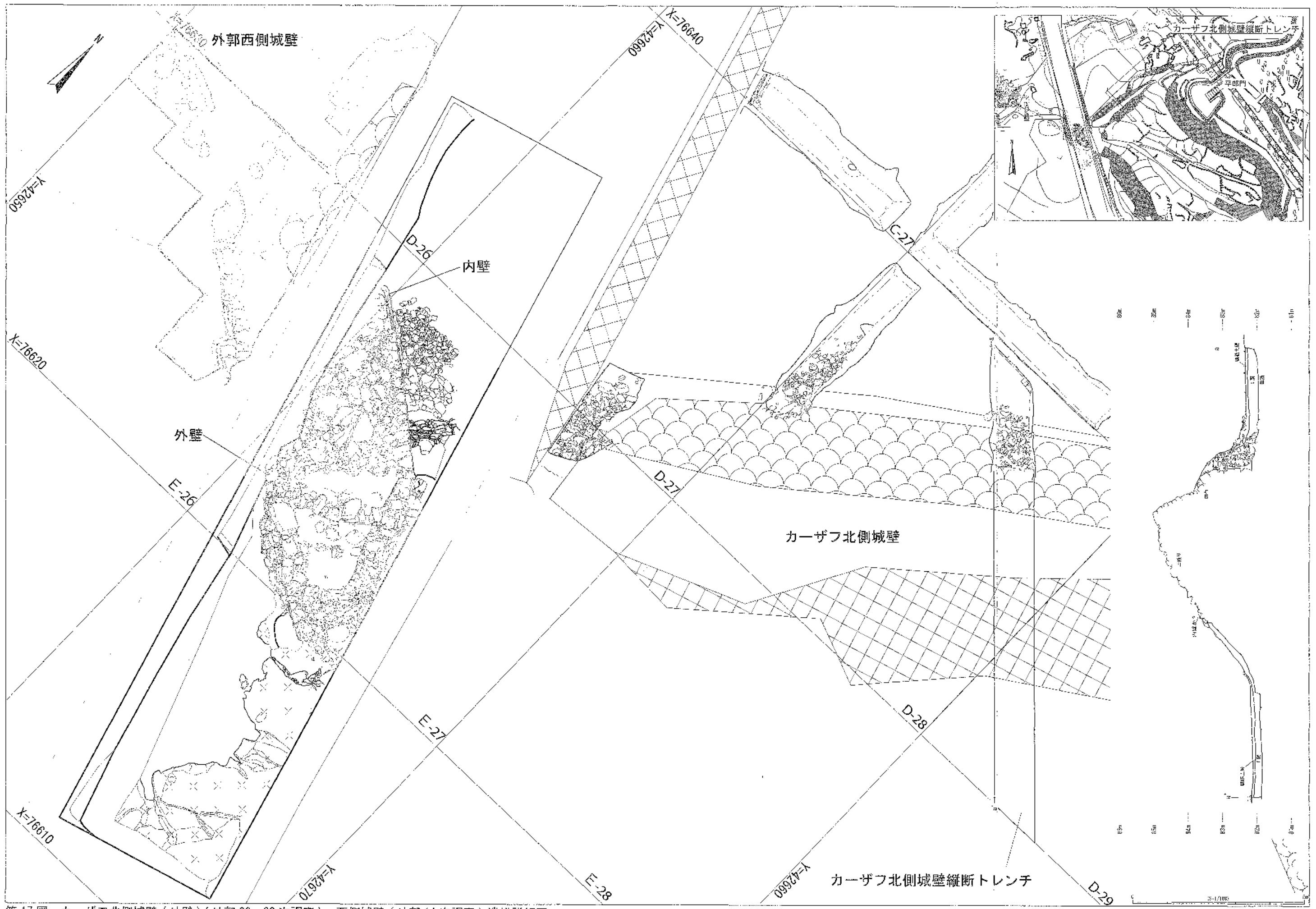
Bライン土層断面図



28ライン土層断面図



第16図 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)土層断面図



第17図 カーザフ北側城壁（外壁）（外郭20・22次調査）・西側城壁（外郭14次調査）遺構詳細図

3. 包含層出土遺物

[カーザフ北側城壁縦断トレンチ出土遺物]

1. カムイヤキ(第18図-1) 1はカムイヤキの底部資料で、いわゆるB群の資料。外面は横方向のナデ調整で叩き具痕は消されている。内面胴部に横方向の工具による回転ナデ調整、内面見込みに6～7条1単位の調整痕が放射線状にみられる。底部は見込みに向かって盛り上がる。

2. 青磁(第18図2～5)

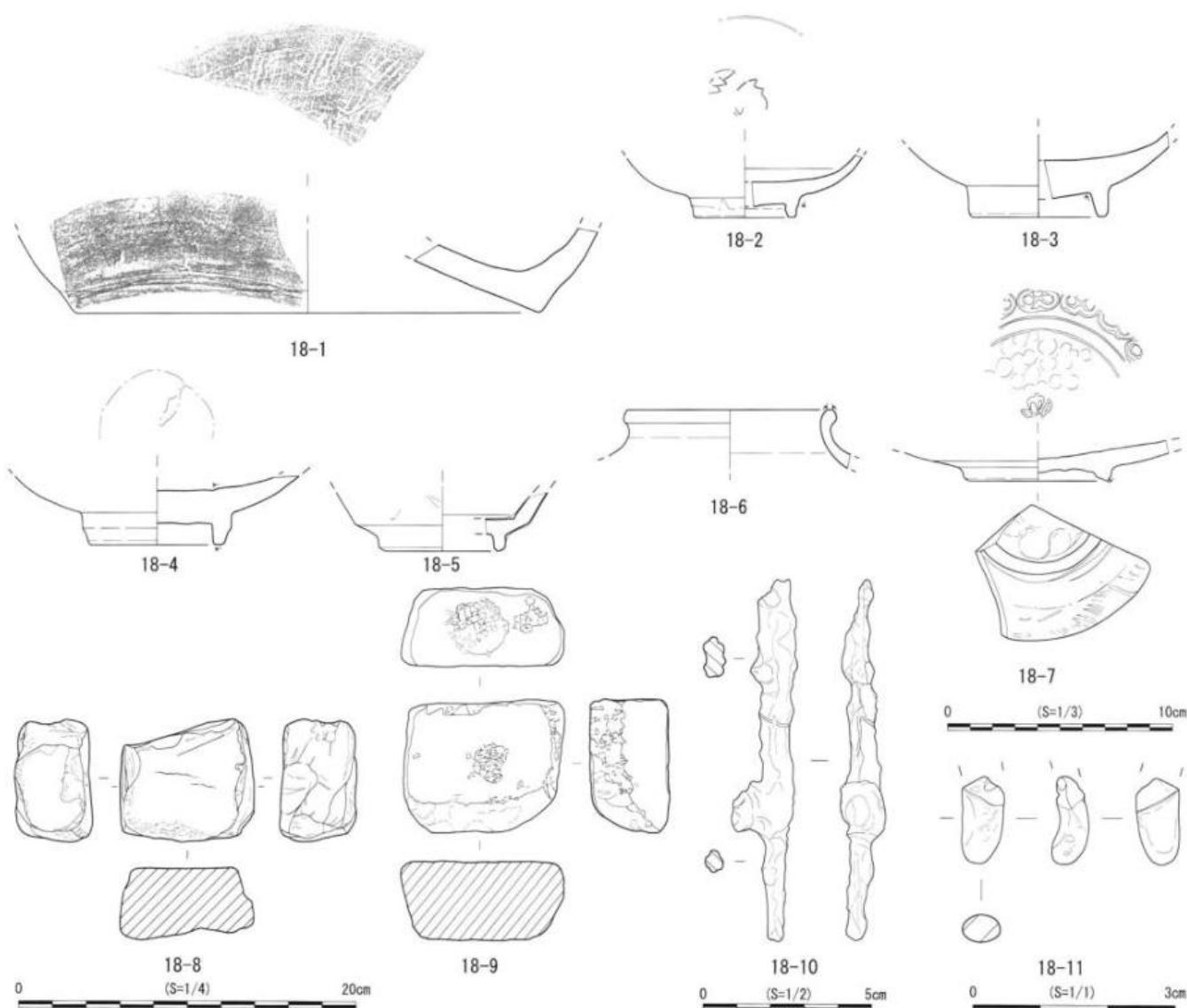
碗(第18図-2～4) 2は龍泉窯系青磁碗IV類の底部資料で、見込みに印花文を施す。3は龍泉窯系青磁碗V類の底部資料で、釉の発色は不良で、高台内は露胎である。4は龍泉窯系青磁碗V類の青磁碗底部資料である。胎土・釉ともに粗雑で、釉の発色は悪い。見込みの釉は円形に削り取られ、高台外面と疊付け側面は削り取られている。高台内面は露胎である。

皿(第18図-5) 5は龍泉窯系青磁皿V類の底部資料である。

3. 褐釉陶器(第18図-6) 6は口縁部を肥厚させる壺である。褐色の素地に赤みのある灰色の釉を薄く施釉する。

4. 高麗陶磁(第18図-7)

7は皿の底部資料である。内面は見込み中央部に白象嵌で印花文が施さ



第18図 カーザフ北側城壁縦断トレンチ出土遺物実測図

れる。その外側に白象嵌による二重の圈線と如意頭文が巡らされる。印花文と二重の圈線の間は竹管と思われるくぼみが施されるが判然としない。高台内は指で胎土を引き延ばしたような跡がみられる。豊付けが釉剥ぎされるほかは、全面に施釉される。外面には高台と上に二本の線彫が巡りその後えに櫛描きのような痕が下から上の斜め方向に残る。

5. 石器(第18図-8・9) 8は置砥である。9は平坦面・側面に敲打痕がみられる敲き石である。平坦面は平滑になっており砥石の可能性もある。断面は台形状である。

6. 金属製品(第18図-10) 10は鉄鏃で、先端が欠損しているがバチ形と推測される。

7. 玉(第18図-11) 11は主郭分類I類の勾玉の端部資料である。

[II層出土遺物]

1. 土器(第19図-1・2) 1と2はグスク土器で内外面に指頭圧痕が明瞭に残る(第3様式)。1は甕形の口縁部で、口縁部を小さく直立させる。2は壺形の口縁部資料である。長頸の口縁部は大きく外反する。

2. カムイヤキ(第19図-3・4) 3・4は、いわゆるB群のカムイヤキで、3は鉢形の口縁部、4は壺形の底部とみられる。

3. 青磁(第19図-5~16)

5~9は碗の口縁部資料で、10~12は碗の底部資料である。5・6は同安窯系I類で、同一個体とみられる。内面に櫛描文が施される。外面胴部下半は露胎となる。10も同安窯系I類の底部であるが、前者とは別個体とみられる。7・8は龍泉窯系II類で、外面には鎬蓮弁文が施される。9は泉州窯系で、口縁は外反する。11・12は龍泉窯系IV類で見込みに印花文が施される。角高台となり、豊付けから高台内には釉薬がかけられず露胎となる。13は龍泉窯系V類の底部資料で、内面底部から胴部への立ち上がり部分に一重の陰圈線が巡らされる。

14は龍泉窯系VI類の皿である。釉薬は淡い緑色を呈する。見込みは円形に釉剥ぎされ、高台内途中まで粗雑に施釉される。外底中央部に突起がみられる。見込みには印花文が施文される。

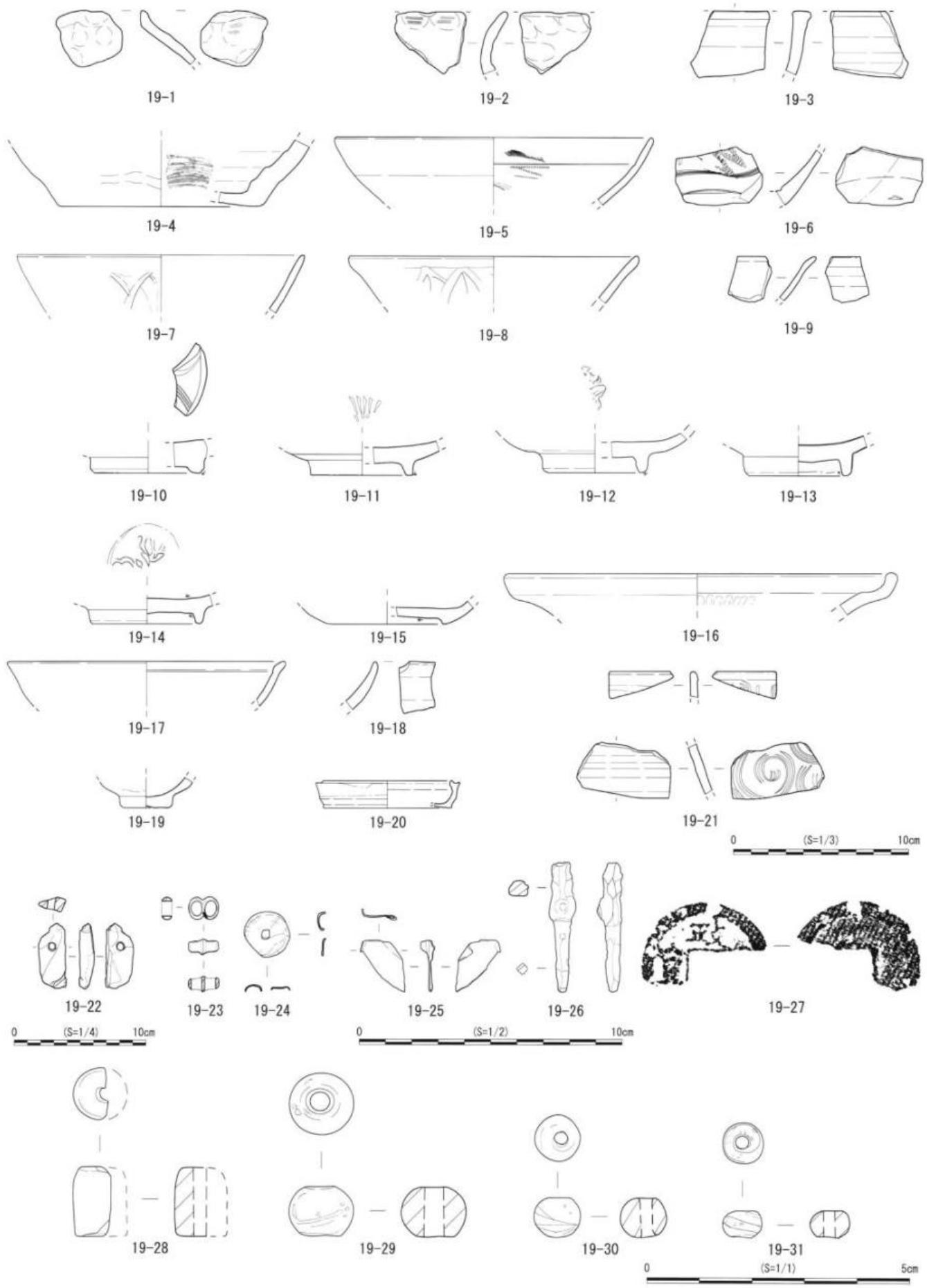
15は摹箭底の杯である。高台内の中央部が釉剥ぎされる。釉薬は発色が鈍く不透明である。16は摘み上げのある鍔縁盤の口縁部資料で、内面に比較的細い範彫りの蓮弁文が施される。釉薬の発色は悪く不透明である。

4. 白磁(第19図-17~20) 17はC3群(無文外反・閨清窯系)碗で、口縁部内側に段をつくるように圈線を廻らす。18はC2群(ビロースクII・閨清窯系)皿。19は器形不明の底部資料か。胎土はなめらかで軟質、釉薬は少し青みがある白色である。見込みには成形痕と思われる渦巻状の筋が薄くみられる。高台および胴部への立ち上がり部分は露胎となる。高台は特徴的で、径2.6cm、高さ0.6cm程度の円盤状の粘土を張り付けたような形態で、胎土に縮緬状の筋が残りながらも丸く仕上げられている。高台内はやや円形にくぼむが滑らかに仕上げられている。20は合子。器高は低く、ベタ底で、蓋の受け部と底面から胴部下部は無釉となる。胴部の施釉と無釉の境部分は胎土が線状に盛りあげられる。

5. 青白磁(第19図-21) 21は口縁部と胴部の破片資料であるが、胎土や釉薬などから同一個体と思われる。胴部には刻文で唐草文が施されており、口縁部端部近くまで、外面に同様の文様がみられる。口縁部の形状から壺と推測される。

6. 石器(第19図-22) 22は円形の孔をもうけた提砥で、上原靜氏の分類(上原2010)の懸垂棒札型である。

7. 金属製品(第19図-23~26) 23~25は青銅製品で、23は武具である鎧の胴部と型部をつなぐ紐



第19図 外郭中区カーサフ北側試掘調査(20・22次外郭調査)出土遺物実測図(1)

をとめる金具である責鉗である。24は武具に用いる座金具で、方形の孔が中央部に上側からあけられ、菊花状に孔から縁辺に向かってうつすらと刻み巡らされる。25は用途不明の板状製品で、片面に鍍金が残る。鍍金された面に線刻のようなものもみられるが、文様なのか判然としない。26は鉄鏃である。先端が欠損している。

8. 錢貨(第19図-27) 27は欠損しているが「政□□寶」が残存していることから政和通寶(北宋・1111年)の可能性がある。

9. 玉(第19図-28~31) 28は主郭分類II類にあたる管玉、29~31は丸玉b 2類である。

[I層出土遺物]

1. 青磁(第20図-1~8)

碗(第20図-1~7) 1・2は龍泉窯系青磁碗I類の口縁部で内面に劃花文が描かれる。3は龍泉窯系青磁碗II類の口縁部で、外面に鎬蓮弁文が施される。4・5は龍泉窯系青磁碗IV類の資料で口縁部は外反し、4の外面には無鎬蓮弁文、5は無文となる。6は龍泉窯系青磁碗I類の底部資料で、見込みに四角の枠と「遺」の文字がみられる。大宰府史跡では、SD1230から見込みに「河濱遺範」の文字が押された龍泉窯系青磁碗が出土しており、本資料も同様のスタンプであったと推測される。県内発掘調査出土遺物の確認はできていないが、倉木崎海底遺跡(鹿児島県)や、濟州島新昌里海底遺跡で出土がみられる。7は龍泉窯系青磁碗VI類の底部で、外面に細蓮弁文がみられる。

皿(第20図-8) 8は龍泉窯系青磁皿IV類の口折皿で、折れはやや緩やかである。外面に笠彫りで立体感のある蓮弁文が施される。

2. 白磁(第20図-9) 9は壺の口縁部資料である。口縁部はやや外反する。

3. 青花(第20図-10) 10は皿の口縁部資料である。内面部口縁および見込みに界線がみられ、外面には唐草文が描かれる。主郭分類の青花皿I類か(小野B群)。

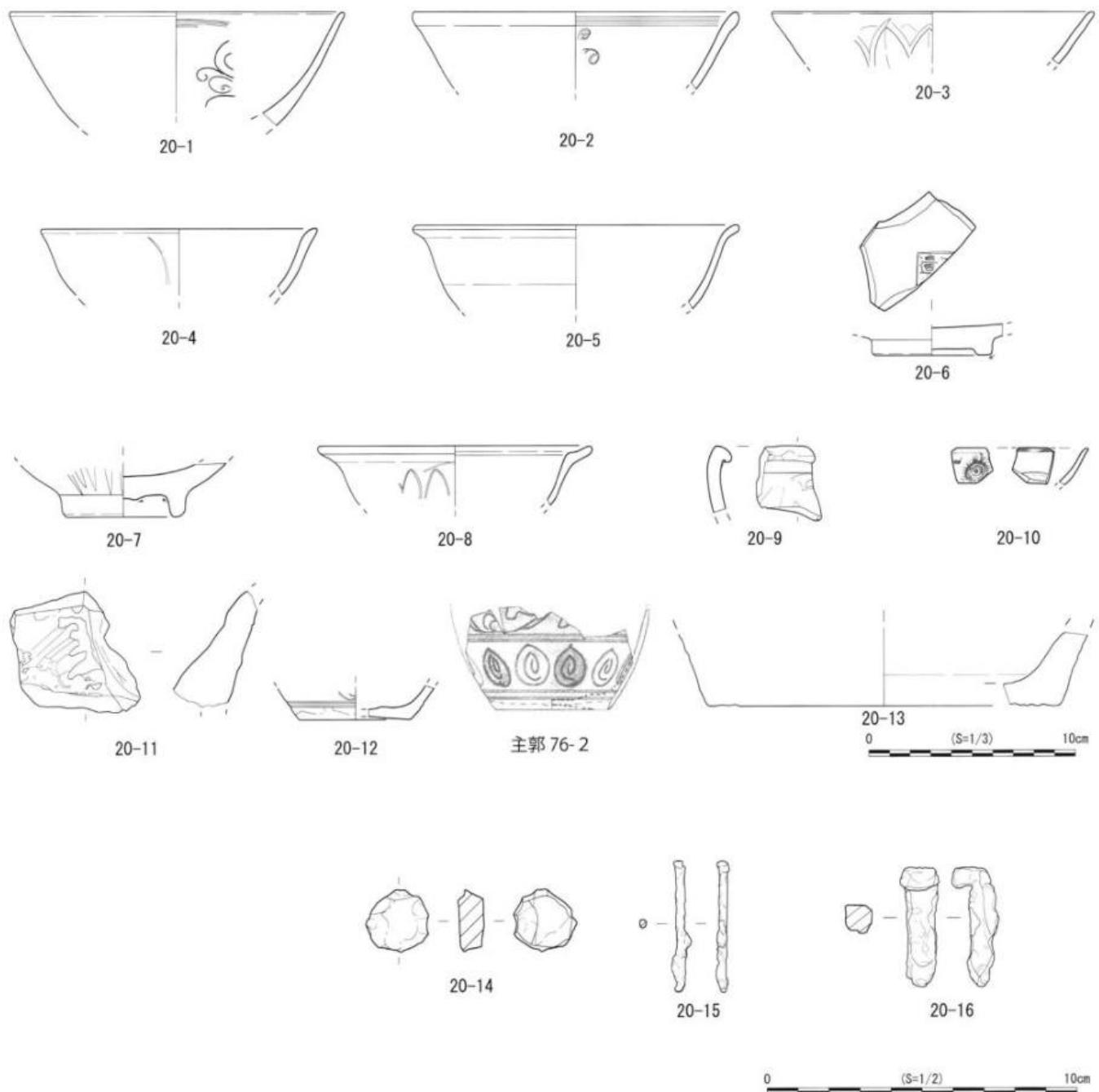
4. 翡翠釉(第20図-11) 底部の破片資料で、厚みや主郭などの出土例から酒会壺が想定される。外面は翡翠釉が厚く垂れるように残る部分と剥落した部分があり、その下の白化粧がみえている。内面には瑠璃釉はみられず、横方向の調整痕跡がみられる。高台は畳付けが欠損するが、高台内抉が残る。

5. 三彩(第20図-12) 12は底部資料で、壺類と考えられる。今帰仁城跡主郭I~II層の出土品(14集『今帰仁城跡発掘調査報告II』第76図2)と接合した資料である。外面は無文の部分は緑釉で、腰下部に崩れた如意頭文が描かれる。如意頭文には黄色と茶色が交互に施釉される。如意頭文の下に二本の線刻が巡らされる。線刻の下、底部立ち上がり部分から底部は施釉されず露胎となる。

6. 褐釉陶器(第20図-13) 13は壺の底部破片資料である。素地は淡橙色で、白色粒子や1mm程度の黒色粒が含まれ、やや軟質である。釉薬はみられず、外面に調整に伴う横方向の砂粒の移動痕がみられる。生産地は中国か断定できないがここで紹介する。胎土は既報告26集107~146に近いか(斎里村類似で報告されている)。

7. 遊具(第20図-14) 14は白磁底部を打割成形して円盤状とする製品で、遊具と考えられている。

8. 金属製品(第20図-15~16) 15・16は鉄釘である。いずれも断面方形で、頭部を折りたたむように折れる皆折れのいわゆる和釘である。15は厚さ2.6mmと細い。



第20図 外郭中区カーサフ北側試掘調査(20・22次外郭調査)出土遺物実測図(2)

第6表 カーサフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)出土遺物集計表(1)

種別	器種	分類	文様等	部位	I 層	II 層	T P I	T P II	D I 2 8 T P 1 I	D I 2 9 T P 1 I	破片数小計	
青磁	碗	同安窯系Ⅰ類	柳描文	口縁		2						2
				腹部	1	1						2
		龍泉窯系Ⅰ類	劃花文	口縁	9	1	9	1				20
				腹部	6		15					21
				底部	1		2					3
		龍泉窯系Ⅱ類	鏡蓮弁文	口縁	12		25	1		2		40
				底部	1		1					2
		龍泉窯系Ⅳ類	弦文帯	口縁			2					2
				無文外反	5		7					12
				蓮弁文	口縁		2					2
				底部	2		5		1			8
		龍泉窯系Ⅳ～V類	無文外反	口縁	5		77			2		84
				有文外反	口縁	1						1
		龍泉窯系Ⅴ類	蓮弁文	口縁	5		9					14
				雷文帯	口縁	3	7					10
				無文外反	口縁	32	33					65
				無文(玉縁)	口縁	4	3					7
				無文直口	口縁	26	26					52
				不明	底部	7	1	15		3		26
				底面見込み	底部			1				1
		龍泉窯系VI類	細蓮弁文	口縁	2		6					8
				無文直口	口縁	2						2
				底部			1					1
		泉州窯系	端反碗	口縁			1					1
		福建系	粗製碗	口縁	2		4					6
		粗製品	粗製碗	底部			1					1
			大振碗	口縁	2							2
		不明	不明	口縁	11		9				1	21
		不明	不明	底部			1					1
	小碗	龍泉窯系V類		口縁			1					1
	碗 合計			139	2	266	2		8	1	418	
白	皿	同安窯系Ⅰ類	柳描文	口縁	2		6					8
				腹部	1		1					2
				底部	1		1					2
		龍泉窯系Ⅲ類	無文	底部			3					3
				口折	口縁		2					2
				口折	口縁	3	3					6
		龍泉窯系IV類	無文	口縁			1					1
				底部	2		4					6
				腰折外反	口縁			1				1
		龍泉窯系VI～V類	腰折有文外反	口縁	1							1
				口折	口縁	2						2
		龍泉窯系V類	口折(蓮弁文)	口縁	4		1	1				6
				底部	1							1
				腰折外反	口縁	19	19					38
		龍泉窯系VI類	腰折有文外反	底部	2		2					4
				口縁			1					1
				直口無文	口縁	5	5			1		11
		不明	不明	底部			4					4
				口縁	3							3
				底部	2		4					6
		不明	底面見込み	底部	1							1
		皿 合計			49		58	1		1		109

第6表 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)出土遺物集計表(2)

種別	器種	分類	文様等	部位	I 層	II 層	T P 1	T P 1	D I 2	D I 2	破 片 數 小 計	
					+ II 層	I 層			T P 1	T P 1		
盤	盤		折縁	口縁		1					1	
			鉢縁	口縁	4	12					16	
			鉢縁(稜花)	口縁		1					1	
			底部	底部	1	3					4	
			底面見込み	底部	1	3					4	
杯	杯		直口	口縁	3						3	
			基筋底	底部		2					2	
			蓮弁基筋底	底部	2						2	
			肩部			1					1	
			底部	底部	1						1	
瓶	瓶		口縁			1					1	
			胸部	1		4					5	
			頸部			1					1	
壺	壺		酒会壺	受け部		1					1	
			酒会壺(身)	胴部	7	3					10	
			酒会壺(身)	底部		1					1	
水注			把手			1					1	
香炉			口縁	1							1	
白磁	碗	福建浦口窯	F群(今帰仁)	口縁	5	5					1	11
		福建閩清窯	C1(ビロースク1)	口縁		1					1	
			C2(ビロースク2)	口縁	5	7					12	
			C3(無文外反)	口縁	9	9					18	
		福建邵武窯	C3群	底部	3	1					4	
			D群	口縁	1						1	
			D群	底部		1					1	
			不明	口縁	1	4					5	
碗合計					24	27					1	52
青花	皿	景德鎮窯系	A群(口禿)	口縁	4	10					14	
				底部	1	2				1	4	
		景德鎮窯系	E群(外反皿)	口縁	1						1	
				底部	1	1					2	
		福建邵武窯	E群(直口皿)	口縁	3						3	
			E群(菊花皿)	口縁		1					1	
			D群(直口皿)	口縁	4	7					11	
		福建閩清窯	D群(外反皿)	口縁		2					2	
			D群	底部	2						2	
			C2群	口縁		1					1	
皿合計					16	24				1	41	
	"不明"	円盤状高台	底部		1					1		
杯	福建邵武窯	D群(八角杯)	胴部			1					1	
小杯			底部	1							1	
合子	身		完形	1		1					2	
	身		底部	1							1	
	蓋		口縁			2					2	
壺			口縁	1		1					2	
青花	碗	II類	外反	口縁	3	1					4	
		III類	蓮子	底部	1					1	2	
		V類		底部		1					1	
	皿	I類	外反	口縁	3						3	
		II類	基筋底	底部	1						1	
杯	I類	短筒型	口縁	1							1	
不明		不明	口縁	1		1					2	
壺or瓶			胴部	5		2					7	
青花合計					15	5				1	21	

第6表 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)出土遺物集計表(3)

種別	器種	分類	文様等	部位	I層	II層	T P 1	T P 1	D 1 2 8	D 1 2 9 T P 1 1	破片数小計
					Ⅰ+Ⅱ層	II層	I層	II層	1層	1層	1層
褐釉陶器	壺	I類	方形口縁	口縁			1				1
			底部	1							1
		II類	口縁	1							1
		IV類	口縁	1		1			1		3
		V類	口縁			1					1
		小・中型	口縁	2		4	1		1		8
		不明	不明	底部	5	6			3		14
翡翠釉	壺			胴部	1						1
瑠璃釉	不明			胴部			1				1
三彩	壺			底部	1						1
青白磁	壺			口縁		2					2
				胴部	2	6					8
	合子	蓋	口縁	1		1					2
		身?	胴部			1					1
	不明	不明	口縁			1					1
近現代	本土産	碗		口縁	7				1		8
				底部	2						2
		蓋物		完形	1						1
				身	完形	1					1
		小碗		口縁	2						2
				底部	1						1
		色絵碗		口縁	2						2
				底部	1						1
		皿		口縁	1						1
				完形	2						2
		不明	不明	1							1
タイ陶器	壺	メナムノイ窯系		底部	1		1				2
		シーサッチャナライ窯系		底部	1	2					3
ベトナム	白磁碗			胴部	1						1
高麗青磁	碗			口縁		1					1
	不明			胴部		2					2
	皿			底部					1		1
備前	擂鉢			胴部	1						1
黒釉陶器	碗	天目	口縁	1		7					8
			底部	2							2
南西諸島	壺	カムイヤキ	口縁	2		6					8
			底部			4					4
			口縁	1							1
			口縁			2					2
			底部					1			1
	グスク土器	口縁			1						1
		底面のみ				10					10
		宮古系土器	胴部			1			1		2
		蓋	胴部			1					1
		不明	陶質土器	口縁	1						1
石器	施釉陶器	白化粧	口縁	4							4
			底部	2							2
		底面のみ	口縁	1							1
		火取	口縁	1							1
		皿	口縁	1							1
		碗	口縁	1							1
		鉢	口縁	1							1
		不明	口縁	2							2
		不明	口～底部	1							1
		壺	把手	1							1
	無釉陶器	口縁							1		1
砥石	砥石					1	1		3		5
	提砥	熱垂捺札型				1					1
	敲石兼磨石								2		2

第7表 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)出土遺物觀察表

報告 団 番号	種別	分類	文様等	器種 (玉類=色) (銭=國名)	部位 (銭=初鋤 年)	器:口径 錢:外形 単位=cm (銭・玉・ 金属製品=mm)	器:高さ 錢厚 単位=cm (銭・玉・ 金属製品=mm)	器:底径 重量 単位=cm (銭・玉・ 金属製品=g)	次	トレンチ	グリッド	層	遺構	dot.	No.	備考
18-1	カムイヤキ	B群		壺	底部	-	-	20.6	20次	T.P.1	D-28	I			2	
18-2	青磁	龍泉窯系IV		碗	底部	-	-	4.5	20次	T.P.1	D-28	I			12	
18-3	青磁	龍泉窯系V		碗	底部	-	-	6.0	20次	T.P.1	D-28	I			7	
18-4	青磁	龍泉窯系V		碗	底部	-	-	6.0	20次	T.P.1	D-28	I			12	
18-5	青磁	龍泉窯系V		皿	底部	-	-	4.9	20次	T.P.1	D-28	I			3	
18-6	褐釉陶器			壺	口縁	9.2	-	-	20次	T.P.1	D-28	I			44	
18-7	象嵌青磁			皿	底部	-	-	6.3	20次	T.P.1	D-28	I			2	
18-8	石器	砾石		置砾	-	7.9	4.2	339	20次	T.P.1	D-28	I			7	
18-9	石器	砾石		敲石・置砾	-	7.9	4.6	620	20次	T.P.1	D-28	I			1	
18-10	金属製品	鉄		錐		105.28	8.32	19.82	20次	T.P.1	D-29	I			37	
18-11	玉	勾玉	明るい緑			12.78	6.35	0.66	20次	T.P.1	D-28	I			24	上部欠損
19-1	グスク土器	第3様式		甕	口縁	-	-	-	20次		C-28	II			62	
19-2	グスク土器			壺	口縁	-	-	-	22次		B-28	II			154	
19-3	カムイヤキ	B群		鉢	口縁	21.8	-	-	20次		C-28	II			80	
19-4	カムイヤキ	B群		壺	底部	-	-	11.4	22次		D-28	II			180	
19-5	青磁	同安窯系I	楕描文	碗	口縁	18.0	-	-	22次		B-28	II			169	
19-6	青磁	同安窯系I	楕描文	碗	腹部	-	-	-	22次		B-28	II下部			182	
19-7	青磁	龍泉窯系II	無模蓮弁文	碗	口縁	16.3	-	-	22次		B-28	II			160	
19-8	青磁	龍泉窯系II	無模蓮弁文	碗	口縁	16.3	-	-	22次		D-28	II			192	
19-9	青磁	泉州窯系		碗	口縁	-	-	-	22次		D-28	II			125	
19-10	青磁	同安窯系I	楕描文	碗	底部	-	-	6.0	22次		B-28	II下部			182	
19-11	青磁	龍泉窯系IV		碗	底部	-	-	5.8	22次		C-28	II			72	
19-12	青磁	龍泉窯系IV		碗	底部	-	-	5.5	20次		D-28	II			45	22カーザフ北ヘキC-27 II層No.66
19-13	青磁	龍泉窯系V		碗	底部	-	-	5.5	20次		C-28	II			80	22カーザフ北ヘキC-28 II層No.69
19-14	青磁	龍泉窯系VI		皿	底部	-	-	6.2	20次		C-28	II			58	22カーザフ北ヘキC-27 II層No.68
19-15	青磁	-		环	底部	-	-	6.4	20次		D-28	II			84	
19-16	青磁	鉄線		盤	口縁	21.7	-	-	20次		D-28	II			74	
19-17	白磁	C3		碗	口縁	15.9	-	-	22次		C-27	II			62	
19-18	白磁	C2		皿	口縁	-	-	-	22次		C-28	II			79	
19-19	白磁		器種不明	底部	-	-	2.6	22次		C-28	II			14	80	
19-20	白磁		合子・身	完形	7.3	1.55	7.2	22次		C-28	II			5	26	
19-21	青白磁			壺	口縁	-	-	-	22次		C-27	II		3	24	22カーザフ北ヘキC-28 II層dot.6No.27
19-22	石器	提壠	懸垂棒札型	-	4.9	1.1	6.8	20次		C-28	II				80	
19-23	金属製品	青銅	青鉛	-	16.29	1.58	1.62	20次		C-27	II				61	
19-24	金属製品	青銅	座		16.88	0.57	0.73	22次		C-27	II				156	98
19-25	金属製品	青銅	板状製品		-	0.64	0.74	22次		C-28	II			14	17	鍍金あり。
19-26	金属製品	鉄	錐		48.52	5.44	6.73	20次		C-28	II				58	カーザフ北側城ヘキトレンチ
19-27	銭貨	政□□寶	北宋	1111年	-	1.19	1.54	22次		C-28	II			12	33	半分欠損,政和通寶
19-28	玉	管玉	丸い段みの青	-	9.87	1.26	22次			C-27	II			13	34	
19-29	玉	丸玉b2	黄みの黒	-	9.37	3.82	12.13	20次		C-27	II				54	
19-30	玉	丸玉b2	白	-	7.38	2.42	8.63	22次		C-27	II				4	
19-31	玉	丸玉b2	緑みの白	-	5.07	7.74	0.31	22次		C-27	II				16	135
20-1	青磁	龍泉窯系I	劃花文	碗	口縁	16.2	-	-	20次		B-28	I			41	22カーザフ北ヘキC-28 II層dot.15No.81
20-2	青磁	龍泉窯系I	劃花文	碗	口縁	15.6	-	-	22次		C-28	II			70	
20-3	青磁	龍泉窯系II	無模蓮弁文	碗	口縁	15.5	-	-	20次		B-29	I			43	
20-4	青磁	龍泉窯系IV	無模蓮弁文	碗	口縁	13.4	-	-	20次		B-29	I			43	
20-5	青磁	龍泉窯系IV	無文外反	碗	口縁	15.6	-	-	20次		A-28	I			38	
20-6	青磁	龍泉窯系I		碗	底部	-	-	5.6	20次		B-28	I			36	「河濱遺範」のスタンプ
20-7	青磁	龍泉窯系VI	細蓮弁文	碗	底部	-	-	5.5	20次		C-28	I			27	
20-8	青磁	龍泉窯系IV	口折蓮弁文	皿	口縁	13.1	-	-	20次		D-28	I			48	
20-9	白磁			壺	口縁	17.8	-	-	20次		B-27	I			39	
20-10	青花	I類		皿	口縁	-	-	-	20次		C-27	I			21	
20-11	翡翠釉	中国・その他		壺	胴部	-	-	-	20次		B-29	I			43	
20-12	三彩	中国・その他		壺	底部	-	-	5.4	22次		C-28	I			167	
20-13	褐釉陶器			壺	底部	-	-	16.9	20次		D-27	I			67	
20-14	遊具	円盤伏製品			2	0.8	4.0	22次		C-28	I				43	
20-15	金属製品	鉄	釘		39.51	2.60	1.25	20次		B-27	I				39	カーザフ北側城ヘキトレンチ
20-16	金属製品	鉄	釘		37.84	8.89	1.63	20次		B-28	I				36	トレンチ

※玉類の色は、近江源太郎1996『色々な色』光琳社P194～P201の色彩索引を参考にした。

第8表 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)出土銭貨観察表

報告 図 番号	銭名	初鋤年	国名	想定される 銭名	書体	計測値(単位=mm,g)					出土地点					遺物No.	備考		
						外径 (タテ)	内径 (ヨコ)	孔径			次	グリッド	層	遺構	dot.				
								縦	横	銭厚									
19-27	政□□寶	1111年	北宋	政和通寶	隸書	—	—	—	—	1.19	1.54	22次	C-28	II	—	12	33	1/2残存	
	□□□寶					—	—	5.36	—	1.33	0.87	22次	C-27	II	—	—	12	1/4残存	
	□□元寶				篆書	—	—	—	—	1.79	1.17	20次	C-28	II	—	—	62	1/4残存	
	嘉□□□				真書	—	—	—	—	1.01	0.45	22次	C-28	II	—	—	51	1/7残存	
	□□□寶				篆書	—	—	—	—	1.06	0.61	22次	C-28	II	—	—	61	1/4残存	
	□□□寶				篆書	—	—	—	—	1.08	0.54	22次	C-28	II	—	—	138	1/4残存	

※ゴシック体は本報告書図示資料、明朝体は集計のみ。

第9表 カーザフ郭北側城壁等試掘調査(外郭20・22次調査)出土玉類観察表

報告 図 番号	次	グリッド	層	遺構	dot.	遺物台帳 No.	回収日	分類	材質	計測値					備考
										長さ	孔径	幅	重量	—	
18-11	20次	D-28	I			24	2012/9/24	勾玉	ガラス	明るい緑	—	—	6.35	0.66	上部欠損
	20次	D-28	I			25	2012/9/24		ガラス	浅い緑	—	—	0.74	—	破片
	20次	D-28	I			24	2012/9/24		ガラス	明るい緑みの青	—	—	0.16	—	破片
19-28	22次	C-27	II		13	34	2013/8/8	管玉	ガラス	浅い緑みの青	2.23	9.78	1.26	約1/2欠損	
19-29	20次	C-27	II			54	2012/10/12	III b 2	ガラス	黄みの黒	9.37	3.82	12.31	2.30	
19-30	22次	C-27	II			4	2013/5/2	III b 2	ガラス	白	7.38	2.42	8.63	0.78	
19-31	22次	C-27	II		16	135	2013/11/19	III b 2	ガラス	緑みの白	5.07	2.6	7.74	0.31	
	20次	C-28	II			58	2012/10/15								
	22次	C-28	II			9	2013/5/8	III c	ガラス	青みの黒	1.94	0.92	2.50	0.02	
	22次	C-28	II			16	2013/5/27		ガラス	浅い緑みの青	—	—	—	0.02	破片
	22次	C-28	II			55	2013/6/7	III c	ガラス	青みの黒	2.36	1.07	2.67	0.03	
	22次	C-27	II			141	2013/11/20	III c	ガラス	薄い緑みの青	—	2.14	3.84	0.05	剥離あり
	22次	D-28	II			196	2013/12/24	III c	ガラス	浅い緑	2.31	1.10	2.82	0.02	

※ゴシック体は本報告書図示資料、明朝体は集計のみ。

第V章 総 括

第1節 今帰仁城跡出土龍泉窯青瓷蓋罐の研究

柴田圭子・新島奈津子・佐渡山理沙

はじめに

本報告は、今帰仁城跡主郭および志慶真門郭、大庭出土の龍泉窯青瓷蓋罐を対象とした研究である。蓋罐とは、蓋付きの広口壺の総称であるが、ここで扱うのはいわゆる「酒海壺」と呼称される、頸部が短く立ち上がり、胴部が丸く膨らみ、脚部が短い器形のものである。

今帰仁城跡からは多種多様な陶磁が出土しており、順次報告書が刊行されている(今帰仁村教委 1983・1991・2008・2009・2011・2013)。筆者らは、元様式青花瓷(亀井明徳・柴田圭子・高島裕之・新島奈津子 2007)、明代前半期青花瓷についての悉皆調査を行い報告してきた(柴田圭子・高島裕之・新島奈津子・亀井明徳・半田素子 2009)。その結果、今帰仁城跡から出土した元様式青花瓷の全貌を明らかにし、明代前半期青花瓷と元様式青花瓷の相違点を個別に指摘することができた。このことは悉皆調査の重要性と、実測、復元を行なながら個別の陶磁について考察を深めることができることを明確に示している。

今帰仁城跡出土陶磁のうち、最も数量が多いのは龍泉窯青瓷であり、これについても詳細な検討が必要であることは明らかである。そこで、碗皿などを除く大形品や特殊品を対象に研究を開始することとし、2014年冬に悉皆調査を行い、特に数量の多い蓋罐について着手することとした。年に一度か二度実測などの作業を行い、調査は長きに及んでしまったが、今帰仁村教育委員会のご協力のもと、ようやく報告するに至った。

本報告では、今帰仁城跡主郭および志慶真門郭出土を中心とした龍泉窯青瓷蓋罐のうち、未報告分について、個別の説明と、出土数や位置といった概要を示す。

なお、本報告で用いる分類は、柴田の行った分類(柴田圭子 2019)に準じ、罐および罐蓋を、I類蓮弁文、II類無文、III類文様帶、IV類その他として報告する。また、論文と報告が前後してしまったため、報告時に修正した図等があり、本稿の情報が最新である点を断っておく。(柴田)

1. 個別説明

罐、蓋の順に説明を行う。各個体の実測図は図1~8、写真は図版1~20に示した。また、法量、破片数、実測者名などの基本的情報は表1に記載した。各個体の説明は実測者が行い、文末に文責を明記した。

(1) 罐

No.1 龍泉窯青瓷蓮弁文小罐(図1・図版1)

口縁部から腰部付近まで残存するI類の小罐で、今帰仁報告書II第VII層出土の龍泉窯青瓷蓮弁文小罐を参考に復元しているが、これよりさらに小振りになるものと考えられる。

口縁部は高くまっすぐ立ち上がり、口唇は平坦に切られ丁寧につくられている。口縁部から胴部にかけての器壁は1.0cm前後であり、厚みは一定している。最大径は肩部から胴部上位にかけての

ところにあり、張り出しが強く、腰部にむけて窄まっている。釉調は、内面はやや暗めの緑色の透明釉がかけられ、外面は暗緑色の透明釉が施されている。内外面ともに光沢があり、貫入が認められる。口唇部の釉は拭き取られ、露胎部分は赤みがかった灰色を呈している。胎土は灰色で黒色粒子を含む。外面の蓮弁文様は、頸部直下から施されている。弁間を刻線で刻んで蓮弁文様とし、濃淡がはつきりしているが鎬は認められない。

類例として、龍泉大窯楓洞岩窯址出土の青瓷小罐(図9-1、浙江省文物考古研究所ほか2015、No. 796、以下大窯楓洞岩窯址出土資料の引用は同文献による、口径8.4、底径6.4)が挙げられる。今帰仁城跡主郭第VII層出土資料(図9-2、今帰仁村教育委員会1991、第25図-8)とは施文方法や光沢の有無で類する点があるが、釉調は展示品と比べると暗く、別個体である。(新島)

No. 2 龍泉窯青瓷蓮弁文小罐(図1・図版1)

I類の小罐である。口縁部の立ち上がりは高くやや内湾し、口唇部は平坦に削られ方形をなしている。口縁部の厚みは0.6cmで、No.1に比べると推定口径は大きいが器壁は薄くなっている。最大径は肩部から胴部上位にかけてのところにあり、張り出しが強く、腰部にむけて窄まる。胴部が残存する破片の器壁は、1.0cmから0.5cmへと胴部下半に向かうにつれ薄くなっている。内釉はやや暗めの緑白色、外釉は暗緑色で、内外面ともにかせており、熱を受けているため光沢はない。全面に施釉したあと口唇部の釉は拭き取られ露胎とするが、一部に釉が残存する。胎土は灰白色で黒色の粒子を含む。

頸部直下から全面に蓮弁文が施される文様で、片切彫りで弁の中央に膨らみをもたせる。今帰仁城跡主格第VII層出土の龍泉窯青瓷蓮弁文小罐(図9-2)に似ているが、釉調・光沢の有無、口唇露胎部の発色などから別個体であり、それよりやや小さい。(新島)

No. 3 龍泉窯青瓷蓮弁文小罐(図1・図版1)

I類の小罐である。釉調・器壁の厚み・文様から口縁部から胴部まで残存する破片4片を同一個体と推定し、復元した。口唇部の残存状況がわざかため不明瞭であるが、平坦に削り内側を面取りしている。口縁部の外面に幅0.3cmの沈圏線をめぐらせ、頸部はやや内湾して立ち上がり、No.1・2と異なり胴部中位に最大径がくる蓮弁文罐である。頸部の器壁は0.7cm、肩部1.0cm、胴部1.0cmとなる小振りの罐である。外面は暗緑色釉、内面はやや暗めの緑色釉が薄く施釉されている。光沢はなくかせており、熱を受けた破片も認められる。口唇部の露胎部分は灰色を呈している。胎土は灰白色で黒色粒子は少ない。文様は頸部直下から刻まれ、丸籠で弁をつくって蓮弁文様とするものだが、蓮弁の膨らみは弱い。No.1・2と同じ小罐タイプであるが、これらと比べると暗めの釉調で施文方法も異なり、簡略化された蓮弁文様が施されている。(新島)

No. 4 龍泉窯青瓷鎬蓮弁文罐(図1・図版1)

I類の罐である。明緑白色の釉で明瞭に鎬が刻まれた11片を同一個体とし、口縁部から腰部までを復元した。口縁は方形状を呈し、口唇は平坦に切られ丁寧につくられ、削りによる稜線が残る。頸部の立ち上がりは3.0cmと高く直立し、外面はわずかに膨らんでいる。最大径は肩部にあり、張りが強く、胴部から腰部にかけて窄まっている。器壁は口縁部0.9cm、頸部1.0cm、胴部1.3cm、胴部下位1.5cmで、口縁から胴部まで大きく変化せず、胴部から腰部にかけて厚みをもちながら底部に至る。底部の受け皿の周縁部が残存する破片が確認できるが、わずかであり全体を伺うことはできない。釉は、淡緑色または淡青緑色の透明釉が内外面に薄く施されている。また、光沢はあるが貫入はない。口唇部には釉を拭き取った痕が認められ、露胎となっているが、一部に光沢のある釉が残存する。胎土は灰白色で黒色粒子が確認できる。蓮弁文様は頸部直下におかれ、胴部の蓮弁は凸状の鎬が明瞭である。胴部の弁幅は1.2cm、弁間は0.3cm程度で刻線は深く刻まれ、蓮弁文様

の濃淡を際立たせている。頸部の弁先は、緩やかな曲線でつくられている。

口縁部の形状、頸部を高く直立させる点、肩部が強く張り腰部は細く窄まる器形は、龍泉大窯楓洞岩窯址から出土した元代中晚期に位置づけられている青瓷鎬文罐（図9-3、No. 808、口径19.0、底径16.8、高24.2cm）に類似している。また、淡青緑色の釉は今帰仁城跡から出土するほかの蓮弁文罐とは明らかに釉調が異なっており、鎬もはつきりとしている。（新島）

No. 5 龍泉窯青瓷蓮弁文罐（図1・図版1）

I類の罐である。No. 4・No. 8の蓮弁文罐と比較すると頸部は2.0cmと短く、最大径が肩部ではなく胴上部にある蓮弁文罐である。口縁部は内外面に面取りをおこなって方形状を呈し、やや内湾している。口唇は平坦につくられている。胴部中位の器壁は1.5cm程度と厚みをもっているのに対し、頸部の厚みは0.9cmと薄く短くつくられているため、短頸の印象を受ける。胴部は球状に丸みをもち、腰部から窄まる。内面に明緑色釉、外面は内面より青みが弱い緑白色釉が施されている。口唇部の釉は丁寧に拭き取られ露胎とし、面取り部分がはつきりと確認できる。また、釉の厚みはどの破片でも0.1cm程度と一定している。貫入はなく光沢がある。肩部の蓮弁文様は膨らみがなく平坦につくられている。胴部の弁間は深く削られ、起伏が明瞭な蓮弁文様になっているが鎬文ではない。胴部から腰部に至る蓮弁文の幅は0.8～1.0cm程度であるが、弁先の蓮弁幅は0.3cmとなっていることから、肩部で急に細くなるものと考えられる。

No. 5は、短頸で胴部が丸く膨らみ、最大径が胴上部におかれる器形で、鎬を簡略化させた蓮弁文を特徴とする罐であり、類似した特徴を有するものとして、首里城跡京の内出土品（図9-4、沖縄県教育委員会1998第49図16、以下首里城跡京の内跡出土資料は同文献から引用、口径24.0、高23.3cm）が挙げられる。（新島）

No. 6 龍泉窯青瓷鎬蓮弁文罐（図1・図版2）

I類の罐である。釉調はNo. 5に似るがそれより若干暗めの釉調で、貫入があり、蓮弁文様もNo. 5に対してはつきりとしない13片を同一個体とし図化した。胴部から底部にかけて残存する破片である。胴部の器壁は1.4cmで、腰部にかけて厚くなり底部に至る罐だが、底部付近の破片は厚みが一定せず、極端な厚みをもつ破片も認められた。接地部は面が整えられ、内外面の面取りは明瞭で台形状を呈している。受け皿の周縁部分が底部で接着する1片が確認でき図化しているが、接地部からの高さは不明である。釉は緑白色釉で光沢があり、内外面に大きめの貫入が認められる。底部外面は釉が途中までかけられ波状を呈し、内面の釉は拭き取られている。また、焼成後に畳付外際を工具で削った痕が残る。胴部の蓮弁文は幅1.0cm前後で凸状になっているものの、弁間の彫りもNo. 5に比して浅い。底部の蓮弁文は平坦で判然としないが、刻線による蓮弁がみられる。（新島）

No. 7 龍泉窯青瓷蓮弁文罐（図1・図版2）

I類の罐である。頸部は1.8cmと短く立ち上がり、胴部上位に最大径がある罐で、口縁部から胴部にかけて残存する。胴部の最大径31.4cmで球状に丸まっている。口縁部形状は方形で、口唇部を平坦に削り、外際と内際部分を面取りしている。内面の釉調は明緑白色、外面は黄みがかかった緑色で、全体的に厚くかけられているため、体部の文様は判然としない。口唇部の釉は拭き取られ、露胎部分は赤褐色を呈している。頸部直下から蓮弁をめぐらせるものではなく、肩部に二重圈線をめぐらせ、その下に蓮弁文をおく文様だが蓮弁文様は不鮮明である。胴部の蓮弁の幅は1.0cm、間弁の幅0.5cm程度で蓮弁の膨らみはほとんどなく平坦である。

同一個体と断定できる底部片が確認できないため、全体の文様構成は不明だが、首里城跡京の内跡から出土した青瓷蓮弁文罐（図9-5、第49図17、口径21.5、高21.2cm）は頸部が短く、肩部の張り出しや胴部の丸みは弱く底部に至る器形となっている。蓮弁文が二段となって施されるもので、

上段に細めの蓮弁文、下段に幅広で先端を尖らせた蓮弁文がおかれており、この可能性を指摘したい。(新島)

No. 8 龍泉窯青瓷鑄蓮弁文罐 (図2・図版3)

I類の罐である。胎土・釉調・文様の特徴から同一個体と推定されるものを復元した。口縁部から腰部にかけての破片が確認できるが、底部片は同一個体と断定できなかったため、図化していない。口縁部形状は台形で口唇は平坦に削られ、外側に削りによる稜線が明瞭に残る。また、頸部の立ち上がりは3.2cmと高く、外側がややふくらんでいる。口縁部1.0cm、肩部1.2cm、胴部1.0cmと器壁の厚みに大きな変化がなく一定している。No.4とNo.8は、口縁部を丁寧につくる点、頸部が高く立ち上がっている点、口縁部から胴部に至る器壁の厚みが一定している点は類似しているが、No.8の頸部はやや内弯し、肩部の張り出しがより強くなっている。内面の釉調はやや暗めの緑白色、外面は暗緑色釉で、内外面ともに細かな貫入がある。釉は内外面にかけられ、口唇部は拭き取られており、露胎部分は暗めの赤褐色を呈している。また、破片のなかには熱を受けているものがある。肩部から胴部にかけて、蓮弁文の幅は1.0cm前後で大きく変化せず、鑄が明瞭である。腰部の蓮弁文は起伏がはつきりとしない。間弁は0.3-0.5cmで、弁先1.5cmあたりから緩やかに湾曲し、梢円状の弁先となる。胴部の弁幅は1.2cm、弁間は0.3cm程度で刻線は深く刻まれ、蓮弁文様の濃淡を際立たせている。

このタイプに最も似ているのは、新安沈船出土の青瓷鑄文罐(図9-6、문화재정ほか2006No.54、口径25.4、底径18.1、高30.9)または集寧路古城出土品(図9-7、陳永志主編2004No.61、口径26、高33.4cm)である。新安沈船出土品は、集寧路古城出土品に比べると肩の張り出しが強く、胴部もくびれている。No.8の罐は、両者に近い年代観を考えたい。(新島)

No. 9 龍泉窯青瓷蓮弁文罐 (図2・図版2)

I類の罐である。内外面の釉調、蓮弁の幅や施文方法などの特徴が共通する4片を同一個体とした。ただし、器壁の厚みはかなり厚みがあるものから薄くつくられているものもあるので、別個体の可能性も考えられる。頸部から胴部、腰部が残存する破片で、残存状況から復元せず破片のみを図化した。共通点を述べたあと、特徴的な破片について触れる。

釉調は内面がやや青みがかった緑白色釉、外面は明緑色釉で光沢があり、貫入は認められない。胎土は灰白色で黒色粒子が残る。蓮弁文様は幅0.5cm程度の丸籠で削り出し貫入弁とし、蓮弁にわずかな膨らみが認められる。

No.9-1は頸部から胴部上位かけての破片で、器壁は1.9cmと厚みがある。頸部は内弯して立ち上がり、最大径は胴中位あたりにくるものと推察する。肩部直下から丸籠による蓮弁文様が施文されており、凸状ははつきりとしている。No.9-2はやや丸みを帯びているので腰部の破片と判断し、図化した。器壁は9-1より薄くなり1.4cmである。胴部上位に比べると蓮弁の幅も狭く、起伏はわずかにある。No.9-4は胴部から腰部にかけての破片で、No.9-1・2と比べると器壁は1.0cmと薄くなっている。蓮弁の膨らみは認められるが、間弁と蓮弁の幅が同じで蓮弁文様は簡略化されている。(新島)

No. 10 龍泉窯青瓷牡丹唐草文罐(図2・図版4)

文様帶をもつIII類の罐で、口縁部から脚部まで復元できた。ただし胴部の高さは図上の復元であり、誤差を含む。頸部は直立し、口縁部と頸部との境に段を設けている。口縁端部は削りにより幅5mm程度の平坦面とし、口縁部断面は外面に丸みをもった方形となる。肩部は丸く膨らみ、最大径が肩部直下の胴部にある。腰部は若干反りをもっており、脚部上位の絞りは小さく、脚部外面は外反せず直立に近い。全般に器壁は厚くなく、肩部は9mm、腰部は5mmとかなり薄い。接地部は幅1.2cm

の平坦面を整え、内外面は幅の狭い面取りを明瞭に行う。脚部内面は若干の傾斜を持って立ち上がり、断面は方形状を呈する。接地部から 3.3cm 上に底部の別皿を釉薬で接着する。底部の皿は周縁部しか残存していない。施釉は全般に薄く、内外面に施釉される。口縁部と接地部では釉薬を拭き取って露胎とするが一部に釉薬が残っている。釉薬は灰緑色で、貫入があり、内面はやや青みを帶びる。胎土は灰白色で、黒色と白色の粒子を含んでいる。

文様は、胴部と腰部に文様帯を設け、肩部から胴部に牡丹唐草文、腰部に蓮弁文を浅い彫りにより施文している。文様帯の間には圈線を巡らせる。牡丹唐草文は上方にまわる茎と分岐する葉、正面観の牡丹花で構成される。同方向の牡丹花が 2 個認められるため、同じ文様パターンの繰り返しとして復元できる。茎は幅が広く、輪郭を細い線彫りで表現する。文様を表現する彫りは浅く、文様は平坦な表現である。牡丹唐草文以外の部分には、主文の輪郭に沿って、細かく丁寧に櫛状の工具で地文を施している。腰部の蓮弁文は、片切彫りで輪郭を描き、先端が尖り、平面的な表現である。類似した文様のパターンは大窯楓洞岩窯址資料(図 9-8、No. 814)にみられ、同じく大窯楓洞岩窯址例(図 9-9、No. 813)では茎が省略され地文も施されない点が異なるが、牡丹花と蓮弁文は類似する。(柴田)

No. 11 龍泉窯青瓷刻花牡丹唐草文罐 (図 3・図版 5)

III類の罐で、文様・施釉の特徴から、口縁部から腰部にかけて残存する破片を 1 個体とした。個体識別の段階で同一個体と考えていた底部片は内面の釉調が異なり、蓮弁文も高台付近には認められないでここでは別個体とし、図化していない。口縁部の面取りは内外面ともに明瞭に削り、口唇はやや尖らせ台形状を呈している。頸部はわずかに膨らみ、肩部は緩やかな丸みをもって胴部に至る。口縁部の厚みに反して胴部上位は 0.5 cm、胴部下半は 0.8 cm と薄くつくられている。最大径は胴中位にある。内面に胴接ぎのような痕跡が確認できるが判然としない。外面の釉は暗緑白色で、内面は緑白色の透明釉である。外面に細かな貫入が認められる。口縁部の釉は拭き取られ、露胎部分は赤褐色を呈している。胴部の文様は、唐草文様が刻まれており、葉の形状から牡丹唐草文と推察する。輪郭線は太く刻まれ濃淡を明瞭にし、4 本または 5 本の櫛目文様が隙間を埋めている。また、腰部には太めの蓮弁文がおかれている。蓮弁の先端は丸みがなく尖っており、輪郭線は明瞭に削られ濃淡がはっきりしている。

背景を櫛目で埋めた蓮弁文罐は、首里城京の内跡や二階殿跡、具志川城跡などから確認でき、今帰仁城跡の既刊の報告書からも報告されている。首里城跡二階殿地区出土の青瓷牡丹唐草文罐(図 9-10、沖縄県立埋蔵文化財センター2005、以下首里城跡二階殿地区の引用は同文献による、第 26 図 166、口径 18.8、高 22.5、底部 17.2 cm) は、口縁部が台形状で内外面の釉を拭き取り、球状に膨らんだ体部は胴部に最大径をおくタイプで、No. 11 とよく似ている(新島)。

No. 12 龍泉窯青瓷唐草文罐 (図 3・図版 5)

III類の罐で、口縁部から胴部と別に腰部の破片がある。接合しないため腰部は別個体の可能性もある。頸部は直立し、器壁が厚く 9mm を測る。頸部と口縁部の境には段を設けて区別する。端部は 4mm 程度の幅で平坦に削り、口縁部断面は台形状を呈する。肩部は丸く膨らみ、最大径は肩部直下の胴部にある。胴部上位は器壁の厚みが 1.2cm と厚い。腰部は若干外反気味に下る。胴部内面は横方向に粗くナデしており、ロクロ痕とは異なりランダムな方法のナデを施している。施釉は内外面に施し、外面はやや厚いが、内面は薄い。口縁部端面は露胎とする。外面は一直線になるように拭き取り、内面は釉薬の切れる部分がある。釉薬との境はオレンジ色に発色する。釉薬の色調は、外面はやや暗い灰緑色を呈し、内面はやや淡い。胎土は灰白色である。肩部には段を設け、それ以下を胴部の文様帯とし、唐草文を刻む。唐草文の茎は 1 条の線で表現し、葉は輪郭を片切り彫りで表す。

小さい葉は、弧状に刻んだ線のみで表現している。このように簡素な唐草文は、明代の瓶(図9-11、朱伯謙主編1998 No. 234部分)などにみることができ、宝相華と思われる花文を伴う。腰部の蓮弁文は輪郭線を刻むだけで、平坦に表現する。(柴田)

No. 13 龍泉窯青瓷唐草文罐(図3・図版6)

III類の罐で、胴部から脚部にかけての破片である。当初はNo. 15と同一個体としていたが、器壁の厚みの違いが大きく、断面から復元する器形、法量も一致しないため別個体と考えた。胴部上位に最大径があり、丸みを持つ。胴部内面にはロクロ痕が看取できる。脚部は若干外反するが、接地部付近の外反は認められない。底部は別皿の接着箇所のみ遺存する。器壁が薄く7mmで、肩部から脚部までほぼ均一である。脚部は接地部が欠けているが、内面の張り出しが弱く、断面が方形に近い。接地部外面が面取りされている。内外面施釉され、釉薬は薄い。接地部の面取り以下は露胎である。釉薬の発色は灰色味を帯びた淡緑色で、内面はさらに淡い色調である。胎土は灰白色を呈する。文様は、胴部に唐草文、腰部に蓮弁文を施文する。唐草文はNo. 12・15と同様のものとみられる。蓮弁文は輪郭を線彫りし、内面に4条程度の櫛描き状の線を入れている。(柴田)

No. 14 龍泉窯青瓷刻花文罐(図3・図版5)

III類の罐とみられ、口縁部から肩部にかけての破片である。頸部は若干内傾気味に長く立ち上がり、内面は丸みを帯びる。外面頸部と口縁部との境には、削りにより段を設け、口縁部と頸部を明確に区別する。口縁部の断面は台形状となる。口縁端部には、やや丸みをもった幅6mmの平坦面を有し、内外面に細く面取りをしている。肩部は強く張り、器壁は8mmの厚さで、頸部とあまり変わらない。内外面に施釉し、釉薬は内外面ともに厚く、1mm程度あり、暗緑色を呈する。口縁端部は削りにより露胎とする。胎土は灰白色である。肩部に2条の圈線を巡らし、その下に文様を描く。文様の種類は不明である。一部の破片は器面が茶色く変色し、泡立つ部分もある。強く被熱したものと考えられる。(柴田)

No. 15 龍泉窯青瓷唐草文罐(図3・図版6)

III類の罐で、口縁部から胴部上位までの破片を1個体とした。当初はNo. 13と同一個体と考えていたが、器壁の厚みや器形、法量が一致せず、別個体とした。肩はかなり強く張り、頸部は器壁が厚く、肩部と同じ1cmの厚みがあり、若干内傾して立ち上がる。内面胴部との境は明瞭に角を成す。頸部と口縁部の境には削って段を作り、区別する。口縁端部には幅5mmの平坦面と内外の面取りがあり、外面は斜めに削る。胴部下半は復元できていないが、肩部に近い上位に最大径があり、胴部内面にはロクロ痕が看取できる。釉薬は光沢を帯び、概ね1mm程度の厚みであり、頸部下にはやや厚く溜まる。灰色味を帯びた淡緑色で、内面はさらに淡い色調である。胎土は灰白色を呈する。文様は、No. 12・13と同様に簡易な唐草文を描く。一部の破片は被熱する。(柴田)

No. 16 龍泉窯青瓷牡丹唐草文罐(図3・図版7)

III類の罐で、胴部から腰部にかけての破片であり、口縁部と脚部は復元できていない。肩部が張り、最大径は胴部上位にある。胴部から脚部にかけて若干の膨らみを持ち、器壁は肩部から徐々に厚くなり、肩部で6mm、腰部で1.6cmである。底部は別皿の接着部分のみ残っている。施釉は内外面ともに厚く、1mmを超える。内面は上半までが特に厚い。脚部内面のみ釉薬が薄い。色調は暗緑色である。胎土は灰白色で、白色、黒色の粒子を含む。文様は陽刻で、牡丹唐草文とみられる。彫りの断面は深く、鋭利であるが、釉薬が厚いため、文様の周囲は丸みをもち、文様を柔らかく浮き上がらせている。腰部と胴部の堀にはやはり陽刻で幅5mmの圈線を巡らせる。腰部には蓮弁文を削り出す。蓮弁の先端は尖り、花弁の断面は丸みを持つが立体的に掘られているため鎬を有するかのように見える。破片の一部は茶色く変色しており、被熱が認められる。(柴田)

No. 17 龍泉窯青瓷牡丹唐草文罐(図4・図版8)

III類の罐で、口縁部から脚部まで復元できた。当初はNo. 21 を同一個体と考えていたが、文様構成が異なるため別個体とした。頸部は短く直立し、頸部と口縁部の境には段がなく、そのまま口縁部に至る。口縁端部は内外面に丸みを持たせて仕上げている。No. 16までの資料と比較して口縁部径が大きく、肩は張り、最大径は胴部上位にある。腰部は反りをもちつつ脚部に至り、接地部付近で若干外反する。脚部は短く接地部は平坦で、内外面は幅広く面取りする。口縁部から胴部の器壁厚は9mm 内外で一定し、腰部は薄く7mmである。脚部は厚く最大3.4cmに達する。器形は、No. 18・19・22が類似する。釉薬は内外面に掛けられ、口縁端部および接地部と内外面の面取り部分は露胎とする。露胎部分は褐色に発色している。接地部では拭き取りの痕跡が残る。外面の厚い部分は1mm程度の厚みがあり、内面は薄く施釉する。釉薬の色調は淡い緑色で、内面はより淡い色調である。内面にはピンホールや胎土の塊が付着している。胎土は灰白色で、黒色、白色の粒子を含んでいる。文様は、肩部の上位に二重圈線を巡らせ、胴部に花唐草文を浅い陰刻で描く。構成は判然としないが、葉は輪郭を波状に描き、内部に葉脈を入れたもので、圈線直下から胴部下半にまで配置されている。花は牡丹とみられる。腰部には輪郭を片切り彫りで描いた蓮弁文を配置する。

(柴田)

No. 18 龍泉窯青瓷牡丹唐草文罐(図4・図版9)

III類の罐で、口縁部から脚部まで復元できた。ただし胴部や脚部の高さは、図上での復元である。頸部は短く直立し、頸部と口縁部の境には1条の沈線を巡らせる。口縁端部は平坦部を持たず丸く仕上げる。肩は張らず、なだらかに胴部に至り、胴部中位に最大径がある。腰部は反りを持ちつつ下り、接地部付近で少し外反する。脚部は短く、内面が強く張り出し、接地部は幅が狭く、内外面を広く面取りする。器壁は頸部から口縁部は薄く5mm、特に頸部の根元は3mm程度しか厚みがない。胴部から脚部は徐々に厚みを増し、肩部で9mm、腰部で1.3cmの厚みとなる。内面には胴部下半から脚部にかけてロクロ痕が残る。内外面ともに施釉され、口縁部と接地部およびその両側の面取り部分は露胎とする。口縁部は釉薬との境が赤化し、脚部外面の面取り部は一部釉薬の付着がみられる。釉薬の色調は淡い灰緑色で、内面は若干明るい色調を呈する。厚みは外面で1mm程度、内面はより薄く、内外面に貫入が認められる。茶色く変色した破片もあり、被熱したとみられる。文様は肩部上位に二重圈線を巡らせ、その下に主文を配置する。文様は浅い線彫りである。背面から描いたとみられる牡丹文と2条の線で表現した茎の部分が認められ、牡丹唐草文と考えられる。腰部には蓮弁文が描かれる。輪郭を線彫りし、平面的である。弁先は尖る。(柴田)

No.19 龍泉窯青瓷草花文罐 (図4・図版10)

III類の罐で、口縁部は短く直立し、端部は平坦に削っており、口縁部断面は方形を呈する。肩部は接合しないが丸く膨らむと想定され、最大径は肩部直下の胴部にある。脚部上位の絞りは大きく、脚部は外反する。脚部内面は傾斜をもって立ち上がり、断面は方形状を呈する。接地部から高さ2.8cm上で底部の別皿を受ける。底部の皿は周縁部しか残存していない。釉薬は内外面に施し、外面はやや厚いが、内面は薄く施釉する。口縁部と高台外面から疊付内側の半分までは釉薬を拭き取って露胎とするが、一部に釉薬が残っている。脚部の内面には施釉時の指痕が4ヶ所残る。釉薬との境はオレンジ色に発色する。釉薬は灰緑色で貫入があり、胎土は灰白色で黒色と白色の粒子を含んでいる。文様は上下に圈線による文様帯を設け、肩部から胴部にかけて花文、腰部に蕉葉文を刻む。上位の文様帶には縦方向の凸帶による区画があり、区画の間に花文を配する。花文を中心として葉が広がる構図と考えられるが、彫りが浅く不明である。腰部の蕉葉文は輪郭を片切彫りで表

し、葉脈は二本一对の線彫りで表現する。類似した文様パターンは大窯楓洞岩窯址資料（図9-12、No.819）にみられ、地文が施されない点と蕉葉文を細かく表現している点で異なるが、胴部文様帶の区画と蕉葉文の文様構成は類似する。（佐渡山）

No.20 龍泉窯青瓷草花文罐(図5・図版12)

III類の罐で、口縁部から胴部の破片を1個体とした。頸部は短く直立し、頸部と口縁部の境には1条の沈線を巡らせて区別する。口縁端部は上面を平坦に内外面に幅の狭い面取りを行う。肩は張らずなだらかに胴部に至り、胴部中位に最大径がある。器壁は頸部が薄く6mmで、胴部にかけて徐々に厚みを増し、1.3cmとなる。内外面ともに施釉され、口縁端部は露胎とする。外面の面取り部には拭き取りの痕跡があり、釉薬との境は濃い茶色に発色している。外面の釉薬は厚く、1mm以上あり、内面はかなり薄い。釉薬の色調は暗い灰緑色で、内面はやや明るい色調である。全面に貫入がみられる。胎土は灰白色を呈する。文様は胴部に陽刻の垂線を入れて分割した窓を設け、内部には陰刻で草花文を描く。

このように胴部の文様帶を縦に分割した窓を設けて文様を配置する例は、分割する垂線が陽刻の場合や陰刻の場合があり、形態も様々であるが大窯楓洞岩窯址資料（図9-13、No.818）や、首里城跡京の内跡（図9-14、第46図6）などに類例がある。（柴田）

No.21 龍泉窯青瓷牡丹文罐(図5・図版12)

III類の罐で、胴部の破片のみの個体である。当初、No.17に含めていたが、文様が一致せず別個体とした。胴部のみであり、器形は復元していない。釉薬は内外面にかけられ、淡緑色を呈する。内面はやや淡い色調である。内面にはロクロ痕が看取できる。胎土は灰白色である。文様は、胴部を垂線により縦に分割して主文を配置する。垂線は4条の陰刻で、中央の2条は細く、外側の2条は太く彫られている。その中に配置される文様は牡丹花とみられ、浅い線彫りで描かれている。

類例は首里城跡京の内跡（図9-14）にあり、垂線の種類も一致する。（柴田）

No.22 龍泉窯青瓷「清香美酒」文罐(図5・図版11)

III類の罐で、口縁部から底部まで復元できた個体である。胴部から腰部まで全てが接合していないため、器高は首里城跡京の内跡出土資料を参考として復元している。頸部は短く、やや内傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁端部は内外面を面取りし、先端が少し尖り気味である。肩は張らず、緩やかに胴部に至るが、最大径は胴部上位にある。腰部は反りをもちつつ収束し、脚部は外反する。脚部は接地部の幅が狭く、両側の面取りは幅が広い。外面は2面の面取りがある。底部の皿は厚く、中央を平らに整形している。器壁は頸部では薄く7mm、肩部は厚く1.3cmの厚みがあり、腰部は9mm前後である。脚部は最も厚い部分で3.4cmとなり、底部の皿も2cmとかなり厚い。釉薬は内外面に施釉され、外面の方が厚くかかる。釉薬の発色は淡い緑色で、内面はより淡青色味が強い。口縁端部と接地部およびその両側の面取り部分は露胎である。口縁端部には拭き取りの痕跡があり、露胎部分が茶色く発色し、接地部周辺は褐色で、所々に釉薬が残り、付着物も認められる。底部の皿は、外面全面施釉で、内面は中心部を露胎とするが、範囲は一定ではない。外面の施釉も雑で、ムラや掛け残しがある。内面の露胎部分には重ね焼きの痕跡が看取され、焼成の際に別製品を置いていたものと推定される。胎土は灰白色である。

文様は肩部から胴部の主文が「清香美酒」の文字文で、肩部上位に二重圈線を巡らせ、その下に文様帶があり、四方を如意型に象った窓の中に1文字ずつ配する。同様の文様配置は、首里城跡京の内跡（図9-15、第46図7）にある。また、文字文の例は宇江城城跡第37図251（久米島町教育委員会2008）にも確認できるが、こちらは垂線により画面を分割しており違いがある。文様は陰刻であり、文字の周囲には小花を散らしている。窓と窓の間にも草花文を刻んでおり、その部分の文様

は首里城跡資料と異なっている。腰部には片切り彫りによる蓮弁文を配置する。(柴田)

No. 23 龍泉窯青瓷罐(図5・図版12)

口縁部から肩部にかけての破片である。頸部は外傾しており、他の個体と異なっている。口縁部下に浅い段があり頸部と区別される。口縁部は丸く仕上げ、端部は露胎とする。肩部は大きく張る。器壁の厚みは頸部から肩部まで一律で7mm程度である。内外面ともに厚く施釉され、厚みは1mmを超える。釉薬は暗緑色を呈する。肩部上位に2条の圏線が巡り、その下が主文となるとみられるが、失われている。一部が被熱する。(柴田)

No. 24 龍泉窯青瓷龍文罐(図5・図版12)

龍文の施された罐である。小片であるため全形は不明で、現時点ではIV類に分類している。龍文は陽刻で、周囲を線で描き、鱗を弧状に彫っている。内外面に厚く施釉され、色調は淡緑色である。胎土は灰白色を呈する。胴部に龍文が描かれる罐の類例は、宇江城城跡に1点破片があり、首里城跡二階殿地区では罐蓋の例がある。完形品の例として、上海南汇陸家宅元代墓の出土例が知られる(図9-16、何繼英主編 2014 図版222)。(柴田)

(2)罐蓋

No. 25 龍泉窯青瓷蓮弁文罐蓋(図6・図版13)

天井部に蓮弁文を有するI類の罐蓋である。天井部から裾部、受けまで復元できた。残存している部分によって径を推定している。

天井部は緩やかに盛り上がり、裾部との境部分に段を有し、裾部と天井部を明瞭に区別している。天井部は上面が広く、内面も上部が広がる。裾部は水平に近く広がり、先端の一部を持ち上げて翻りを作る。裾部の端部は面を持つ。受けは内側に向かって斜めに削り出し、先端は面を持つ。外面の全体と裾部の先端まで施釉され、天井部内面も釉薬をかけている。裾部の釉薬は一部垂下し、天井部内面では、受け部の先端に至らない部分もある。露胎部分には、ロクロナデが顕著にみられるが、先端部に斜め方向のナデが認められる。釉薬は外面が厚く、内面は薄く掛けられ、細かい貫入が多数みられる。外面ではやや暗い灰緑色、内面では明るい灰緑色を呈する。胎土は灰色から褐色で、断面や露胎部分では一部が赤褐色となっている。文様は蓮弁文で、鎬を有し、先端は尖り気味である。(柴田)

No. 26 龍泉窯青瓷蓮弁文罐蓋(図6・図版13)

I類の罐蓋で、荷葉の裾部をもつ。天井部と比べて裾部は長く広がり、裾部の断面は舌状で、翻りは小さい。受けは短く、端部に平坦面を作り、内傾する。器壁は全体的に薄い。釉薬は内外面に薄く施し、裾部の内面の端から1cmほどから受けの外面の間は釉薬を拭き取り露胎とする。釉薬はやや暗い灰緑色を呈し、釉薬の境はオレンジ色に発色する。文様は天井に幅の狭い蓮弁文を施す。連弁の鎬は判然としない。裾部は無文である。大窯楓洞岩窯址資料(図10-1、No. 1011)と文様構成は類似するが、裾部径が20cmと小振りな資料である。(佐渡山)

No. 27 龍泉窯青瓷蓮弁文罐蓋(図6・図版13)

天井部に蓮弁文がおかれるI類の罐蓋で、天井部から裾部、受けまでの破片が残存するため、複数片から全体を図化した。天井部の上面は平坦になっており、側面から丸みを帯びて裾部に至る器形で、紐はついていない。中心部分にわずかに段があり、段を境に蓮弁文が配される。側面の蓮弁文は起伏があり、裾部との境には圏線をめぐらせていている。天井部上面の厚みは1.0cm前後、側面は0.4cmとなり、側面にかけて急激に薄くなり、裾部に至る。裾部の先端は反り、一部を持ち上げている。受け口は斜めに窄まり、丸く滑らかに仕上げられている。胎土は灰色で、明緑色釉が外面全

体から内面の裾部先端まで施されている。また、釉は受け部分に一部付着している。内面の露胎部分は、灰色または灰黒色や赤褐色を呈し、ロクロナデ痕が顕著に残る。裾部の内面に0.2~0.3cm程度の幅の工具で、同方向、同間隔に削られた三本線がある。線の先端は細くなっており、手早く削られた印象を受ける。工具痕の断面は、周辺より一段暗い暗灰色または暗赤褐色となることから、焼成前に削られたものと考えられる。

天井部は細めの蓮弁文様が彫られているが、弁先は鋭利ではなく丸みを帯びている。首里城跡京の内跡出土の青瓷蓮弁文罐（図10-2、第49図19）は円形状の紐をもち、天井部から緩やかに湾曲して裾部に至る器形で、No.27に類似する。（新島）

No. 28 龍泉窯青瓷鑄蓮弁文罐蓋（図6・図版14）

I類の罐蓋である。破片の残存状況から、天井部は平坦となり、側面から丸みを帯びて裾部に至る罐蓋である。天井部から裾部、受けまでの破片が残存するが、天井部の中心は確認できず不明である。天井部の厚みは0.6~0.8cm、裾部は0.7cmとなり、器壁は厚さが一定している。裾部の先端は一部を強く持ち上げ、受け口は斜めに窄まっている。胎土は灰色で、明緑色釉が外面全体から内面の裾部先端まで施されている。外面の釉は光沢があり貫入が認められる。裾部の内面から受け口の外側までは露胎となり、受け口の内側から天井部分の内面は濁緑白色釉が施釉されている。

今帰仁城跡出土の蓮弁文罐蓋のなかで、鑄を有する蓮弁文はNo.25と当該罐蓋のみである。間弁は深く彫られ濃淡を明瞭にし、弁先は丁寧に尖らせ起伏がある。

類例として、首里城跡二階殿地区出土の青瓷鑄蓮弁文罐蓋（図10-3、第27図175、鍔径24.5cm）がある。器高は低く側面の丸みは弱い器形だが、蓮弁文の弁先を丁寧に整える施文方法はよく似ている。（新島）

No. 29 龍泉窯青瓷蓮弁文罐蓋（図6・図版14）

I類の罐蓋である。天井部から裾部、受け口まで残存する破片を1個体とした。平坦な天井部をもつ罐蓋で、天井部上面に凸状の圈線があり、その下に蓮弁文を施し、さらに凸状の圈線が配される。他の蓮弁文罐蓋が裾部近くまで蓮弁文がおかれるのに対し、No.29は側面の途中まで施されている。また、裾部の端に向かうにつれ強く反り、端部は高く持ち上がっている。受け口は丸く滑らかに整えられている。濁緑白色釉を内外面に施釉し、裾部の内側から受け口の内側までは露胎である。釉の光沢はなく、細かな貫入が内外面ともに認められる。露胎部分は灰色または赤褐色を呈している。蓮弁文は幅0.5~0.7cmと細く、起伏は確認できるものの文様は判然としない。裾部の内側には工具痕が1カ所確認できる。断面は三角形に削られ、黒灰色を呈していることから、焼成前の工具痕と思われる。（新島）

No. 30 龍泉窯青瓷蓮弁文罐蓋（図6・図版15）

I類の罐蓋である。器高は高く、天井部から緩やかに裾部に至る器形のため丸みは少なく、太めの蓮弁文がおかかれている。天井部から裾部、受けまでの破片が残存する。天井の中心部分はやや窪んでいるが紐ではなく、中心から3cmのところに圈線をおき段差をつくる。天井部上面の厚みは1.2cmで、釉は厚くかけられ、ピンホールが二カ所認められる。裾部は接地面と平行に立ち、先端はわずかに反る。受け口は斜めに窄まっている。また、天井部分の内側は牡丹唐草文の一部が印花されているため窪んでいる。受け口の内側は、削りによる稜が確認できる。胎土は灰色で、緑白色釉が外面全体から内面の裾部先端まで施されている。釉は光沢があり、貫入は認められない。内面の露胎部分は、破片によって灰黒色または赤褐色となり、ロクロナデ痕が顕著に残る。

蓮弁は側面部分で幅1.2~1.5cmとなり、稜があり、間弁を深く彫り濃淡を明瞭にしている。裾部におかれた弁の先端は、鋭角ではない幅広の三角形となっている。龍泉大窯楓洞岩窯址出土の青瓷

蓮弁文罐蓋（図 10-1、No. 1011、径 32.8、残高 7.2 cm）は、大きめの蓮弁文がおかれ、幅広の三角形の弁先をもつ点は No. 30 とよく似るが、天井部から裾部にかけて丸みを帯びた器形であり、なおかつ蓮弁文はより丁寧なつくりとなっている。したがって No. 30 はこれより年代は下がるものと推察する。（新島）

No. 31 龍泉窯青瓷鎬蓮弁文小罐蓋(図 6・図版 15)

天井部、裾部の一部が残存する破片で、I 類の小罐の罐蓋となる。天井部の高さは不明だが、裾部の立ち上がり、器壁の厚みなどから推定復元している。天井部の膨らみはなく平坦になるものと思われ、側面から緩やかに丸みを帯びて裾部に至る。裾部は接地面と平行して立ち上がり、端部はわずかに反り返る。受け口部分は平坦に整えられている。

鎬が明瞭に確認できる鎬蓮弁文で、裾部の際まで起伏のある蓮弁文がおかれている。また、鎬の部分は釉が剥落している。明緑白色釉が外面全体から裾部の内側の端までかけられ、受け口から天井部内面は露胎となる。露胎部分は赤褐色を呈している。

破片が小さいため年代を考察しうる材料は少ないが、明るい釉調で鎬をもつ罐蓋の類例として、鎌倉今小路西遺跡から出土した青瓷鎬蓮弁文小罐 2 点がある。No.31 とは釉調は明らかに異なっており、鎬もそれより不鮮明である。また、龍泉大窯楓洞岩窯址出土から出土した青瓷蓮弁文小罐蓋（図 10-4、No. 1010、径 12.6、高 3.2 cm）とも似ているが、天井部から裾部にかけての丸みは No. 31 のほうが弱い。（新島）

No. 32 龍泉窯青瓷蓮弁文罐蓋(図 6・図版 15)

これのみ酒海壺型の罐蓋ではない。天井部は高く丸い。中心部は失われているが、欠損部に変換点が認められ、鉢があったとみられる。裾部は湾曲しつつ開き、端部に向かい下降する。端部は平坦面を持つ。受けは垂直に削り出し、先端は尖る。内外面に施釉し、外面は裾部の端部まで、内面は天井部に釉薬が掛けられ、受け部は露胎である。釉薬は暗い灰緑色を呈し、内外面ともに貫入がみられる。胎土は灰白色で、露胎部分は灰色から褐色を呈する。文様は、天井部に蓮弁文が描かれている。彫り文様で、二重の線で輪郭を描く。線の太さは一定しない。（柴田）

No. 33 龍泉窯青瓷無文罐蓋(図 6・図版 16)

無文のII 類の罐蓋の破片で天井部から裾部まで残存する。破片の残存状況から、天井部中心に鉢がおかれるものと推察する。

天井部は 1.4 cm と厚く、側面 0.9 cm、裾部は 0.6 cm と側面から裾部にかけて薄くなっている。側面は丸みを帯び、裾部の端の反りは弱い。受け口は窄まり、滑らかに整えられている。外面の釉は明緑白色で厚くかけられ、光沢があり、貫入は認められない。内面の釉は緑白色釉で、裾部から受け口の内まで露胎とする。露胎部分は赤褐色を呈している。また、浅くはっきりとしないが、裾部の内面に幅 0.15~0.25 cm 程度の工具痕が確認できる。工具痕の周辺は剥ぎ取られており、先端は鋭利で、全体的に手早く削られている。露胎部分と同じ赤褐色を呈しているので、素焼き後に削られたものと考える。

無文罐蓋の類例として、龍泉大窯楓洞岩出土品（図 10-5、No.1021、径 26.5、高 7.8 cm）が挙げられる。円鉢がつき、器壁は厚く、釉は比較的厚くかけられている。天井部から裾部にかけて丸みを帯びた器形は No.33 とよく似ている。（新島）

No. 34 龍泉窯青瓷無文罐蓋(図 6・図版 16)

裾部付近の天井部以下を復元したII 類とみられる蓋である。受けがやや短いが、No.33 と類似する器形と推定する。裾部は緩く反りつつ端部へと至る。端部は丸く仕上げている。裾部は一部が持ち上がっており翻りがあるものとみられる。受けは、若干内側に向かって斜めに削り、先端部は平

坦面をもつ。内外面に施釉しており、外面は厚く、厚さ 1mm 以上である。貫入がみられる。内面は薄く塗りつけたような施釉で、受けの内面まで施釉しているが、一定の厚みではなく縞状に胎土がみえる。色調は外面が暗い灰緑色、内面は淡青色である。胎土は白みの強い灰白色で、露胎部分は褐色を呈する。灰色の汚れも認められる。裾部中央付近に重ね焼き痕が残る。(柴田)

No. 35 龍泉窯青瓷草花文罐蓋(図 7・図版 16)

天井部下半から裾部にかけて復元できたⅢ類に含まれる蓋である。当初は No.39 を同一個体としていたが、天井部の形態が一致しないため別個体とした。また、No.40 も類似するが、明らかに同一個体と判断できないため、別に掲載した。天井部上半は残らないものの、下半の形態から、径は大きくななく、丸く高い天井部であることが推定される。裾部は緩く反りながら開き、端部は丸く仕上げ、一部を持ち上げて翻りを作る。受け部は、内側に向かって斜めに削り出し、端部は面を持つ。

内外面に施釉し、外面は裾端部まで、内面は受け部下端まで釉薬で覆う。ただし、釉薬の端は一定していない。外面の釉薬が厚く、内面は薄い。色調は灰緑色である。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含む。露胎部は赤褐色に発色する。裾部下部には接着痕が残り、その外側では一層赤く発色している。それとは別に、傷状の平行線を斜めに刻んでいる。平行線は断面三角形状で、この線を刻んだ際に周辺に細かい剥離が及んでおり、素地がある程度乾き、硬くなった段階で削られたものと推定する。線の内部まで赤色化しており、焼成前に刻まれたものである。丁寧に刻んだものではなく、装飾的な意味合いではない。この平行線は、No.27・29・33・35・40において 1~3 条確認できるが、他遺跡では首里城跡奉神門跡において類似資料を 1 点確認している。文様は片切彫りで、唐草文の一部と推定する。釉薬が厚く、文様が浮き上がるよう見える。(柴田)

No. 36 龍泉窯青瓷牡丹唐草文罐蓋(図 7・図版 17)

天井部に厚みをもち、側面から球形に湾曲し裾部に至るⅢ類の罐蓋で、天井部の厚みは 1.9 cm、側面は 1.2 cm 程度で、裾部は 0.8 cm と薄くなっていく。天井部には、円紐がつくものと推察する。裾部は接地面から平行に立ち、端部は持ち上がり、一部は強く反り返る。受け口はわずかに内湾し、滑らかに整えられている。暗緑色の透明釉が外面全体から裾部の内側の端までかけられ、受け口から天井部内面は緑白色の釉が施されている。釉は内外面ともに光沢があり貫入はない。内面の釉際は波状となり、裾部内側の露胎部分は赤褐色を呈している。天井部内面全体に牡丹唐草文が印花され、大きめの牡丹花と葉文が確認できる。外面は、天井部中心が無文で、圈線をおいたあと、側面から裾部にかけて牡丹唐草文が施されている。片切り彫りによる牡丹唐草文で、濃淡ははつきりしている。

円紐がつき牡丹唐草文を配する罐蓋は、龍泉大窯楓洞岩窯址出土品や首里城京の内跡出土品などに確認できる。特に龍泉大窯楓洞岩窯址から出土品した青瓷牡丹唐草文罐蓋(図 10-6、No. 1053、径 28.4、内口径 17.2、高 8.8 cm) は、天井部に厚みをもち、丸みを帯びて裾部に至る器形となり、No.36 と共通する点が多い。(新島)

No. 37 龍泉窯青瓷花唐草文罐蓋(図 7・図版 18)

天井部から裾部まで復元できたⅢ類の蓋である。天井部は丸みを持ち、裾部に向かって急な傾きで下り、裾部は緩く反りながら開く。裾端部を一部持ち上げて、翻りを作る。受け部は内向きに削り、下端は面を持つ。天井部内面は上部が広がる。内外面に施釉され、外面の釉薬は裾端部を周り、先端下部まで覆う。内面は受け部の先端まで至る。裾部下面は露胎で、接着痕が残る。外面の釉薬は厚く、暗緑色を呈し、細かい貫入が全体に認められる。胎土は灰白色で、やや軟質である。全体に褐色の汚れが付着し、露胎部は赤褐色に発色する。文様は、浅い彫りで花唐草文を施すが、釉薬が厚く判然としない。(柴田)

No. 38 龍泉窯青瓷牡丹唐草文罐蓋(図 7・図版 18)

天井部から受け部までを復元したIII類の蓋である。裾部は失われている。天井部は広く裾部に向けてほぼ垂直に下る。受け部は内側に向かって斜めに削り、天井部内面と一体となっており、天井部内面は上部の空間が広くなる。内面の天井部中心を取り巻くようにロクロ痕が看取でき、中心は指押さえが残る。受け部下端は半分欠けるが、平坦面を持つ。内外面施釉され、釉薬は淡い灰緑色を呈する。裾部下面是露胎で、焼成時の接着痕がみられる。胎土は灰白色で、露胎部分は褐色を呈する。文様は、天井部に牡丹唐草文を配する。片切彫りで輪郭を刻み、釉薬がかかることで濃淡が表現されている。(柴田)

No. 39 龍泉窯青瓷牡丹唐草文罐蓋(図 7・図版 18)

III類に含まれる天井部の破片である。当初は No.35 と同一と考えていたが、天井部の形態が一致しないため、別と判断した。天井部上部は厚く、丸みを持つ。内面は深くえぐりこみ、上部の空間が広くなっている。受け部は失われているが、内径する。内外面に施釉され、裾部の下面と受け部の外面は露胎である。天井部の下端は、細かく割られた痕跡が認められる。外面の釉薬はかなり厚く、1mm を超える。内面は薄く施釉する。色調は灰緑色である。胎土は灰白色で、露胎部は褐色に発色する。文様は牡丹文で、片切彫りによって刻み、厚い施釉により、丸みを持つ立体的な文様にみえる。(柴田)

No. 40 龍泉窯青瓷罐蓋(図 7・図版 18)

裾部の破片である。No.35・39 と類似し、同一個体の可能性がある。裾部下面に 3 条の傷状の線を刻む。線の断面は三角形状で、裾部先端にまで及び、深い部分で 1.5mm の深さがある。外面は施釉され、釉薬は灰緑色を呈し、貫入がみられる。内面の露胎部分は、かなり赤みの強い赤褐色に発色している。胎土は灰白色で、白色粒子が看取できる。(柴田)

No. 41 龍泉窯青瓷花唐草文罐蓋(図 8・図版 19)

III類の蓋で、天井部から裾部まで復元できた。天井部は平坦で、中央部が凹み、鉢は失われている。裾部にかけて緩やかに下り、裾部は若干の反りを持ってほぼ水平に広がる。受け部の径が大きく位置が外側にあるため、裾部の下面の長さは短い。受け部は短く内傾し、下端は丸みを持つ。全体に扁平な形状であり、器高が高い No.35~38 の形態とは異なる。天井部内面中央部はロクロ痕が明瞭で、中心部には指押さえが看取できる。施釉は外面のみで、裾端部まで及ぶ。淡緑色を呈する。内面は全体が露胎である。胎土は灰白色で緻密である。若干の黒色粒子が認められる。露胎部分は褐色に発色し、裾部下面には重ね焼き痕が白く残り、受け部下端まで赤褐色を呈する。

文様は天井部中心部と外周に二重圏線をめぐらせ、その内部に花唐草文を浅く彫っている。全体に 4 つの花が配置された可能性が高い。同様の花文は、大窯楓洞岩窯址(図 10-7、No.1107)では、桃実と組み合わさっており、桃花として報告されている。(柴田)

No. 42 龍泉窯青瓷花唐草文罐蓋(図 8・図版 19)

III類の罐蓋で、天井部から裾部まで復元できた。No.41 と同様に器高の低い蓋である。当初は No.43 を同一としていたが、厚みが異なるため別個体と判断した。天井部は平坦で、その下半から裾部まで一体となって広がっている。裾端部は直線であり、翻りはみられない。受け部は短く、やや内側に斜めに削り出す。裾端部、受け部端部とともに丸く仕上げる。釉薬は内外面に施し、外面は裾端部を覆う位置まで、内面は天井部と受け部の端部まで施釉している。ただし、裾部下面に回る幅は一定せず、受け部内面には露胎の部分がある。釉薬は外面が厚く暗緑色を呈し、内面は薄く淡青緑色に発色する。全体に貫入が認められる。裾部下面是露胎とし、重ね焼きの痕跡が残る。胎土は灰白色で、黒色粒子を含み、露胎部分は赤褐色に発色している。文様は天井部の文様帶に草花文

が浅く彫られ、裾部にも一部彫り文様が認められる。(柴田)

No. 43 龍泉窯青瓷罐蓋(図 8・図版 19)

III類の罐蓋で、天井部の破片である。No.42 と同一としていたが、厚みに違いがあるため別個体と判断した。平坦で厚みのある天井部で、中央の鉢は失われている。鉢の平面は円形であり、宝珠型または扁球型とみられる。釉薬は内外面にかけられており、外面は厚く、暗緑色を呈し、内面は薄く淡青色となる。内外面に貫入がみられる。鉢の周囲とやや外側に圈線をめぐらせ、その下を文様帶とする。文様は判然としないが、龍文の可能性がある。(柴田)

No. 44 龍泉窯青瓷花唐草文罐蓋(図 8・図版 20)

III類の罐蓋で、天井部下半から裾部にかけて復元した。天井部から裾部にかけて緩やかに広がる。受け部の位置により、裾部は短く、受け部も No.41 と同様に短い。裾端部は丸く、受け部先端は丸みを持った面をなす。釉薬は外面にのみ掛けられ、裾端部まで覆う。色調は淡緑色を呈する。裾部内面は釉薬の付着がみられる。胎土は灰白色で、黒色粒子を含み、裾部下面の重ね焼き痕より外側は赤褐色に発色する。文様は、二重圈線を挟んで天井部と裾部の文様帶に分かれ、天井部には花唐草文、裾部には四葉文を配する。裾部にこのような文様帶を配する例は、No.38 までのような器高の高い例には認められず、器形、文様共に差が認められる。裾部に文様帶のある類例は、大窯楓洞岩窯址(図 10-8、No.1074)にあり、宇江城城跡資料(図 10-9、第 36 図 247)では同一の文様が認められる。(柴田)

No.45 龍泉窯青瓷刻花文罐蓋(図 8・図版 20)

III類の罐蓋で、裾部の平面形は円形を呈する。裾部は短く、ほぼ水平にのび、端部の断面は方形である。受けはかなり短く、内傾する。釉薬は外面にやや厚く施し、裾部の内面は釉薬を削り取つて露胎とする。釉薬は灰緑色を呈する。天井部と裾部で文様帶を区切る。天井部は残りが悪く、文様の詳細は不明。天井部と裾部の境は圈線が廻り、圈線から裾の端部の間には片切彫りの四葉文で満たす。裾部に四葉文を廻らす罐蓋は、大窯楓洞岩窯址で多く認められ(図 10-10、No.1105)、裾部に四葉文が施される文様構成は類似しているが、No.45 は小破片のみであるため、裾部の形態が同一であるか判断できない。(佐渡山)

No.46 龍泉窯青瓷刻花文八角罐蓋(図 8・図版 20)

III類の罐蓋で、裾部の平面形は八角形を呈する。天井は平坦につくり、天井裏には微弱な段をつけ天井部の平坦な部分と曲線部の境を表す。受けは短く内傾し、断面は舌状を呈する。天井部から緩やかに下り、裾部は短く、ほぼ水平にのびる。釉薬はやや厚く外面に施し、裾部の内面は削り取り露胎としている。釉薬は灰緑色であり、胎土は灰白色で黒色と白色の粒子を含んでいる。

天井部、裾部に文様帶がある。天井部の頂上には片切彫りによる文様があるが、構成は不明である。天井部には縦方向の凸帯の区画により、八面の窓が施される。窓には刻花文と文字を交互に配する。文様は浮彫で、立体的に表現する。裾部と天井部との境に圈線を廻らし、文様帶を彫りの浅い四葉文で満たす。多角形の類例は大窯楓洞岩窯址(図 10-7)、また同遺跡別資料(図 10-11、No.1110)では、裾部が稜花形であり、形状が異なるが、天井部に文様区画があり地文と花文が交互に配され、裾部に四葉文が施される文様構成は類似している。(佐渡山)

No. 47 龍泉窯青瓷文字文罐蓋(図 8・図版 20)

小破片のみで構成される天井部のみの個体である。III類に含まれる。鉢が一部残り、獸の前足と玉が見られることから玉取り獅子の獣型の鉢と判断できる。施釉は外面のみで、灰緑色を呈し、内面と鉢の部分は露胎である。内面にロクロ痕が看取できる。胎土は灰白色で、露胎部分は褐色を呈する。鉢と天井部の間にも釉薬が掛けられており、鉢は釉薬で接着したことがわかる。天井部の外

周には、陽刻の二重圓線をめぐらせ、外側に文様帶を配置する。文様も陽刻であり、部分的に復元できないが、草冠と推定される部分があり、文字文とみられる。罐とともに蓋にも文字文の例は知られ、大窯楓洞岩窯跡からは「清香美酒」「長命富貴」「福祿如山」「金玉滿堂」などの例が出土している（図 10-11・12・13、12・13はNo.1090・1106）。（柴田）

No. 48 龍泉窯青瓷花唐草文罐蓋（図 8・図版 20）

III類の罐蓋で、裾部の破片である。裾部の先端平面形が波状となっており、稜花と推定する。裾部は短く、先端はやや丸みを帯びた面を成す。外面に施釉され、外面は暗緑色で若干貫入がみられ、内面は淡灰青色である。胎土は灰白色で、釉薬付近は褐色に変色し、裾部下面に重ね焼き痕がみられる。文様は、天井部と裾部にあり、圓線状の段を挟んで文様帶をめぐらせる。天井部は花唐草文とみられ、裾部には唐草文が浅く彫られている。

裾部が稜花となる例は、大窯楓洞岩窯址資料（図 10-11・13）など、同窯跡で多く報告されている。（柴田）

2. 今帰仁城跡出土龍泉窯青瓷蓋罐の概要

今帰仁城跡から出土した蓋罐のうち、報告書に掲載されているものは、主郭罐5、蓋6、志慶真門郭罐3、蓋2、外郭VII区蓋1、外郭VIII区罐3、蓋2、外郭西区罐2、蓋1、城外北西地区罐2、蓋1である。主要なものを図示した（図 11）。今回報告を行ったのは、今帰仁城跡主郭および志慶真門郭、大庭出土の未掲載のもので、罐24、蓋24個体である。個体識別は、器形、文様、釉調などを検討することにより同一個体を認定していく、何度かの修正を行って、現段階で最も蓋然性の高い結果を提示している。その結果を受けて、ある程度器形が復元できるものと、破片であっても器形や文様に他のものとは異なる特徴があるものを選定し、実測を行った。これら以外に実測を行っていない破片は、罐8個体以上、蓋16個体以上存在する。報告書に掲載されているものと、厳密には個体のすり合わせを行っていないため、推定個体数は示せないが、仮に掲載されたものが全て別個体とすると、出土個体数は罐47個体、蓋53個体以上となる。

今回報告分の破片の注記の示す出土地を一覧とした（表 2）。出土資料は主として主郭と志慶真門郭を対象としているが、多くの個体は両方からの出土破片を含んでいる。この傾向は、既に報告した元様式青花瓷や明代前半青花瓷と同様であり、より高位にある主郭から、東壁や志慶真門郭への破片の落下としてとらえられる。青瓷蓋罐については、破片が主郭から出土していない個体がないため、ここで報告した全てが、元は主郭に存在した可能性が高い。

次に主郭の出土層位について述べておきたい。報告書によると、主郭の層位は第I層（第IV・V期）、第II層上部（第III～IV期）、第II層下部（第III期）、第III・IV層（第III期の造成層）とされるが、一方でI～IV層は各層で接合資料が多く、一部のII層下部出土資料を時期的にまとまりのあるものとして紹介している（今帰仁村教委 1991）。提示された青瓷碗・皿を見る限り、それらは14世紀後半から15世紀初頭に収まる。今回報告の資料は、多くがII層かその上位の出土であるが、中にはII層下部と判断される注記や、それ以下の層位、遺構からの出土資料を含んでいる。また、破片が土坑から出土しているものも確認でき、主郭の13基の土坑のうち、10・12号土坑の下部において検出されたVI層を掘り込む土坑の破片も含まれる。一覧表には、報告書の表記に従って、II層下部とされるA～Cの30cm以下のレベルから出土したものも記載した。明らかにII層下部と注記されているものは、罐5・8・10であり、罐12はII下造とあり、造成土からの出土と見られる。また、罐4・9・16・17・22、蓋29・40は出土レベルからII層下部に含まれる可能性がある。また、罐8は10号土坑下から破片も出土している。

これらを、蓋罐の編年と照らし合わせると、罐5・8・10・12、蓋29は、15世紀前半から中ばに位置付けられる資料より古相を示すと考えられ（柴田2019）、層位からも明初の資料に位置付けられる。しかし、同層には15世紀中ば下限の資料と同形態である罐17・22が含まれることや、やはり15世紀中ば下限の資料と同形態の罐19・23についても、C-IV層など、層位としては下位の破片を含んでおり、編年と層位との対応関係は明確にできない。編年を再検討することは無論であるが、これらの資料は、罐17以外全てCラインに含まれていることから層位も精査する必要がある。

（柴田）

おわりに

本稿では、今帰仁城跡主郭および志慶真門郭、大庭出土の未掲載の龍泉窯青瓷蓋罐について報告した。合計48個体という多数の報告となったため、個別説明と概要のみの内容となってしまったが、I類とした蓮弁文の蓋罐が10個体以上出土しており、そのうちNo.8は元代に位置付けられる点、III類の文様帶蓋罐を含めて明初の可能性が高い個体が多い点、また、No.17～22のような15世紀中葉下限の首里城跡出土資料と共通する個体や、それに伴うとみられる多彩な罐蓋も多く認められることなど、これまで明らかではなかった様相を明確に示すことができたと考える。また、これらが全て主郭から出土していることは、主郭の性格を考察する上で重要な情報となるであろう。

今後は、今帰仁城跡の他の器種の把握とそれを含めての分布状況の確認、あるいは他の遺跡との比較を行う必要があり、それらは今後の課題としたい。

謝辞

本稿をまとめるに当たっては、今帰仁村教育委員会に多大なるご協力を賜りました。玉城靖氏、有銘倫子氏には、様々な場面でご支援をいただきました。また、他の職員の方々、資料整理に従事する方々にもご助力を賜りました。関連する資料調査では、沖縄県立埋蔵文化財センターの新垣力氏、瀬戸哲也氏をはじめ多くの方々のお世話をなりました。沖縄国際大学宮城弘樹氏には、調査のきっかけを与えていただきました。末尾となりましたが、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 沖縄県教育委員会 1998 『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書（I）-』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 『首里城跡-二階殿地区発掘調査報告書-』
- 亀井明徳・柴田圭子・高島裕之・新島奈津子 2007 「今帰仁城跡出土元青花瓷の研究」『今帰仁城跡周辺遺跡III』今帰仁村教育委員会 pp. 227-252
- 柴田圭子 2019 「龍泉窯青瓷蓋罐の研究 -出土資料を中心に-」『東洋陶磁』第48号 東洋陶磁学会 pp.93-119
- 柴田圭子・高島裕之・新島奈津子・亀井明徳・半田素子 2009 「今帰仁城跡出土明代前半期青花瓷の研究」『今帰仁城跡発掘調査報告IV』今帰仁村教育委員会 pp. 141-169
- 朱伯謙主編 1998 『龍泉窯青瓷』 芸術家出版社
- 浙江省文物考古研究所・北京大学考古文博学院・龍泉青瓷博物館編 2015 『龍泉大窯楓洞岩窯址』 文物出版社
- 陳永志主編 2004 『内蒙古集寧路古城遺址出土瓷器』 文物出版社
- 今帰仁村教育委員会 1983 『今帰仁城跡発掘調査報告 I』
- 今帰仁村教育委員会 1991 『今帰仁城跡発掘調査報告 II』
- 今帰仁村教育委員会 2008 『今帰仁城跡発掘調査報告 III』
- 今帰仁村教育委員会 2009 『今帰仁城跡発掘調査報告 IV』
- 今帰仁村教育委員会 2011 『今帰仁城跡発掘調査報告 V』
- 今帰仁村教育委員会 2013 『今帰仁城跡発掘調査報告 VI』
- 何繼英主編、上海博物館編著 2014 『上海唐宋元墓』 科学出版社
- 문화재청ほか 2006 『新安船』 文化財庁・国立海洋遺物展示館

表1 蓋罐一覧表

掲載番号	器種	部位	分類	口径	底径	器高	接合後 破片数	備考	台帳番号	実測者
1	罐	口縁-胴部	I A	11.2	-	-	2		ファイルNo. 7	新島
2	罐	口縁-胴部	I A	13.6	-	-	2		新規2	新島
3	罐	頭部-胴部	I A	-	-	-	4		新規3	新島
4	罐	口縁-腰部	I A	28.0	-	-	11		ファイルNo. 16	新島
5	罐	口縁-腰部	I A	23.8	-	-	10		ファイルNo. 10	新島
6	罐	胴部-腰部	I A(iii)	-	15.8	-	13		ファイルNo. 9	新島
7	罐	口縁-胴部	I A	22.9	-	-	4		ファイルNo. 11	新島
8	罐	口縁-腰部	I A	24.4	-	-	121		ファイルNo. 15	新島
9	罐	頭部-胴部	I A	-	-	-	4		ファイルNo. 8	新島
10	罐	口縁-底部	III(1)B(iii)	21.4	17.0	22.0	31	地文	ファイルNo. 3	柴田
11	罐	口縁-腰部	III(1)B	21.0	-	-	7		ファイルNo. 1	新島
12	罐	口縁-胴部	III(1)B	22.0	-	-	10		新規9	柴田
13	罐	肩部-胴部	III(1)B(iii)	-	-	-	27		ファイルNo. 5	柴田
14	罐	口縁-肩部	III(1)B	22.6	-	-	6		新規6	柴田
15	罐	口縁-胴部	III(1)B	25.6	-	-	11		ファイルNo. 5	柴田
16	罐	肩部-胴部	III(1)B(iii)	-	-	-	24		ファイルNo. 14	柴田
17	罐	口縁-底部	III(1)B(iii)	24.6	18.0	25.4	26		ファイルNo. 2	柴田
18	罐	口縁-底部	III(1)B(iii)	26.6	20.4	25.3	34		ファイルNo. 13	柴田
19	罐	口縁-底部	III(2)B(iii)	22.4	19.2	26.6	15	蕉葉文	新規1	佐渡山
20	罐	口縁-胴部	III(2)B	22.2	-	-	6		ファイルNo. 6	柴田
21	罐	胴部	III(2)B	-	-	-	5		ファイルNo. 2	柴田
22	罐	口縁-底部	III(3)B(iii)	25.2	17.4	-	35	文字文	ファイルNo. 4	柴田
23	罐	口縁-肩部	III?	24.2	-	-	4		新規5	柴田
24	罐	胴部	IV	-	-	-	1		新規4	柴田
25	罐蓋	天井-裾部	I a	25.3	15.4	5.9	11		ファイルNo. 32	柴田
26	罐蓋	裾部	I a	20.0	11.2	[1.7]	2		ファイルNo. 38	佐渡山
27	罐蓋	天井-裾部	I a	25.4	14.8	5.6	13	刻み	ファイルNo. 31	新島
28	罐蓋	天井-裾部	I a	26.0	15.6	-	14		ファイルNo. 33	新島
29	罐蓋	天井-裾部	I a	-	-	-	20	刻み	ファイルNo. 30	新島
30	罐蓋	天井-裾部	I a	24.2	14.2	[6.5]	5		ファイルNo. 21	新島
31	罐蓋	天井-裾部	I	-	-	-	2		新規7	新島
32	罐蓋	天井-裾部	-	15.9	10.5	[4.7]	6		ファイルNo. 29	柴田
33	罐蓋	天井-裾部	II A	26.4	16.2	7.0	16	刻み	ファイルNo. 36	新島
34	罐蓋	裾部	II Aa	27.8	17.0	[4.5]	15		ファイルNo. 37	柴田
35	罐蓋	天井-裾部	III(1)a	26.2	15.0	[6.4]	14	刻み	ファイルNo. 27	柴田
36	罐蓋	天井-裾部	III(1)a	30.3	19.8	[7.5]	10		ファイルNo. 26	新島
37	罐蓋	天井-裾部	III(1)a	32.9	21.0	-	19		ファイルNo. 28	柴田
38	罐蓋	天井部	III(1)	-	22.0	-	3		ファイルNo. 24	柴田
39	罐蓋	天井部	III(1)	-	-	-	3		ファイルNo. 27	柴田
40	罐蓋	裾部	-	-	-	-	1	刻み	新規10	柴田
41	罐蓋	天井-裾部	III(2)?b	30.0	20.0	[6.2]	8		ファイルNo. 22	柴田
42	罐蓋	天井-裾部	III(1)b	29.3	17.8	-	4		ファイルNo. 23	柴田
43	罐蓋	天井部	III(1)	-	-	-	2		ファイルNo. 23	柴田
44	罐蓋	天井-裾部	III(1)a?	30.0	19.8	-	4		ファイルNo. 25	柴田
45	罐蓋	裾部	III(1)	29.6	21.2	[2.7]	3		ファイルNo. 34	佐渡山
46	罐蓋	天井-裾部	III(2)b	28.2	20.6	[6.0]	5	多角・文字文	ファイルNo. 34	佐渡山
47	罐蓋	天井部	III	-	-	-	5	文字文	新規8	柴田
48	罐蓋	裾部	III	-	-	-	5		ファイルNo. 35	柴田

※数値はいずれも復元推定値、□は現存値を示す

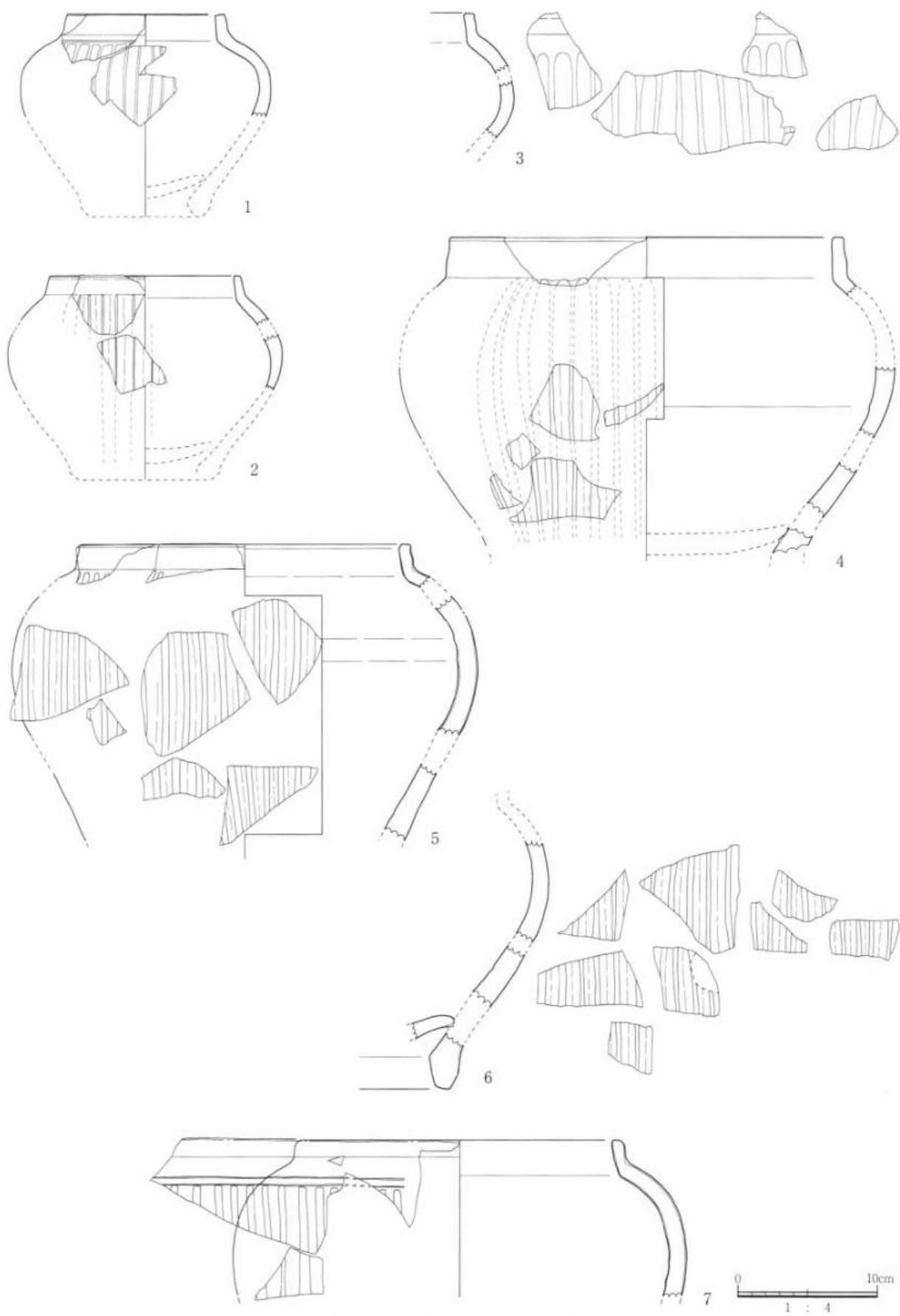


図1 今帰仁城跡出土 龍泉窯青瓷蓋罐1

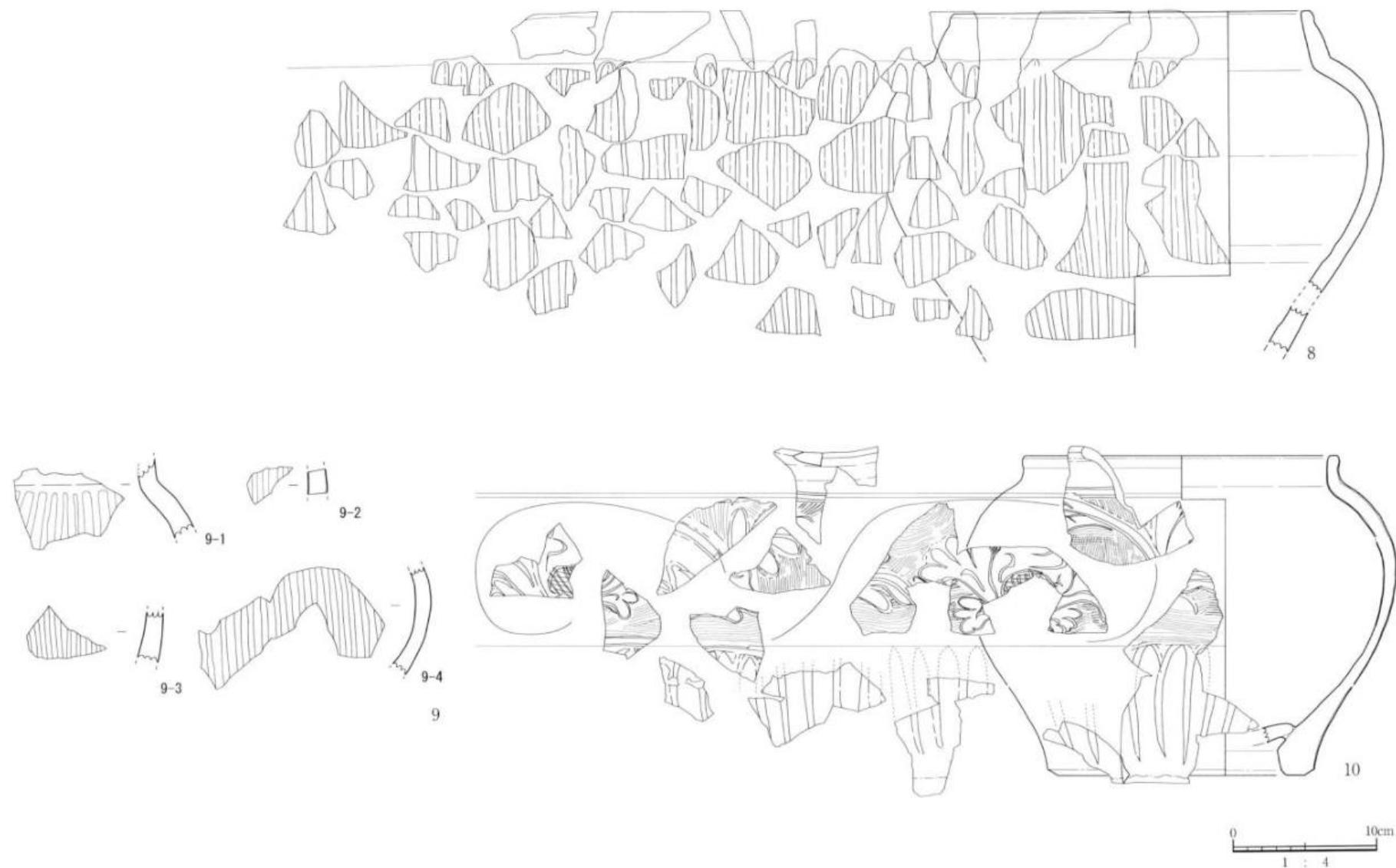


図2 今帰仁城跡出土 龍泉窯青瓷蓋罐2

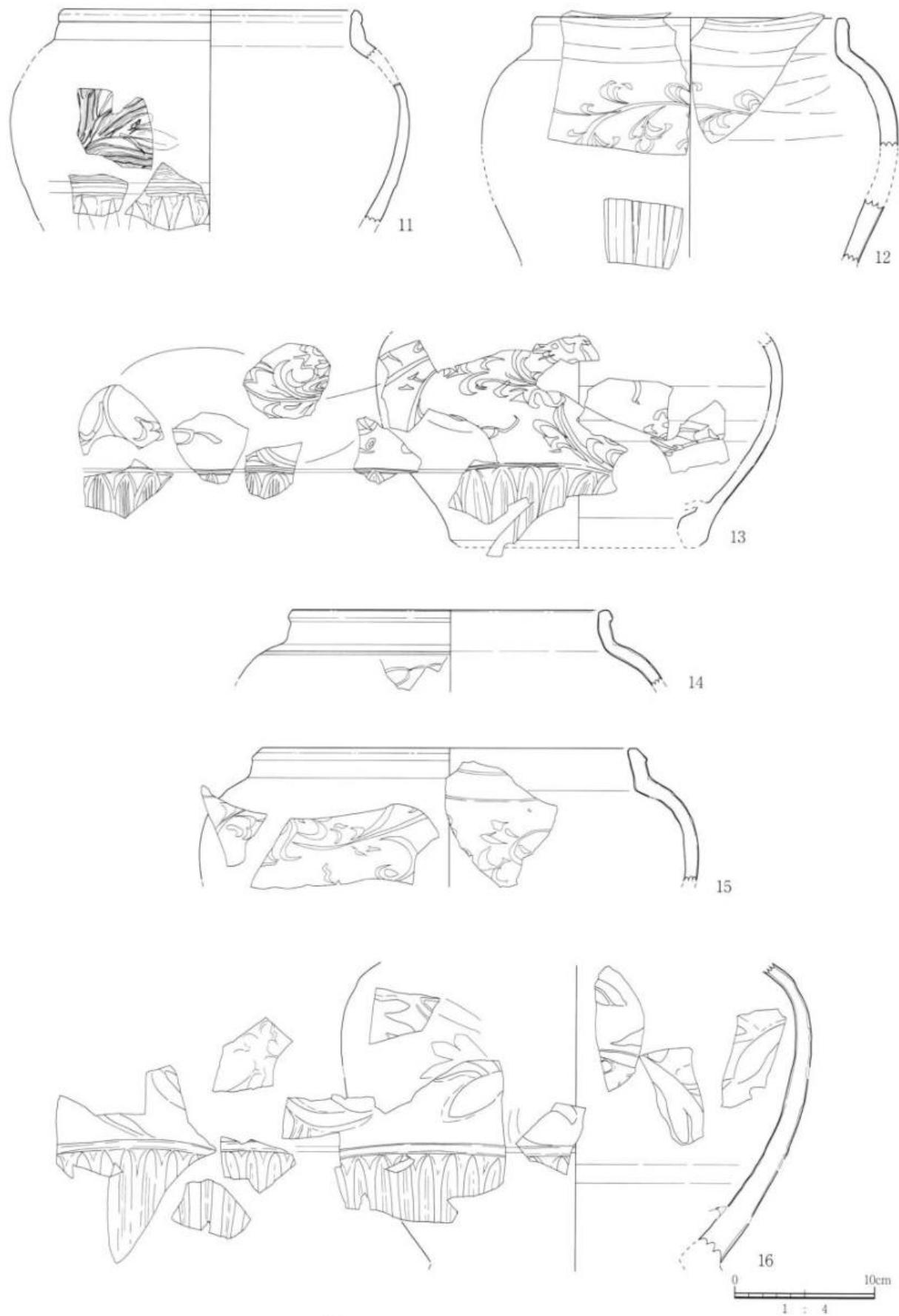


図3 今帰仁城跡出土 龍泉窯青瓷蓋罐3

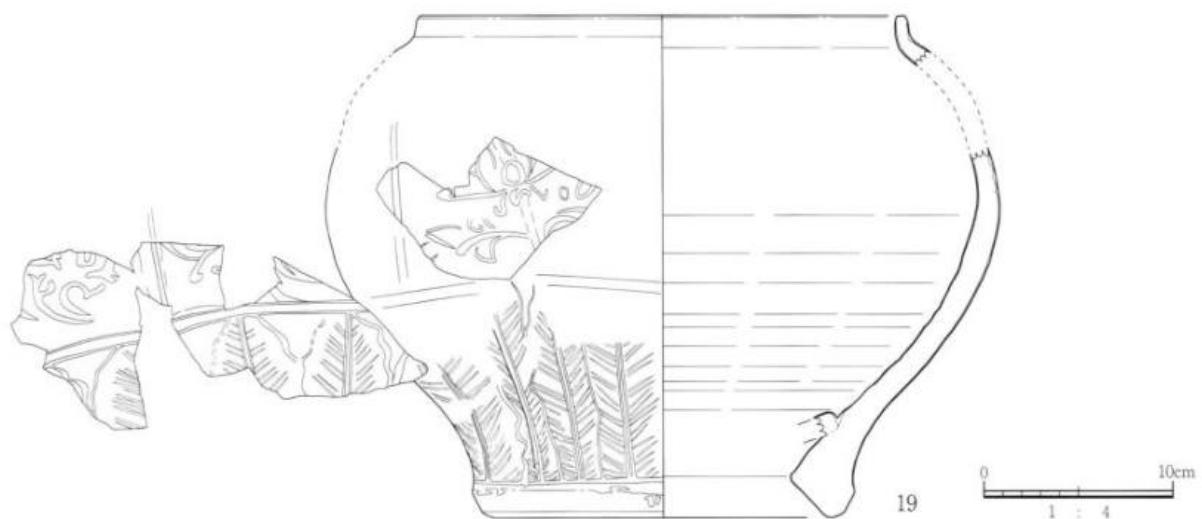
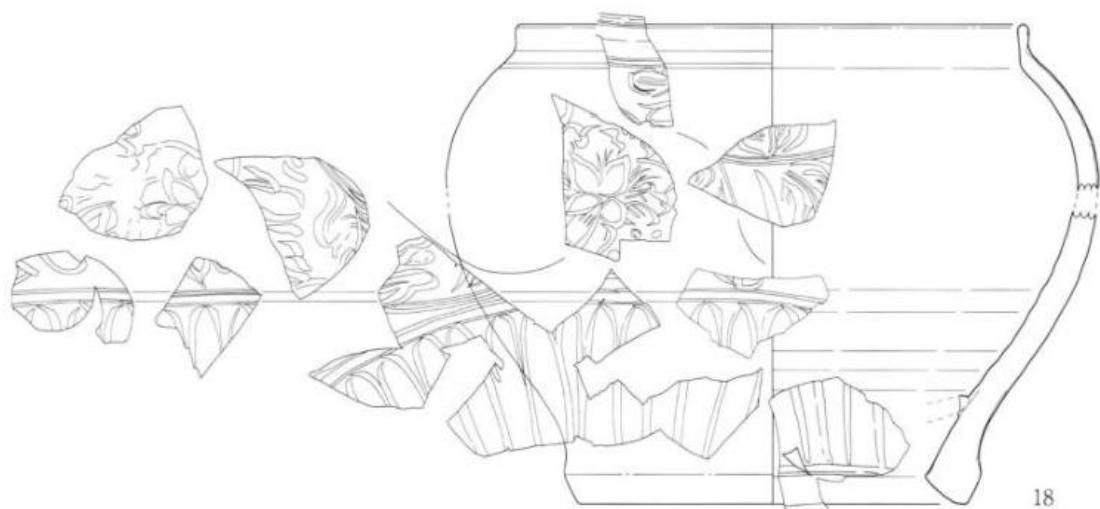
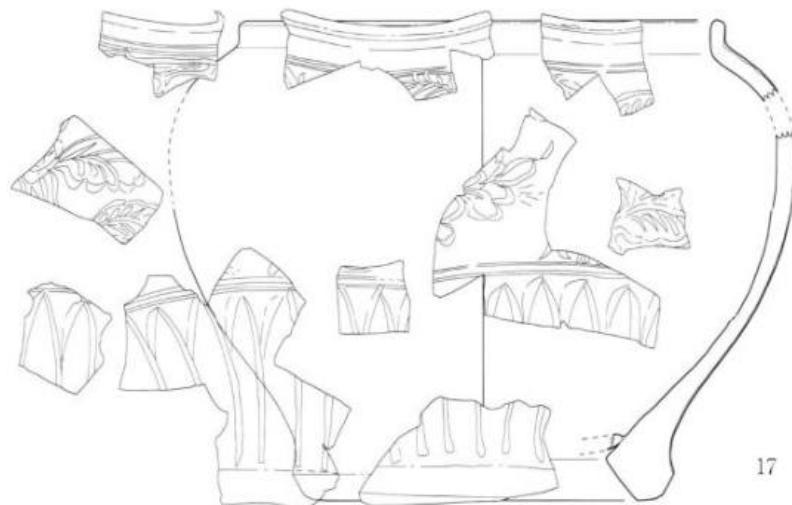


図4 今帰仁城跡出土 龍泉窯青瓷蓋罐4

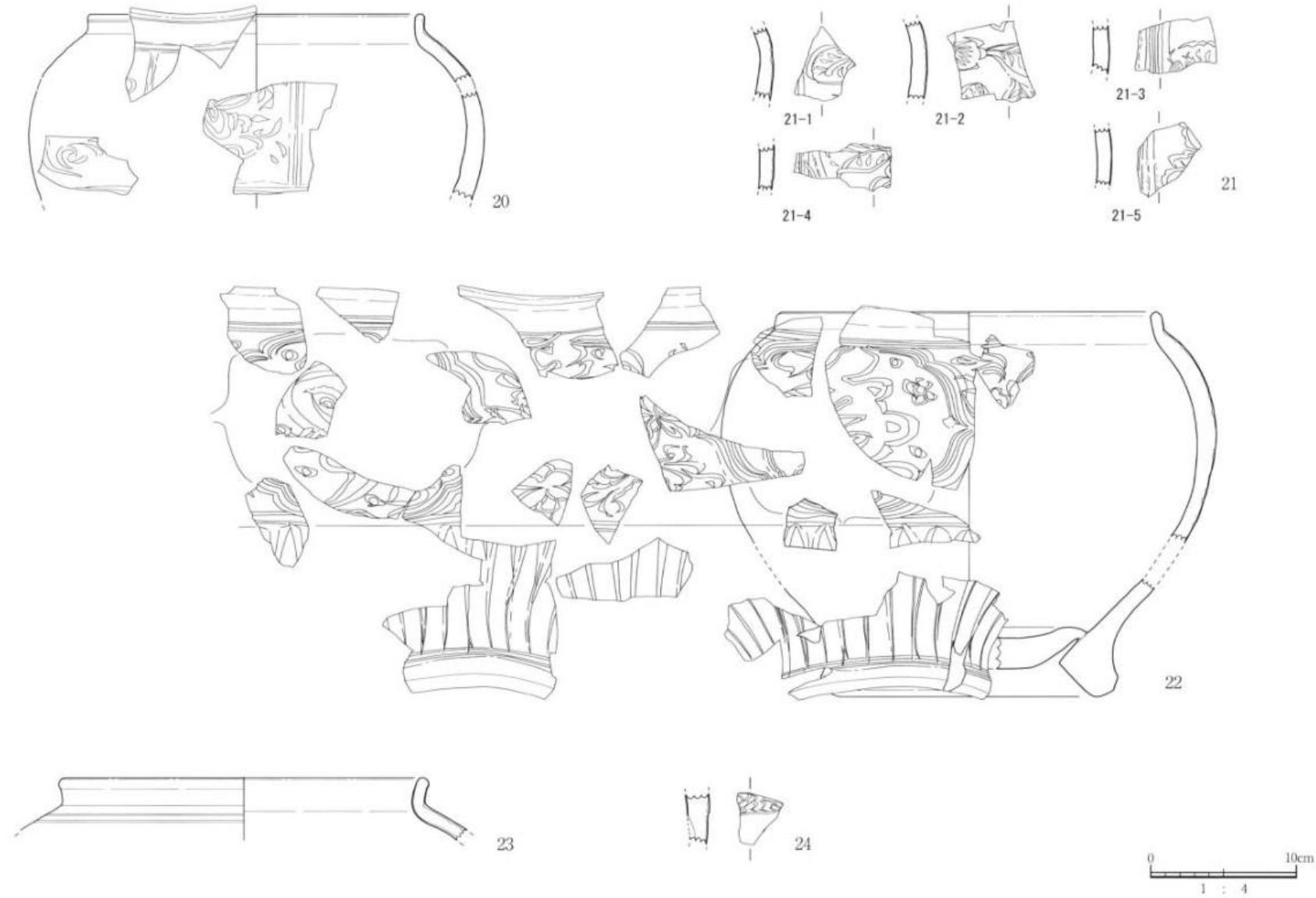


図5 今帰仁城跡出土 龍泉窯青瓷蓋罐5

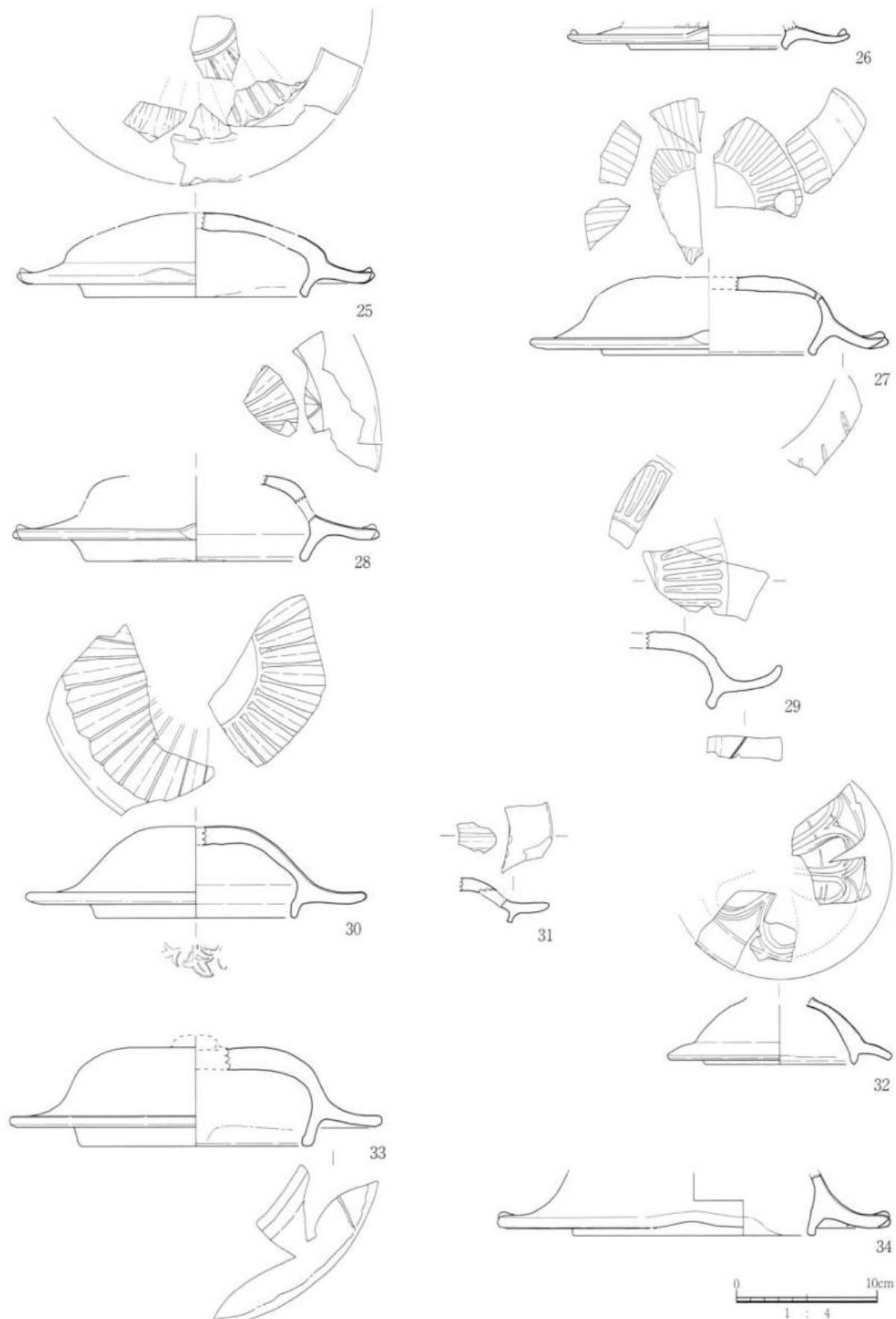


図6 今帰仁城跡出土 龍泉窯青瓷蓋罐6

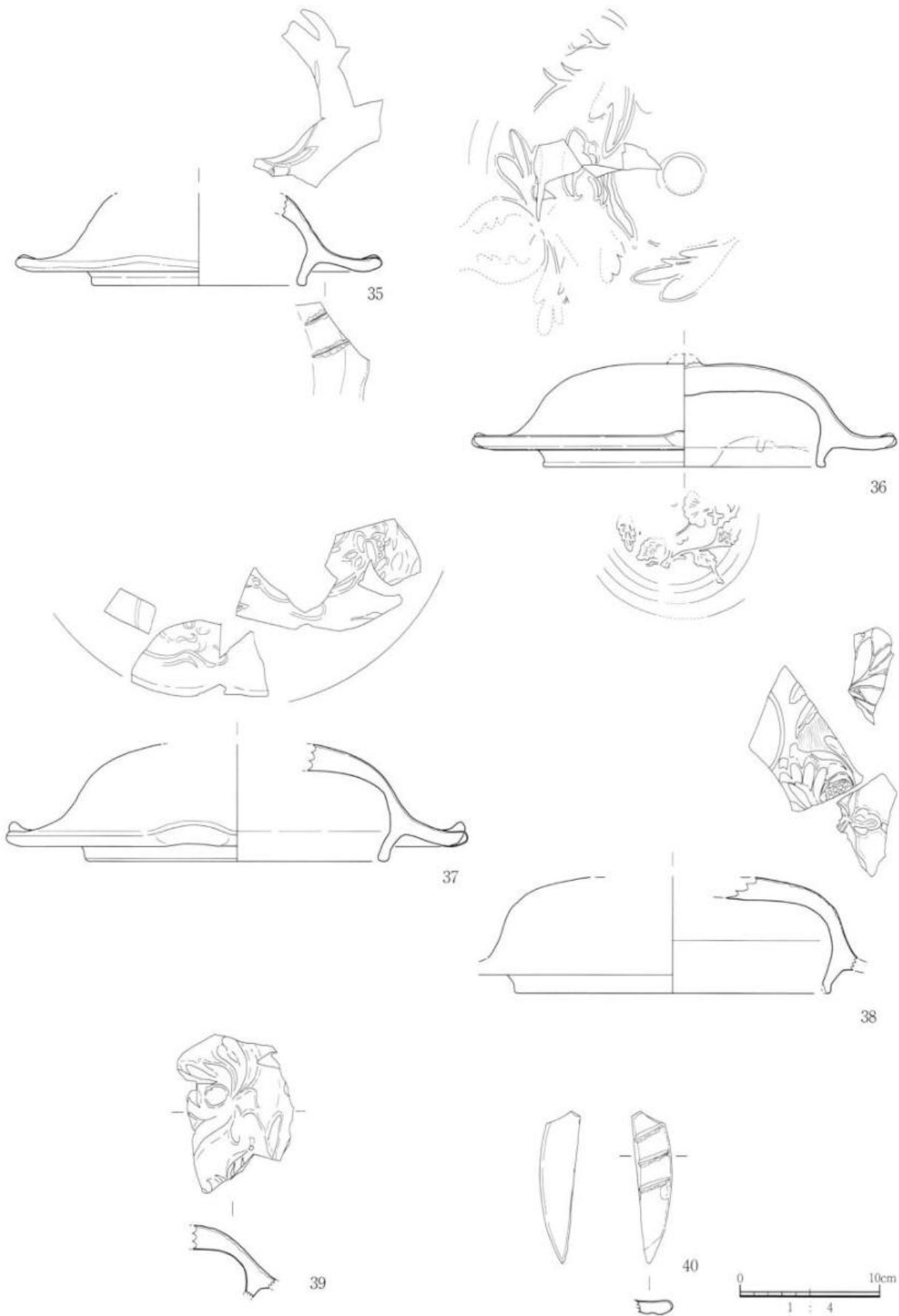


圖7 今歸仁城跡出土 龍泉窯青瓷蓋罐7

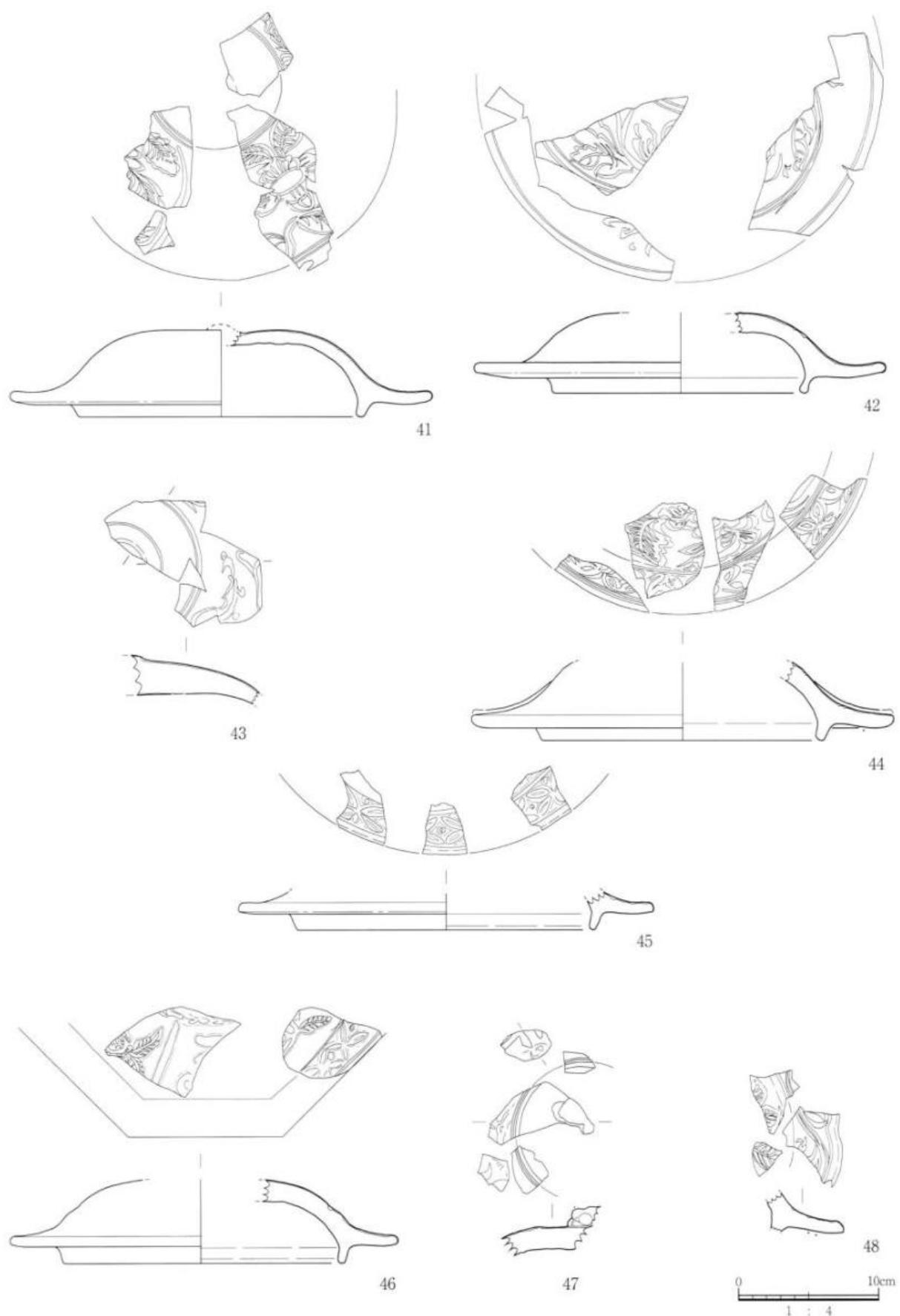


図8 今帰仁城跡出土 龍泉窯青瓷蓋罐8

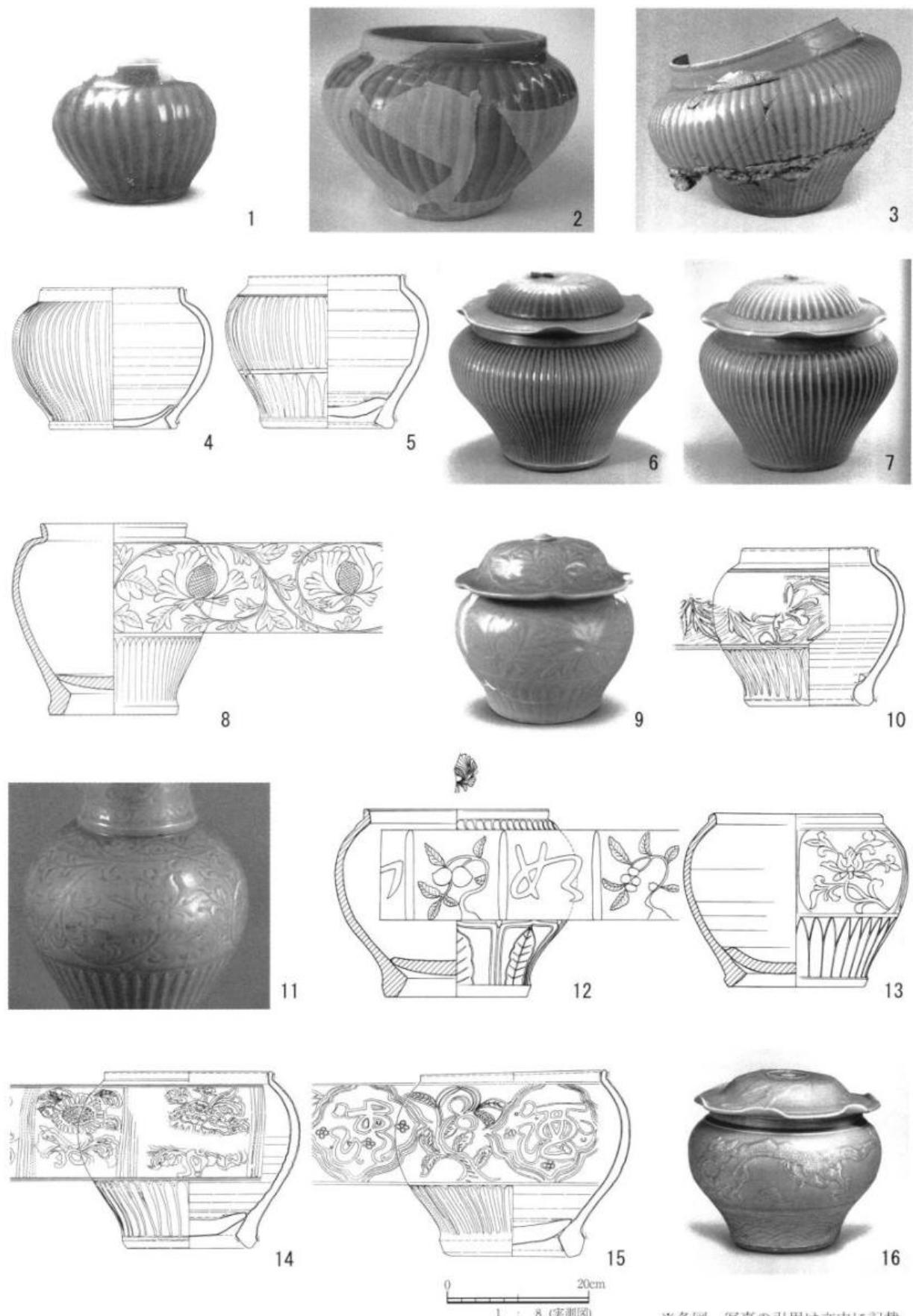


図9 龍泉窯青瓷蓋罐参考例1

※各図、写真的引用は文中に記載

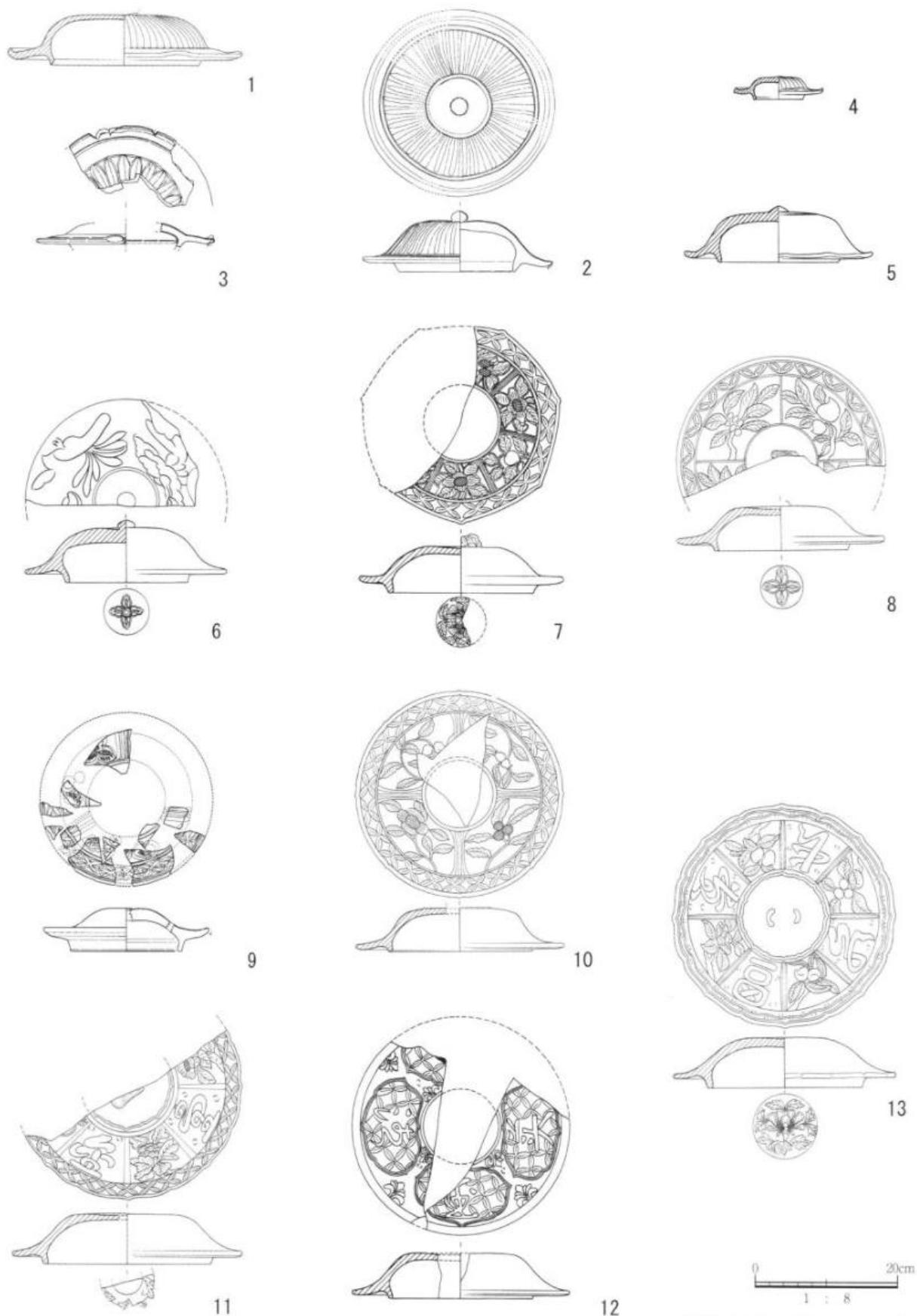


図10 龍泉窯青瓷蓋罐参考例2

※各図、写真的引用は文中に記載

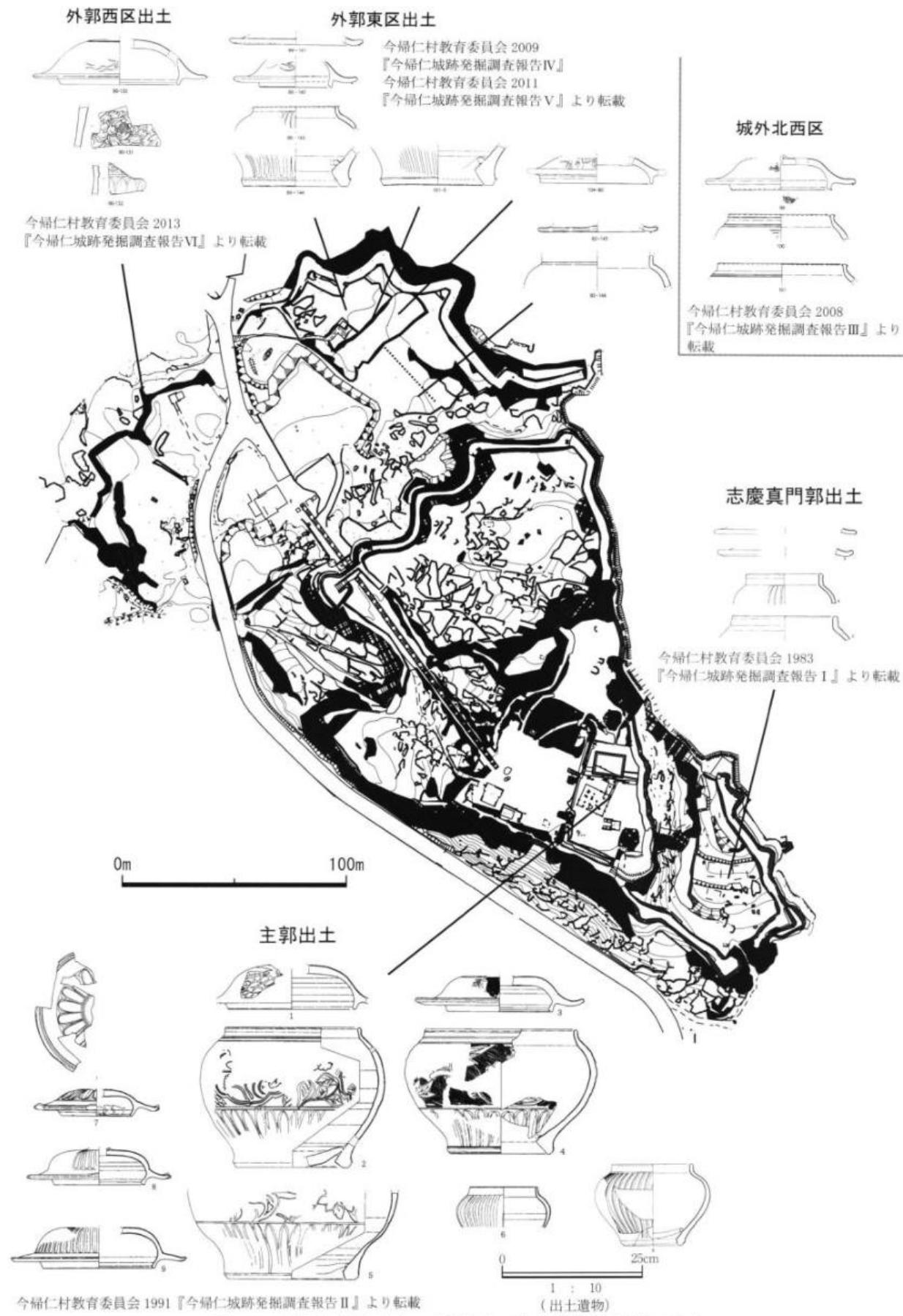


図11 今帰仁城跡出土 報告済み龍泉窯青瓷蓋罐の分布

表2 蓋罐出土地一覧表

番号	器種	接合前 破片数	主郭	東壁	志慶真	大庭	旧道	その他	不明	備考	II層下部ほか
1	罐	3	2	1							
2	罐	2	2								
3	罐	6	5	1							
4	罐	11	6	1	1	2			1	B-1 II 30-40	
5	罐	11	8	3						10号土坑	B-1 II 層下部
6	罐	15	10		3	2				9号土坑	
7	罐	9	3	4	1	1					
8	罐	133	78	50	3				2	2号土坑、4号土坑、 10号土坑下部	C-3 III,C-1 IV,C-D-3 III,C- 1 V,C-2 II 層下部
9	罐	9	7	1	1						B-1 II 65-70
10	罐	61	52	3	2	4				1土坑、13土坑	B-1 II 層下部,C-3 II 造成層
11	罐	9	4	1	3				1		
12	罐	11	2	1	7			1		大内原	B-1 II 下造
13	罐	36	13	21	2						
14	罐	10	10								
15	罐	17	9	8						4号土坑	
16	罐	35	23	2	5	1			4		B-1 II 30-35
17	罐	36	23	7	5	1				9号土坑	B-1 II 30-35
18	罐	58	34	15	8				1		C-1 IV
19	罐	29	13	12	3	1				第3土坑、9号土坑	B-1 II 25-30,C-1 IV,E-1 III ~IV
20	罐	10	5	2	3						
21	罐	4	2	1	1						C-1 III
22	罐	67	42	13	7	1	1		3		C-3 II 40-50
23	罐	5	5							14土坑？	C-1 IV
24	罐	1	1								
25	罐蓋	16	9	1	5				1	3号土坑	C-1 IV
26	罐蓋	5	2			1			2		
27	罐蓋	24	20		2				2		C-1 IV
28	罐蓋	32	23	3	2	1			3		
29	罐蓋	23	10	2	11					4号土坑	C-3 II 30-40
30	罐蓋	8	1	6					1		
31	罐蓋	2	1		1						
32	罐蓋	8	7		1						
33	罐蓋	29	18	2	7			2			B-2 IV 下部
34	罐蓋	23	18	1	2	2					
35	罐蓋	18	11	3	4						
36	罐蓋	26	21	2	3					1号土坑	C-1 IV VI
37	罐蓋	28	21	1	2				4		
38	罐蓋	4	1		1		2				
39	罐蓋	7	4	2	1						
40	罐蓋	1	1								B-1 II 45-50
41	罐蓋	13	4	7		1			1		
42	罐蓋	8	7	1							
43	罐蓋	6	6							14号土坑？	
44	罐蓋	4	4								
45	罐蓋	3	2	1							
46	罐蓋	5	2	3						4号土坑	
47	罐蓋	5	1	4							
48	罐蓋	5	5								



No.1～5外面



No.1～5内面



No.6,7,9外面



No.6,7,9内面



No.8外面



No.8内面



No.10外面



No.10内面



No.11,12,14外面



No.11,12,14內面



No.13,15外面



No.13,15内面



No.16外面



No.16内面





No.18外面



No.18内面



No.19外面



No.19内面



No.22外面



No.22内面



No.20~24外面



No.20~24内面



No.25~27外面



No.25~27内面



No.28,29外面



No.28,29内面



No.30～33外面



No.30～33内面



No.34,35外面



No.34,35内面



No.36外面



No.36內面



No.37~40外面



No.37~40内面



No.41～43外面



No.41～43内面



No.44~48外面



No.44~48内面

第2節 屋敷地6及び外郭20・22次の発掘調査成果について

1. 今帰仁城跡外郭城外地区・外郭中区の発掘調査成果について

今報告書で報告する屋敷地6は、外郭西側城壁より外側に位置している。外郭西側城壁は平成21・22年度に、城外地区としては平成16年度に屋敷地5、さらに屋敷地6の北西側は平成15年度に今帰仁ムラ跡(西区)として屋敷地4の発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、外郭西側城壁のすぐ外側に屋敷地や集落が展開していた城外北西区域の状況が明らかになってきている。屋敷地6とその北西側の屋敷地4は隣接しているが、道路によって分断されており、遺構の連続性などは確認できていない。

屋敷地6では、これまで行ってきた今帰仁ムラ跡の発掘調査と同様、多数の柱穴が検出され、柱穴が集中している2か所確認され、それぞれ建物跡があったと推定した。屋敷地3・4で確認されている高倉と推定された4本柱建物跡や、母屋と倉庫群との空間の使い分けなどを示す特徴はみられなかった。ただし、建物跡と建物跡の間にある石列はこれまでのムラ跡の調査では見られなかつた遺構として注目できる。

外郭中区カーザフ北側試掘調査は、旧県道下の発掘調査(14次調査)において確認された外郭西側城壁(内壁)に被るかたちで確認されたことから、カーザフ北側城壁を把握することを目的とし、調査を行った(20次調査)。カーザフ北側城壁にトレーナーを入れ根石確認調査を行ったところ、カーザフ北側城壁はIII層の上に乗っていることが確認された。加えて、22次試掘調査において行われたトレーナー調査では、カーザフ北側城壁前の平場が全体的にくぼんだ状態であったことが確認され、そこから検出されたII層は柱穴等の遺構が少なかったこともあり、当時の流れ込みの層と考えられた。調査時にIII層の掘削は行わなかったが、II層からは古手のものでは龍泉窯系I・II類等が得られており、主体はIV～V類、逆に細蓮弁文碗などのVI類は少ない状況であった。外郭城壁の構築年代は14世紀中頃～15世紀頃となっており、これらの状況からほぼ同時代に構築された城壁の可能性が高い。

2. 遺物について

屋敷地6において出土した遺物は、グスク土器、青磁、白磁、青花、褐釉陶器などの陶磁器をはじめ、玉、金属製品、石製品などが確認されている。屋敷地6はこれまで行われてきた集落遺跡調査と同様、15世紀～16世紀を主体とする遺物で構成されている。古手のものでは龍泉窯系I・II類が確認されてはいるが数は少なく、龍泉窯系V・VI類が主体となっている。追認するかたちで白磁はE群、青花はII III V類(B C D群)が主体となっており、16世紀後半にかけて少なくなる状況である。

外郭中区、カーザフ北側城壁前の試掘調査では、年代幅の広い遺物が確認されている。II層で得られた多くの出土遺物は龍泉窯系IV～V類の遺物で構成されており、主郭III期頃に遺物が流れ込んでいることが想定された。逆に龍泉窯系VI類や、青花等は少ない状況であった。

3. おわりに

中区の調査ではカーザフ北側城壁の構築年代がいつ頃になるかに焦点をあて調査を試みた。旧県道下の調査によって外郭城壁に被っていることが確認され、当初は監守時代(主郭IV期)にカーザフ郭を閉じたのではないかとしていたが、カーザフ北側城壁はIII層の上から積まれており、15世紀

中頃以降の出土遺物は少ない状況が確認され、外郭Ⅲ・Ⅳ区の出土状況に近いのではと想定された。主郭Ⅳ期頃には利用されていない可能性が高く、外郭城壁とほぼ同時代の城壁と考えられる。しかし、大きい面石で積まれる外郭城壁に対し、カーザフ北側城壁の面石は小さく、積み上げ方法は雑で、勾配も非常に緩い。積み上げ方法の違い、さらにはカーザフ郭を閉じた理由の検証等、今後の課題としたい。

屋敷地6の南には『琉球国由来記』に「ワカツカサノ御イベ」として登場するクバノ御嶽が所在し、このクバノ御嶽を遙拝するサカンケーの拝所（「参詣」または「坂迎え」の意か）の香炉が、調査区北側隅に置かれている。発掘調査で明らかになった成果とこうした拝所としての空間利用との関連性は今回明らかにできなかったので、今後の課題といえる。

《参考文献》

- 伊仙町教育委員会 2005年『カムィヤキ古窯跡群IV』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
- 上原靜 2004年 「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』今帰仁村教育委員会
- 上原靜 2010年 「琉球砥石考」『南東考古』No.29号 沖縄考古学会
- 宇検村教育委員会 1999年『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財調査報告書第2集 第30図 53(P.63)
- 沖縄県立博物館 1997年 『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』
- 恩納村教育委員会 2013年 『山田グスク 遺構確認調査報告書』恩納村文化財調査報告第12集
- 金沢陽 2003年 「浙江省慶元県諸窯について - 甌江水系搬出の龍泉窯系青磁 - 」『青山考古』第20号 青山考古学会
- 九州歴史資料館 1978年『大宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』
- 瀬戸哲也・ほか 2007年「沖縄における貿易陶磁研究 - 14~16世紀を中心に - 」『沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 太宰府市教育委員会 2000年『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類篇-』太宰府市の文化財第49集
- 永井久美男 2002年 『新版中世出土銭の分類図版』高志書院
- 乗岡実 2005年「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~ 資料集』(五十音順)



1. 今帰仁城跡空撮



2. 屋敷地6完掘状況



1. SR1 石列・集石遺構検出状況



2. 遺構検出状況



3. SB01 検出状況



4. SB02 検出状況



5. W-19Gr. 南壁



6. 遺物検出状況(第8図8)



7. 作業状況



8. X-19 Gr. 焼土(Ⅱa層)検出状況

図版3 屋敷地6(外郭16次調査)II層出土遺物(1)



図版4 屋敷地6(外郭16次調査)II層出土遺物(2)



図版5 屋敷地6(外郭16次調査)II層出土遺物(3)



図版6 屋敷地6(外郭16次調査)Ⅱ層出土遺物(4)



図版7 屋敷地6（外郭16次調査）I層出土遺物(1)

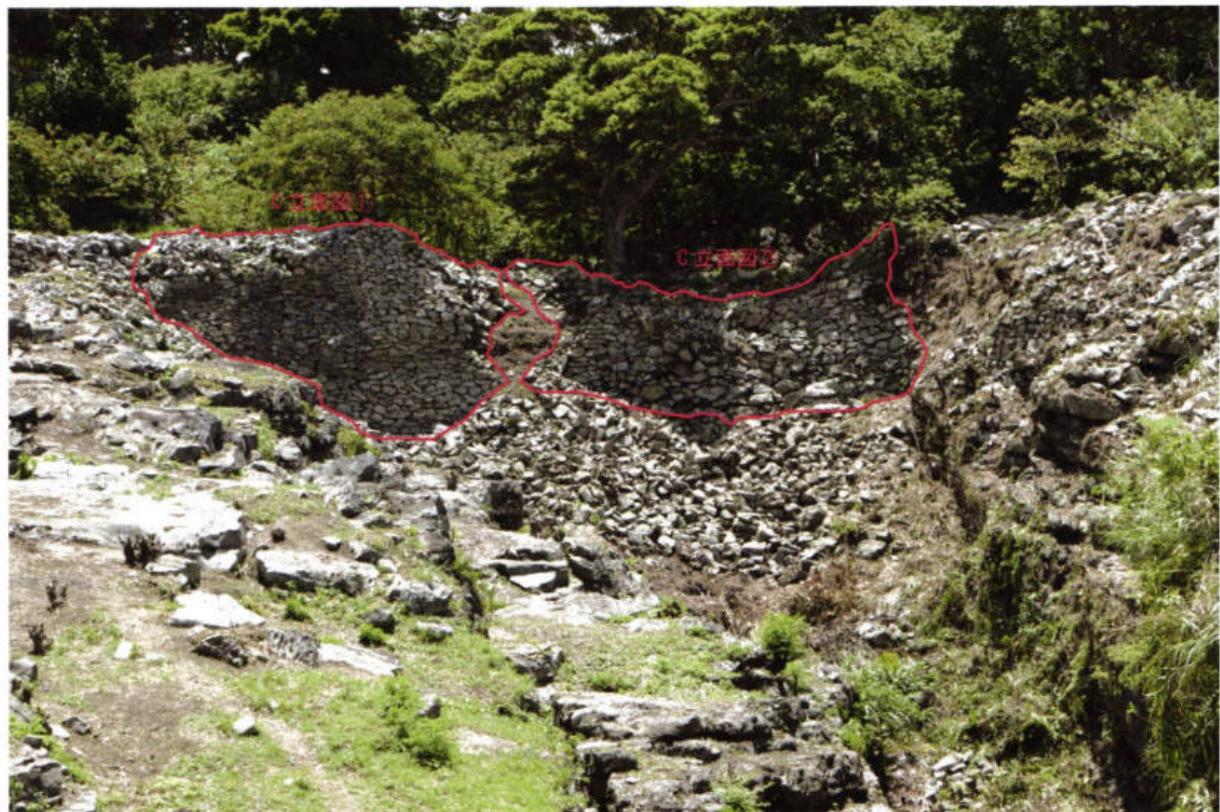


図版 8 屋敷地6（外郭16次調査）I層出土遺物(2)





1. カーザフ郭東側城壁面石検出状況（※図中キャプションは付図1に対応する。）



2. カーザフ郭南側城壁着手前（※図中キャプションは付図2に対応する。）



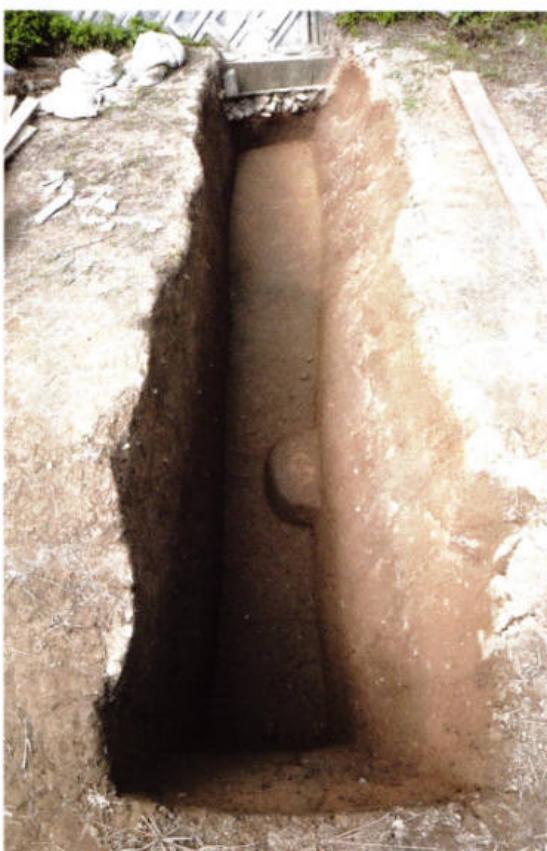
1. カーザフ北側城壁縦断トレンチ城壁検出状況



2. カーザフ北側城壁縦断トレンチ着手前



3. カーザフ北側試掘調査調査区全景



6. C-27 トレンチ遺構検出状況



4. カーザフ郭北側試掘調査作業状況



5. カーザフ郭北側試掘調査遺物出土状況

図版 11 カーザフ北側城壁縦断トレンチ出土遺物・カーザフ郭北側城壁等試掘調査（外郭20・22次調査）II層出土遺物



図版12 カーザフ郭北側城壁等試掘調査（外郭20・22次調査）I層出土遺物



報 告 書 抄 錄

ふりがな	なきじんじょうあとはっくつちょうさほうこく8					
書名	今帰仁城跡発掘調査報告VIII					
副書名	今帰仁城跡外郭発掘調査報告5					
卷次						
シリーズ名	今帰仁村文化財調査報告書					
シリーズ番号	第37集					
編著者名	玉城靖、與那嶺俊、柴田圭子、新島奈津子、佐渡山理沙、有銘倫子、玉城奈緒					
発行機関	今帰仁村教育委員会					
所在地	〒905-0592 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL0980-56-3201					
発行年日	西暦2020年3月31日（令和二年）					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″		
なきじんじょうあと 今帰仁城跡	なきじん いきじゆ 字今泊	473065		26° 41' 34"	127° 55' 41"	23年度 2011.9.29~2012.3.15 24年度 2012.9.11~2012.11.5 25年度 2013.5.9~2014.3.31
						調査面積 m ²
						490m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
今帰仁城跡	城跡	グスク時代 (14~16世紀)	城壁 集石遺構 石列遺構 柱穴 土坑 ほか	グスク土器 カムイヤキ 沖縄産陶器 中国陶磁器 青磁 白磁 青花 褐釉陶器 色繪 タイ陶磁 韓国陶磁 ベトナム陶磁 肥前陶器 玉類 錢貨 金属製品 石製品	今帰仁城跡外郭城 外西地区の発掘調 査を行い、屋敷地 6及び屋敷地7の 機能を確認した。 カーザフ郭の城壁 の根石確認調査、 写真測量を実施し た。 今帰仁城跡の史跡 整備を実施。	

今帰仁村文化財調査報告書第 37 集

今帰仁城跡発掘調査報告 VIII

発行 2020 年 3 月 31 日

今帰仁村歴史文化センター

沖縄県今帰仁村字今泊 5110 番地

TEL 0980-56-3201

印刷 沖縄高速印刷(株)

南風原町兼城 577

TEL 098-889-5513
